
ジャスミン

里中 とおこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャスミン

【Nコード】

N0031I

【作者名】

里中 とおこ

【あらすじ】

イサヤマケイタ 諫山恵太は高校3年生。業界でも注目を浴び始めたスチールモデルだが、人目を惹く外見、穏和な性格、裕福な家庭環境に恵まれながらも、仕事も恋愛もコンプレックスの塊だった。
そんな恵太が新任教師、ヒナサワアコ 雛沢亜子に恋心を抱き、唯一心を開く。しかし亜子が過去、恵太最大のライバルでコンプレックスの元凶である兄、カオル 郁と関係があったと知って…。

派手な世界に身をおきながらも不器用な恵太と淡い恋を引きずる幼

すぎる亜子。いくつもの大きな壁を乗り越えて二人は幸せになれるのか……。見守っていただけなら、嬉しいです。

1・春の日

「よ、有名人。駅前、ド派手に出てたねえ」

靴箱で靴をしまおうと屈んだ恵太の背中に、冷やかしのような、からかっているような軽いトーンの声が降ってきた。

恵太は、はあ、とひとつため息を吐くと、

「やめる。知らん」

顔を見なくても分かるその声の主に答えた。

「まあたまたあゝ。あんな大手メーカーのモデルやってる本人が見てないわけないじゃゝん」

さっさと教室へ向かおうとする恵太の前に回りこみ、屈託のない笑顔でさらに続ける。

「びつくりしちゃったよ。電車降りてすぐさ、目の前のビルから恵太がこっち睨みつけてんだもん。俺、思わず謝りそうになったわ」

「なんだ、それ」

恵太も思わず苦笑いになる。

思ったとおりの声の主、岡田 暁アキラにチラリと目をやる。

恵太と暁。もともとそんなに仲が良かったわけではなかった。

昔からやんちゃで、常に楽しいことを探し回って誰とでも昔からの友達のようになれなれしく接する暁を、どちらかといえば、苦手にしていった。

校則ギリギリの明るくした髪。

これまた校則ギリギリに伸ばしていた。

当然生活指導の教師に目を付けられるわけだけど、あれこれうまく言いくるめてのらりくらりとかわしていた。

それが、だ。

ある日突然、パーマヘアでやってきたかと思えば

「生まれつきの天パです！！！」

と、言い放った。

その、一発ではれるドでかい嘘を堂々としかも真顔で言ってるける図太さに

「こいつ、面白い・・・」

と、素直に思ってしまったし噴出してしまった。

暁の突っ込みどころ満載の、その嘘に凍りついた教室が、恵太の笑いをきっかけに一斉に緩んでしまい、教師までも起こる気力をなくしたということがあった。

恵太たちのクラスの生徒は、成績上位者だけの特別クラスということもあって結構自由が許されていた。

やることをやれば、ある程度大目に見てくれるというアリガちな光景が、このクラスにもあった。

その日以来、なんとなくつかず離れず、干渉されることを嫌う恵太には心地の良い距離で、つるむことが多くなった。

「・・・休みの間に、一段とキツくなった？天パ」

嫌味のつもりで言ったが、暁はしごく嬉しそうに、大きな笑顔を向けた。

「あ、わかる？そうなんだよ。この前知り合った女が、美容師でさ。店閉まった後にタダでやってもらったんだ。カラーも、思ったとおりに調合してもらってさ！
んで、その後・・・」

聞いてもない事にまで話が及びだしたので
よくしゃべるな、と思いながら適当に相槌を打った。

ひとしきり、その美容師とのあれこれをしゃべって
渡り廊下に差し掛かった頃、
暁が思い出したように付け加えた。

「あ、そだ。恵太金曜日の夜、空けといて」

「・・・なんで？」

「合コン」

「断る」

即答した恵太に、可愛くおねだりをするように
両手を顔の前で合わせた。

「頼むっ！この通り！！もう恵太連れて行くなって約束しちゃった」

恵太は心底嫌そうにため息をついて、

暁をにらみつけた。

「・・・」

「や、あのさ。女友達と飲んでるときに、雑誌にお前が載ってたんだよ。

あの、例の日本初上陸のブランドのヤツ。

『あ、恵太じゃん。俺こいつと友達』って言っちゃったら大騒ぎだよ。

ナマの諫山恵太見たい！！って。断れなくなった」

「俺、聞いてないし」

「だって聞いたたら恵太、絶対OKしないじゃん」

分かってんなら誘うなよ。

そんな思いを込めて、さっきよりも長く大きくため息をついた。

恵太は暁とは違い、あまり賑やかな場所が好きではない。

というより、苦手かもしれない。

別に女の方が苦手とか言うことではない。

綺麗な人を見たら、綺麗だなあと思うし、

グラビアアイドルの谷間を見れば、おお！とも思う。

ごくごく一般的な男だと思っ。

もちろん女の子と付き合ったこともある。

全く未経験というわけでもない。

ただ、仕事柄、いろんな女性を見ることが多く

見かけだけの華やかさの裏にある、極端な二面性を見たりするのでどこか距離をとってしまうのだ。

また、合コンのようなコミュニケーションを楽しむ場、

あわよくば恋人候補を見つけてみよう！

といったノリやテンポのよさを求められるのが、

本当に苦痛だった。

「・・・俺、クライアントのパーティーも事務所のパーティーも逃げ回ってるくらい、嫌いなんだけど」

「ややつ、そんなに固くも派手でもないから！！ただメシ食っただけだからさ！！！」

暁も約束してしまった手前だろう。
かなり必死に食いついてくる。

「頼むっ！助けてくれよ！！その子たちT女子医大の看護科なんだよ！」

すっげー可愛いし、ノリもいいから絶対恵太も気に入る子がいるから！」

「・・・ますます興味ない」

そっぴいながら、暁を振り切るように歩くスピードを上げた。
ぷいっつと横を向いてずんずん進んでいたその時。

「あっ！恵太！！！」

「きゃっ！！！」

暁が声をかけたときには、
誰かにぶつかっただらしく、胸の辺りに軽く衝撃を受けた。

「あ、すみませ・・・」

謝ろつと顔を向け・・・。

恵太は言葉を失った。

1・春の日（後書き）

初めまして。里中とおこと申します。

人前に出る仕事、モデルをしているけれど、その器用な仕事振りとは裏腹に、

人間関係、特に恋愛には不器用な高校生が、年上の教師に恋をするお話を

書いていたら・・・と思っています。

一言でも結構ですので、感想をいただけるととても励みになります。こちらからも遊びに行かせていただきたいので、是非お名前やURL残してくださいね！

末永くよろしくお願いいたします。

2・キレイナヒト

まるでスロー再生された映像のようだった。

ぶつかった相手は一瞬よろめいたものの、ゆっくりと顔を上げると真っ直ぐに恵太の目を捉えた。

黒目がちの大きな瞳のせいなのか、ひどく幼く見えた。

もともとまつげが長いのだろう。

目尻は自然にカールし、その愛らしい瞳の何よりのアクセサリーになっていた。

化粧つ気はあるが、恵太がいつも目にするモデル仲間のそれとはかけ離れていた。

肩より少し長い髪の毛は、柔らかな栗色で色白の肌によく映えていた。

毛先をゆるく巻いてあり、

丁寧に手入れしているのだろう。

毛先まで艶めいていた。

恵太が大きいせいもあるだろうが、

相手の女性は恵太の肩に届くか、届かないか。

とても小さく、壊れてしまいそうだった。

着ている物がスーツではなく、
私服だったら、同じ高校生に見えそうだった。

「あ、あの、ごめんなさい・・・」

「！」

恵太が動けなくなったもう一つの理由。

それは声だった。

まるで小さな鈴が鳴ったのかと思うほど愛らしく、
控えめな透き通った声に、恵太は放心していた。

「・・・」

「すみませーん、ツレがボケボケしてて〜。
怪我、ないっすか？」

何も応えない恵太にしびれを切らしたように、
暁がたちまち、その女性に駆け寄った。

「い、いえ、大丈夫です。ごめんなさい、
慌てて階段昇ってたら、前見るの忘れてて」

たはは、と照れ臭そうに笑いながら暁を見ていた。

「あー、分かります。よくありますよねー、
駅の階段とか！ムキになって上ったとき！！」

調子よく合わせる暁は、やはり女慣れしているというか、
距離を作らせない配慮が出来る人間だと言えそうだ。

「あ、あの、本当にごめんなさい。大丈夫ですか？」

心配そうに恵太を向き直り、やはり真っすぐに見つめながら尋ねて
きた。

ああ。このヒトは
こんなにシンプルなのに、人を引き付けることができるのか。

「…おい、恵太？大丈夫か？」

暁の声に弾かれたように我に返った。

「え、あ、ああ。悪い」

「イヤ、いいけど…。…お前、どうすんの？」

どことなく齒切れの悪い暁を不思議そうに見る。

「何が？」

「…ソレ」

暁の指差したほうに目をやると……。

よろめいた女性をとっさに掴んだのだろう。

恵太の右手は、しっかりと女性の左腕を掴んだままだった。

「あ、す、すみません」

慌てて解放すると、女性は真つ赤になって
そしてちよつと困つたような顔で笑った。

「いえ、大丈夫です」

自分の顔がちりちりと熱を帯びていくのが分かった。
その女性から、目が離せなくなっていた。

「あ、あの……。職員室ってどこでしょうか……。
わたし、迷ったみたいで……。」

ものすごく照れくさそうにそうたずねた。

「職員室ですか？こっちの南棟じゃないですよ。
渡り廊下の向こう側の北棟の3階で・・・」

身振り手振りを交えながら、

暁が説明して、

その女性がものすごく方向音痴なんです、
とか答えて。

暁がまた調子いい事を言っつて、2人で笑う。

そんな様子をただただ、横で観客のように
見つめていた。

「ありがとうございます。じゃ・・・」

「お気をつけて！」

軽く会釈して、今恵太たちが通ってきた
渡り廊下を進んでいった。

「お前、ダイジョウブ??」

暁の呆れた声を遠くに聞きながら、
ポツリ、とつぶやいた。

「・・・キレイな、ヒトだな・・・」

3・『理事長の息子』

「てか。アコちゃんは、綺麗系ではなくな？」

恵太にとって、衝撃的だった高校3年の春。新学期。

あの日から数日が過ぎ、今日は中等部の入学式ということで講堂に全校生徒が集まっていた。

中高一貫教育の、英恵学園。

グループ全体として

付属の幼稚園・小学校・大学もあるが、

ただのエスカレーター式と一線を画し

ある程度の学力の維持と、生徒自身の方向性を見極めさせたいという理事長の思想の元。

中高は、別モノとし付属の生徒でも中学受験をしなければ進学できなかつた。

(内部進学者が優遇されるのは正直否めないが)

しかも、高校での募集は一切していないため完全に6年間の一貫教育となっていた。

実際、一流の教育と6年間を通しての学習カリキュラムが組めるため振り落としをしない、個性に合わせた多彩なコースや指導が功を奏

し、
他校よりずば抜けた進学率を誇っていた。

また、効率の良い体型的なゆとりのある学習が可能なため、スポーツを含む部活動が活発で。

生徒たちの on-off の切り替えに一役買っていた。

その生き生きとした文武両道で伸び伸びした生活ぶり。
保護者たちの間でも評判になっていた。

そのためこの少子化の中、毎年志願者は増える一方の有名私立といえた。

この日集まった新入学生も、保護者も、
受験戦争を勝ち残ってこの場にいるのである。

どの顔も自信と強い意志、そして少しの不安と大きな期待に満ちた顔をしていた。

理事長の古くからの友人が所有しているらしい
本物のオーケストラの奏でる曲を背に、入場してくる新入生たち。

「・・・なんか、笑えるくらい、可愛いな」

そんな新入生の顔を見ながら
恵太がいつになく穏やかな顔で答えた。

「だろ？アコちゃんは、絶対、可愛い系だつて！！」
式に参加し、整列している恵太と暁は
なんだかみ合わない会話を声を潜めて続けていた。

出席番号で並ぶと。

諫山いんやまと岡田は、隣同士だった。

「……は？何でそこでひなざわ雛沢先生の名前が出てくんの？」

「……？お前、俺の話聞いてた？今、アコちゃんの話してたの、俺。

お分かり??？」

雛沢 亜子。

あの日。

恵太がぶつかった相手は、幼い雰囲気こそあれど
教師だった。

「……さっぱり分からん。……あのさ、俺が言ったのは、新入生。
難沢じゃない」

「え！恵太ってロリ？！てか、どこ？！その、可愛らしい子！！！！」

「……アホだろ、お前」

恵太の声なんて聞こえていないのだろう。
パイプ椅子から、腰を上げ中腰で、入場している生徒を振り返る暁
ため息しか出ない。

「座れ。理事長出てくる」

オーケストラの音楽が、静かに鳴り止み
新入生全員が着席したのを見計らって、式が始まる。

壇上に理事長が上がる。

「おおー 恵太のとーちゃん、今日もダンディーー」

「……」

この学園の、というかグループ全体の長。

それが恵太の

父だった。

.....理事長の息子。

・・・欲しくもない称号だった。

たおやかな笑みを浮かべ、祝辞を述べる理事長・・・

父。

不満など一つもない。

裏も表もなく、自分の芯を常に持つ、本当に人格者だと思う。
尊敬もしている。

無情の愛を注いでもらって、一流の教育を受けて、
そのおかげで自分がある。

父の働きで、自分は何不自由ない、
むしろ他人より裕福な生活を送れている。

充分すぎるぐらい、分かっていた。

だけど。

同時にたまらなく、苦痛だった。

偉大すぎる父に、臆病な自分。

周りの人間が自分をちやほや持ち上げてくれながらも、陰で笑っている気がした。

出来すぎる、兄と比べられている自分。

そう。

兄、
郁^{かおる}が完璧すぎたから・・・。

4・カワイイヒト？

粛々と式は進み、教諭紹介となった。

壇上に一同に並ぶ教諭たち。

その中でも一段と小さく、そして挙動不審とも取れる
落ち着きのない一人を見つけて、思わず笑みがこぼれる。

黒のパンツスーツで、いかにも教師らしいカッコウではあったが
どことなく、背伸びしたようにも見えて。

何でも着こなして当たり前とされ、自分のものにしていくモデル。
いかに表現するかを考え、創り上げていくのを常としていた恵太に
は、
今、壇上に上がっている
その人物が、とても新鮮に映った。

一生懸命、一番教師らしく見えるものを選んだのだろう。
なんとなくその光景が浮かんでくるようで。

そんな姿も、恵太には微笑ましかった。

緊張しているのだろう。
小さな手に愛らしいハンカチをぎゅっと握り締め、
俯いている。

左から順番に自己紹介をしていき、
ついにその人物の番になった。

「ち、中等部特進クラスと、
こ、高等部国公立文系、私立文系、
あ、あの、あと国公立理系クラスの英語担当となりました、

ひ、雛沢亜子です。

えっと……。

ふ、ふ、不束者ですがっ、す、未永くよろしくお願いいたしますっ
「

勢いよく頭を下げた、亜子。

一瞬、どう反応していいのかわからない挨拶に
静まり返る会場。

「……………アコちゃん……………どこに嫁ぐんだ？」

「ぶっ……………!!」

暁の的確な突っ込みに、
国公立理系クラスの面々はたまらず噴出した。

その笑い声に反応したかのように、ぱらぱらと拍手が起き
そして何事もなかったように次へとマイクが渡されていった。

「たまんないねえー！アコちゃん。
アレで授業できるのかねー」

よっぽどツボだったらしい暁が涙目で、ひーひー言いながら
恵太の肩をバシバシと叩いた。

「まあ・・・なんとかなるんじゃない？」

適当に返しながら、その目はやはり、亜子しか映していなかった。

やり遂げた感をたっぷりと出しながら、
ホッとしたように前髪を直している。

うつすらと紅潮した頬、緊張で潤んだ瞳。

やっぱり恵太は、亜子を綺麗だと思った。

飾らない、その姿が。

5・覚えられた名前

初めて恵太のクラスで亜子の授業があったのは、金曜日だった。

大学卒業したての赴任式で、まるで結納の席のようなとぼけた自己紹介をした新米教師。

しかし、実際の授業はまるで別人だった。

発音はもちろん、的確な文法指導と、ちよつと意地悪なひねくれた質問にも、見事なまでに答え、生徒たちの驚きを誘った。

と同時に、そのギャップから、生徒たちの人気もあつという間に高まっていた。

「亜子ちゃん、おベンキョできるんだな」

恵太がお昼を学食で済ませていると、パックジュースを飲みながら暁が隣に座った。

「まあ、新任でうちのクラス持つくらいだからトーゼンちゃ、トーゼンか」

まるでヒトリゴトのように、暁は片足を折り、椅子の上にあげ肘を突きながら恵太の顔を見た。

「さあ」

興味なさ気に、クリームパスタを口に運ぶ恵太。

「ふっ、お前さ、それ、好きだよね。ソレ喰ってるところしか見たことないかも」

「そうか？」

「おこちゃまだねえ!!」

「ほっとけ」

一瞬フォークが止まるが、さほど気に留めないそぶりですらに食べ進める。

うまいんだけどな。

・・・子ども向きなのか？

なんて思いながら。

「あ！アコちゃん発見!!」

暁の嬉しそうな声に顔を上げると、
混んでいる食堂内で空席を探しているのか
食器の乗ったお盆を持ったまま、きよろきよろと
あたりを見渡していた。

「おい！アコちゃん！！こっちあいてるよー！！！！」

「オイ、暁！」

椅子から半分立ち上がり、ブンブンと手を振る暁に
恵太は戸惑った。

冗談じゃない。

なぜか恵太は亜子とかかわりたくなかった。

ソレは、防衛本能なのか何かの予感なのか。

あんなに目立つ人間と関わって
自分の周りが騒がしくなるのは苦痛だ。

亜子をキレイだと思ってしまった自分……。
今まで感じたことのない気持ちを持っている自分に
自分の中の何かが、関わることを怖がっていた。

そんな恵太の気持ちなど、知るはずもなく
亜子は声をかけられ、少しホッとしたように
暁の前まで来ていた。

「ありがとう。全然空いてないから困っちゃって……。
すごい人気なのね」

にっこり笑いながら、テーブルへお盆を置こうとした。

「そうだよ。うちの学食、案外うまいからいつもこんな感じ。
連れ見つけて、そいつの前後見張って空くの待つのが一番早いよ」

テーブルの上に少し体に乗せながら暁はさり気に
亜子のお盆を受け取って、下に置いてやった。

黙々と食べながら、目の端に映る暁の行動を見ながら、
自然とこういうことのできるころ、ホントすごいな。
などと思う。

「そうなんだ、あ、ありがとう。
優しいのね。えっと……、ごめんなさい、まだ名前覚えてなくて。
……」

「えー、さっきうちのクラスの授業だったじゃん！

岡田！岡田暁！……」

「あ、ごめんなさい。

岡田君ね。もう忘れないから」

慌てたように暁に向けて笑顔を向けた。

「頼むよー。今度忘れたらバツゲームね！
・・・おっ・・・、あ、わり、携帯鳴った。」

あーもしもし？・・・え？何・・・？
聞こえない、ちょっと待って、外出るから」

そっぴいなながら、暁はづるさそっぴに片耳を押さえながら
学食を出て行った。

取り残された恵太と、亜子。

呆気にとられながらも、
ちよつとぼつの悪かった亜子はホツとしながら
恵太の向かい側の椅子に腰掛けた。

「ダメだよね、生徒の顔と名前が全然一致しないで」
ふと顔を上げると、亜子が恵太を見ながら
本当に困ったように笑っていた。

あ、この顔・・・。

あの日と同じだ・・・。

「・・・仕方ないんじゃないですか。うちのクラス、今日初めてだったんだし。一度に覚えられるわけない」

ふと、ぶつかった目を思い出しながら、それを悟られないように下を向きながら答えた。

手は残り僅かなクリームパスタを巻き取り始めた。

「ありがとう。えっと・・・」

諫山・・・恵太くん

・・・だよな？」

一瞬、手が止まる。

何で？

思ってもいない口から自分の名前が出てきて
恵太は言葉を失った。

「……」

「あれ、違った??」

「……や、……合ってる……けど……」。

何で知ってるの?」

ひょっとしてモデルの仕事の関係で、

顔と名前を見聞きしているのか。

「あ……。えつと……。」

なぜか、とても恥ずかしそうに笑う亜子。

「昔、好きだった人と……苗字が同じだったの。
この前ぶつかったとき、名札が目の前にあって……。」

こっちじゃめずらしくないのかもしれないけど
私の地元じゃ、あまり聞かない苗字だったから、少しびっくりしち
やっただの。

で、……覚えてたの……かも？」

耳まで真っ赤にしながら、全部話したくせに
語尾だけ疑問形にして、ごまかしたつもりだったのか。

その飾らない、困ったような笑顔を見て
うるさく騒ぎ出す鼓動に戸惑いながらも
やっぱり亜子はキレイだと思った。

6・6時間前の失敗

「好きだった人と、同じ苗字だったの」

そう言われただけなのに、心臓がうるさいぐらいに騒ぎだしたのを感じていた。

名前を覚えられていた…。

目立つ暁ではなく、自分が、先に…。

モデルをしている自分ではなく、学校での自分を覚えてくれていた…。

なぜかそれが嬉しくて。

心臓の騒がしさを、心地よくも感じていた。

「れ？恵太、なんか機嫌いい？」

教室で自分の机に座っていると、
やっと話を終えたらしい暁が恵太の前に来るなり、
顔をのぞきこんで、にやりと笑った。

「別に」

「いや。顔が緩い！」

「なんだよ、それ。俺はねじか」

思わず漏れる笑いを押さえつつ、
先ほどの食堂の出来事を思い返していた。

最後の一口しか残っていないパスタを皿に置いたまま、
結局亜子が食べ終えるまで話し相手になった。

とは言っても、もともと無口な恵太。
無邪気に話をする亜子に相槌を打ったり返事をしたり。
相手という相手はしなかったが、

「ありがとう。諫山君のおかげで楽しかった！
まだ仲のいい先生もいなくて、ちよっと寂しかったの。

おいしくご飯が食べられたから、また午後から頑張れそう!」

亜子は、今までの中で一番リラックスした笑顔で

恵太に笑いかけると、小さく手を振って職員室へ戻っていった。

「ふう〜ん? まいいけど?」

恵太がそういうジョーダン言うときって、たいてい機嫌がいいときだからさ〜」

「そうか?」

恵太の机の前に座り込んで、意味ありげににやりと笑った。

「絶対、そう! ま、その調子で今晚も頼むわ!」

「あ? ああ」

暁は立ち上がると両肩を強く、ボンボンツ! と2回叩いて、自分の席へと戻っていった。

思わず返事をしてしまった後、ふと考えた。

「今晚?」

意味が分からず、独り言のようにつぶやく。

あ！！！！！

そう、今日は、金曜日。

合コンの日だった。

慌てて、恵太の斜め後ろのほうに座る暁を振り返ると
暁はいたずらが成功したみたいなの、満面の笑みで
片手をひらひらと揺らして見せた。

立ち上がってさっきのはナシ！と言いに行こうとしたとき
ちょうどチャイムが鳴り、数学担当の教師が入ってきたため
恵太は中途半端に浮かした腰を、
再び沈めるしかなかった。

「くそっ・・・」

どうやら今日は、逃げられないようだ。

7・約束の5分前

「はあああ……」

大きな溜息をつきながら、恵太は事務所のソファに思いつきり背中を預ける。目を閉じると、疲労感からじんわりと体が重く沈んでいく感覚に陥る。

「なあに、大げさな溜息なんかついちゃって。若いくせに」

テーブルに淹れたてのコーヒーを2つ置きながら、チラリと恵太に目をやると、そう吐き捨てた女性。

諫山 樹いさやま いつき

恵太の母親で、この芸能事務所の代表取締役社長。ただし仕事では、旧姓のまま『姫川 樹』で通っていた。

「だって、こっちの名前のほうが華やかだし。諫山グループの力で仕事してるとか言われたくないし」というのが理由だと言っていた。

そのため恵太の母親であることは、事務所の中でもごく一部の人間しか知らない。恵太もそのつもりで接していたし、実際特別扱いを受けたこともない。

自分自身も親の七光りと思われるのはまっぴらだった。

今は、雑誌の取材を受けた事務所の応接室にそのまま2人。記者たちが出て行ったあと残っていた。

そのためお互いかなり、地が出ている状態だった。

「うるさい。取材は苦手」

「そっちがうるさい。何が苦手よ。仕事選ぶなんて、100年早い」
テーブルを挟んだ向かい側のソファアに座り、
コーヒーを飲みながら、樹はぴしゃりと言っただけだ。

「分かってる。だから、選んでないだろ」

「だったら何が気に喰わないわけ？」

気に喰わない訳。

そう、ただ一つ。

「今日、合コンなんだよ」

ゆつくりと体を起こしながら、チラリと樹の様子を伺う。事務所のイチオシモデルが、合コンなんて言い出したならなんて言うだろうか。

「へえ……、めずらしい。恵太が合コンねえ。相手は？」

一瞬手を止め、恵太を見据えた後、嘘らしい笑顔を作って再びカップを口に運んだ樹。

どうやら向こうも様子を探っているらしい。

恵太は立ち上がり、冷蔵庫へ向かいながら答える。

「知らない。暁の友達らしい。どこかの女子大生だが、看護婦だったか……」

冷蔵庫から牛乳を取ってくると、

恵太用の大き目のマグカップに注がれたコーヒーにたっぷりと加えた。

「ふうん。どーでもいいけど」

「週刊誌ネタになるような行動はやめて、だろ」

樹の言葉を遮って奪った後、
カップを口に運んだ。

一方の樹は、きよとんとした顔をしたあと、
楽しそうに笑った。

「分かってるじゃない。じゃ、問題ないわね。
まあ、アンタも青春真っ盛りなわけだし？
たまにはいいんじゃないの？」

恵太が、そういう場が苦手と知って
からかうように言った。

「ハイハイ。あ、だからメシ、今日いらないから」

最後にぐっとコーヒーを飲み干すと、
立ち上がり、ソファアに投げ出していた荷物を手にした。

「了解。泊まるなら連絡してよね。あ、あと相手は慎重に選んでよ
？」

「・・・」

恵太は無言で樹を睨みつけると、
樹はそんな息子がおかしくてたまらないという風に
声を上げて笑っていた。

そんな樹を背に、部屋を出る。

携帯を見ると、すでに約束していた7時をあと5分で迎えようとしていた。

と同時に、けたたましい数の不在着信と未読メールに気がつく。

どれもすべて曉だった。

「はぁ・・・」

不在履歴にずらりと並んだ曉の名前の中から適当な1件を選ぶと、通話ボタンを押しながら歩き始めた。

8・合コン

暁が指定して来た店は、食事も出来て、気軽に飲めることで若者に人気の、いわゆるダイニングバーだった。

まだまだ売り出し中の新人といえど、目立つとマズイ、モデル業の恵太に気を遣ったんだろう。

大通りから数本内側の路地にある、隠れ家的な場所だった。

逆に言えば、非常に道が分かりにくく目立たない風貌のおかげで恵太が到着したのは約束の7時を30分以上オーバーしてからだっ

店内は薄暗く、間接照明でどこか異空間に来たような感覚を演出していた。

入って左側が4つの個室仕様になっていて、間仕切りと緞帳代わりに、すたれ簾風のロールカーテン。

板間ではあるけれど、掘りごたつのように足を下ろせた。黒のローテーブル、黒の薄い座布団のほかにご丁寧に2人が限界のラブソファも鎮座してどこかのワンルームのように

全体的にゆったりとした空間だった。

「恵太！ここ！！」

ある一部屋からロールカーテンを左手で少し押し上げ、顔だけをのぞかせた暁が、空いていた右手を大きく振った。

「悪い。取材伸びた」

軽く片手を上げ、暁のほうに近づく。

「いや、ホントト助かった！これでお前来てくれなかったら俺マジ恨まれたよ」

心底安心しきった顔の暁に僅かに笑みがこぼれる。
大事な友達だ。

こうやって喜ばれると、やっぱり無理してでもきてよかったかななんて思う。

室内からは「ヤダ、マジ諫山恵太来た！！」とか、

「やーん！緊張する！！」「マジ狙うから！！」など、口々に聞こえてきて

恵太は少し、たじろいだ。

「とりあえず、中入れよ！」

そう促されて中へ足を進めると、

女性3人は慌てて座りなおし、各々髪を押さえてみたり、スカートのすそを直したりしていた。

「お疲れ〜！」

だるそうに肩肘をテーブルにつき、空いた片手を挙げ、ヒラヒラさせているのは

恵太の同級生で、暁とよくつるんでいる悠斗ゆうとだった。

暁同様、明るい性格と彫りの深い、男らしさのあるルックス。

マメな性格で、国理という超ハードなクラスなのに
バスケット部に所属しキャプテンまで務めているツワモノだった。
もちろん校内でもモテる方だ。

それでも。

恵太の顔を見た途端、

小さく驚く者、思わず見惚れる者、興奮して隣の友人を叩き出す者。
3者3様の反応だった。

恵太は、初対面で目を奪うオーラがあるのは

本人以外、友人含め誰もが認めていた。

乾杯を交わし、それぞれお酒が進んでいく中、
暁や悠斗を中心に、場を盛り上げていた。

3人とも、女子大生で看護科の4年生、21歳だということだった。
女子医大ということもあるのか、どこか華やかな印象だった。
詳しくは聞いてはいないが、どうせ暁がダーツバーあたりで
逆ナンパされたんだらう。

その中のミキという女子大生は、
初めこそ恵太に目を奪われていたが、
無口で会話が発展しない恵太に痺れを切らしたのか。
今では甲斐甲斐しく暁の世話を焼いていた。

他の二人も、おしゃべり上手な悠斗に惹きつけられ
まるで恵太がいないような、最初の緊張感が嘘のように会話を楽し
んでいた。

恵太はといえば、話しかけられれば話すという感じだった。
そのため、今こうやって質問攻めに合わないことに、ホツとしながら
グラスの中身を飲み干した。

「あれ、恵太どこ行くの？」

「トイレ」

「早く帰って来いよぉ」

立ち上がる恵太に、気がついた悠斗と暁に軽く笑い
ロールカーテンを半分だけ開け、中腰のまま部屋を出ようとした。

ちょうどそのとき、恵太たちの個室の前を誰かが横切ろうとしてい
たため、

恵太の頭がぶつかってしまった。

「きゃっ」

「あ、すみま・・・」

反射的に顔を上げ
。

恵太は言葉を失った。

いつかの、あの日のように。

9・偶然

恵太がぶつかった相手

。

薄暗い店内で、見上げる格好の恵太には逆光になり、一瞬誰だか分からなかった。

「え？・・・諫山君？」

その声に目を凝らすと、

「あ・・・。雛沢先生・・・」

こんなところで出逢うとはお互い思ってもおらず、ただただ驚き、動けなかった。

中途半端に体を出したままの恵太の様子に気がついた悠斗が何事かという感じで顔を出した。

「わ！びっくりしたー。雛沢先生じゃん」

「え！亜子ちゃんいるの?!おー偶然!」

半分酔っ払いの暁まで出てきて、廊下は一気に賑やかになった。

「こんばんわ・・・で、あなたたち・・・飲んでるの?!」

驚きを隠せない亜子だったが、ハツとしたように軽く睨んで見せた。

「はて。なんのことでしょう?」

「亜子ちゃん、内緒にしてえ」

悠斗と暁それぞれの反応を見て、恵太のほうにも顔を向ける。

「・・・諫山君、あなたも?」

「俺は飲んでない。ゼロビールと、ウーロン茶」

恵太のその言葉は本当だった。

人前に出る仕事をしている以上、法律遵守というのは、まあもちろんだがそれは自分で決めているルール。

暁も悠斗もそれは知っていたので、無理に飲ませようとしなかった。

今まで飲酒したことがないといえばウソになるが

外では絶対に飲まなかった。

「・・・ホント？」

「あーセンス、それはホント。恵太、絶対飲まないもん」
「週刊誌載っちゃうと困るしねえ」

恵太が答える前に、悠斗と暁が口々にかばった。

「週刊誌？」

「あれ、センス、知らない？」

「悠斗！」

恵太は言葉を遮ると、
亜子の顔を見た。

「取り合えず、今、ここで会ったのは俺だけってことにしてくれませんか？」

それ以上、聞いて欲しくない。
そう言いたげに話題を変えた。

「諫山君・・・」

恵太の名前を呼ぶ亜子を見た暁が
何かいいことを思いついた顔をして、
にやっと笑った。

「亜子ちゃん、ゲームしない？」

10・奇立ち

突然のゲームの提案に、視線が朧に集まる。

「亜子ちゃんにすごく有利なゲーム、しようよ。」

亜子ちゃんが勝ったら、俺らのこと、学校に言っても言わないも文句
言わない。

でも、亜子ちゃんがもし負けたら、そのときは俺らのこと、見てない
事にしてくれない?」

無言で考える亜子。

「ヒナ?何やってんの?」

隣の部屋から、廊下に一人の男性が
出てきた。

亜子のことを『ヒナ』と、呼びながら。

「トイレ行っただけ帰ってこないから、酔いつぶれてるのかと思
ったら……。」

若い子にナンパされちゃった?」

からかうように亜子に笑いかける。

ただし、恵太たちには笑顔の影から、鋭い視線を向けて……。

「ヒロ、違うの。この子達……私の学校の生徒なの」

困ったようにヒロと呼ばれる相手を見て、それから恵太たちに視線を戻した。

小バカにしたような男性の視線。

亜子は亜子で『この子達』なんて。

たいした年の差もない、

昨日今日あつたばかりの新任の教師に、急に土足で上がりこまれたような感覚。

なぜか分からなかったが、恵太は無性に腹が立ってきた。

「年上の女になんて、興味ないんで。充分足りてます」

そこにいる全員がぎょっとした。

「け、恵太？」

「ちょ……、お前、どした?!」

慌てふためく暁と悠斗。

それ以上に一番驚いていたのは、亜子だった。

ヒロと呼ばれた男性をじっと見据えたまま
睨むでもなく、怒るでもなく。

ただ冷静に一本芯の通った目で、完全に相手の動きを封じ込めていた。

そんな恵太を、大きな目を一層大きくし、
驚きの表情で見つめていた。

亜子も複数の友人と飲んでいたのでだろう。
騒ぎを聞きつけて、隣の個室から複数の男女が出てきた。

「俺たちが飲み会してたことは事実です。
校則違反どころか法律違反だし。」

後は煮るなり焼くなりお好きにどうぞ。

ヒナサワせんせい」

恵太は低い声でさういって、

最後は『せんせい』をわざと強調して亜子の目を捉えた。

一気に空気が凍りつくのが分かった。

「・・・俺、帰るわ」

恵太は表情を緩め、暁と悠斗に向き直ると部屋へ荷物を取りに戻った。

部屋にいる3人の女子大生に軽く謝って、テーブルに数枚のお札を置くと荷物を持って出た。

「また連絡するわ」

暁と悠斗にそう言うと、

亜子とヒロには目もくれず、

真っ直ぐに店の出口へと向かった。

恵太に軽蔑された態度を取られたからか、

恵太を怒らせた後悔か。

はたまた教師としてのプライドを傷つけられたからか・・・。

一度も振り返らなかった恵太は

亜子が顔を真っ赤にして、瞳を潤ませていることには気付かぬままだった。

11・奇立ち 2

4月になり、桜も散った春めいた気候とは言っても夜風はまだまだ冷たかった。

一本大通りへ出ると金曜日の夜の飲食店街は、どこも賑わっていて明るく華やいだ空気にあふれていた。

恵太はタートルネックを少し伸ばし、

冷たい風から少しでも体を守ろうとした。

賑やかな空気から、少しでも自分を隠したかったからかもしれない。今の自分には、とても不釣合いで、

とても不愉快に思えていたから。

店から出たあと。

自分の言動が、自分で信じられなかった。

何であんな気持ちになったんだろう。

あんなことしたんだろう。

適当に放って置けばよかったのに。

雛沢先生も雛沢先生だ。

親しげに男を呼び捨てにし、

お酒の入った、あんな無防備な顔で笑って見せて。

まるで自分たちなんて、目にないかのように子ども扱いして……。

そこまで考えて、恵太ははっとした。

何だ？今の。

何で雛沢先生が男と一緒にイライラしてんだ？

別に大の大人だ。

彼氏がいようと不思議ではないし、

その人呼び捨てにしても問題はない。

お酒に酔うことだって、先生の勝手だ。

何で、俺が……。

「あー、もう!!」

一人イライラしている自分に嫌になる。

短く整っている髪をくしゃくしゃっとしながら
頭を掻いた。

歩くスピードを速めようとした時……。

「……さやま、くん、待ってっ」

後ろから、自分の名前を呼ばれたような気がした。
立ち止まって後ろを振り返ると。

「!?!??」

「っ、たあ……」

恵太にダイブしてきた、亜子が、
ぶつめた鼻を押さえながら、顔を上げた。

「先生？」

「ご、ごめんねっ、ひ、久しぶりに全力で走ったら……はあ……」

はあ……、あ、足……はあはあ……絡まっちゃって、こ、転ぶかと、おもっ……思った……」

息を切らせて、肩を上下させながら
恥ずかしそうに笑う亜子を見て、
恵太も思わず笑顔になる。

「ふっ……。足、速いんだ」

「ち、ちがっ……。いさ、はあはあ……諫山、くんが速いか、ら……」

ひっ、必死だったんだよ……」

顔を下に向け、上がった息沈めようとしている亜子を見ていたら、
さっきまでのイライラしていた気持ち
が嘘のように今は穏やかになっていた。

「どうしたの？そんなに急いで」

「・・・あ、あのね・・・」
「うん？」

ようやく息が整ったかのように見えた亜子の肩が、
先ほどとは違って、かすかに震えているようだった。

「・・・先生？」

「諫山君、ごめんね」

目にいっぱい涙を溜めた亜子が、
顔を上げながら、そう言った。

11・奇立ち 2 (後書き)

久しぶりの更新となってしまいました。もし見てくださっている方がいましたら、ごめんなさい。

これからもチビチビ書いていきますのでよろしくお願いいたします。

12・ゲームの行方 1

恵太が出ていく背中を、亜子はただただ立ち尽くして見送るしか出来なかった。

恵太がなぜ、怒ったのか分からなくて混乱した。

恵太が見せた、自分を拒絶するような、軽蔑したような目がすごく怖かった。

そして。

恵太を疑って傷つけた自分が、すごく恥ずかしかった。

知らず知らずのうちに、手が震えていた。

手を口元に当てて、何とか震えを押さえようと

両手を握り締めてみるけれど、それは収まりそうになかった。

「あゝあ、恵太、怒らせちゃった」

暁が、わざとらしく。

がくつと肩を落として苦笑いしてみせる。

「まあ、なんだ、その。先生のせいじゃねーよ、うん」

頭をかきながら、悠斗は亜子を落ち着かせようとして声をかけた。

「たださ・・・」

ふつと顔を上げた暁は、今まで見せた事のないような真剣なまなざしで、こう、続けた。

「恵太のこと、信じてやって。」

あいつは、絶対飲んでない。やましいことは何一つしない」

「……」

暁の言葉に続くように悠斗も亜子に顔を向けた。

「あいつ、モデルやってるの知らない？」

「……モデル……?」

諫山君が……モデル？

「ああ……どこかで見たことあると思ったら、駅前の看板だ」

亜子の隣でヒロがつぶやいた。

そんなヒロを一瞥して、暁は続けた。

「あいつ、仕事にスゲー誇り持ってやってるんだと思う。」

絶対飲まないし、女遊びもしない」

「俺たちと違ってね」

悠斗がからかうように言う。

「今日だって、俺が無理やり約束取り付けて来させたんだ。恵太ダシにして合コンセッティングした手前、俺の顔立てるために来てくれたんだよ」

最後のほうは個室内にいる女子大生に聞こえないように
声を潜めて笑って見せた。

可笑しそうにくくつと笑って、悠斗が続ける。

「人に見られる、夢を与える仕事をしてるって自覚があるから、
絶対裏切らないよ？アイツは」

暁も悠斗も、心底恵太を大事にしているのが伝わってきた。
そして、恵太も、彼らを大事にしている。

だから、諫山君は侮辱された気がして怒ったんだ……。

「わたし……。ひどいこと、しちゃった……」

言葉に出すと、自分のしてしまったことがますます自覚できて
なんだか目頭が熱くなった。

思わず下を向くと。

「亜子ちゃん、今ならまだ、間に合うよ？」

「……え？」

ふっと顔を上げると、そこにはいつものニヤリ、と笑った
いたずらを思いついたような暁の顔があった。

13・ゲームの行方 2

「先生、ゲーム覚えてる？」

「え？」

亜子は軽く首をかしげながら暁の顔を見た。

とても年上とは思えない、なんとも愛らしい仕草をする亜子。本人は無意識だったが、クセミたいなものようだった。

「俺の名前。今度会ったとき覚えてなかったらバツゲームってヤツにやり、と笑う暁。

・・・しまった！！！！

全く思い出せない亜子は、先ほどまでの、あの涙は一瞬で引っ込んだ。

隣のヒロに助けを求めるように顔を向けるが

「ええ?!俺??!!んな、無茶振り!!」

ヒロは至極当然のリアクションで。

ど、どどどど、どうしよう!!!

わたし、先生ぶっておきながら

生徒の名前すら覚えていないなんて!!!

自分の頬を両手で押さえ、
文字通り右往左往する亜子。

慌てふためく亜子を見て。

暁と悠斗はしごく楽しそうに笑っていた。

「やっぱり覚えてないかあ」

「恵太のことだけは覚えてるのにねえ」

悠斗まで一緒になって亜子をからかう。

その言葉の真意は、本人だけが気付いていなかったけれど。

暁と悠斗は顔を見合わせて、なにやら意味深に笑い合つと
亜子に言った。

「亜子ちゃん、俺らのこと、学校に言うなら言ってくれて構わない
よ」

「えっ？」

先ほどとは、ちがう条件に亜子は視線を暁に戻す。

「事実だから、仕方ない。その代わり、恵太の無実だけは信じてあ
げて。」

それから、今すぐ恵太追っかけて」

「わたし・・・」

戸惑う亜子。

どうしよう……。

恵太の名前が出た途端、うるさく騒ぎ出した心臓。

「仲直りしてやって。恵太も先生に冷たくして後悔してると思うから」
「ら」

悠斗にも優しく促されると、ますます鼓動が早くなった。

「今なら追いつけると思うから。駅に向かってるはず」

「……亜子ちゃん、今行かないと、後悔すると思うよ?」

そっだ……。

傷つけたこと、ちゃんと謝ろう。

ちゃんと、顔を見て、ごめんねって言おう。

そう思った途端、荷物を取ると、

亜子は走り出した。

14・反則技　〜恵太編〜

目に涙を溜めた亜子を見て。

恵太は自分でも信じられなかったが、なぜか温かいものが胸に広がっていくのを感じた。

亜子が、今、目の前にいる。

自分を追いかけてきてくれた。

それだけで。

それだけで満たされている自分に戸惑いながらも嬉しい気持ちを隠せなかった。

泣かせてしまっているのに、嬉しいだなんて。先生に言ったら、嫌われるだろうか。

そして。

「どうして先生が謝るの？
怒られて当然でしょ。俺ら」

そう。

自分の行動がひどく幼く見えて
気まずくなった。

「わたし……。
諫山君のこと、疑ったの……。
なのに、最初なんであなたが怒ったのか、わからなくて……。
本当にごめんなさい」

深々と頭を下げる亜子を見て、
恵太はますます気まづかった。

「や……。別に俺、疑われたから怒ったんじゃないけど……」

「へ？」

恵太の言葉に、亜子は思わず顔を上げて
きょとん、とした。

「じゃ、じゃあ……。なんで？」

「……。何でだろう。忘れた」

恵太はしばらく考えるように腕を組んでいたが、
出てきた答えはそれだった。

「……はい？」

ワケが分からない、といった風に眉間にしわを寄せた亜子は
じゃあ自分は何で、ここにいるのか。
なんで泣くほど後悔しているのか。
さっぱり分からなかった。

呆気に取られている亜子の気持ちを察したのか
恵太は言葉を続けた。

「いや。怒ってたんだ、すごく。
でも俺が怒るのって、おかしい話で。
何で怒ってるのか考えてたら、先生が来た」

真っ直ぐに亜子を見つめる目。

亜子は、先ほどヒロをにらみつけたそれとは
全く違う眼差しに、ドキツとした。

芯の強さを思わせる、凜とした切れ長の瞳。
その瞳に見据えられると、なぜか目が離せなかった。

時間にしては数秒なのに、
その僅かな時間に押しつぶされそうだった。

「先生の顔見たら、もうどつでもよくなった」

一旦下に向けた顔を上げ。

ふっと柔らかな笑顔でそう言う恵太。

亜子は初めて見た、恵太のそんな優しげな表情に

跳ね上がった心拍数と、沸騰したように熱くなる頬を自分自身で感じながら、

周りの音が何も聞こえなくなった。

キーンと戦闘機のような音を立てて思考が止まる寸前の脳で。

この笑顔は反則だ……。

そう思った。

15・反則技　↳ 亜子編　1　↳

恵太の、本人すら自覚していない反則技に
頭のとっぺんからつま先まで貫かれてしまい、
身動きできない亜子。

そんな亜子に、

恵太は可笑しそくに笑ったまま、

「先生、顔真つ赤。大丈夫？」

そう言つて、背の低い亜子に合わせるように
その長身を折り曲げながら、顔を覗き込んできた。

無邪気に顔が近づく。

完全に射抜かれていた亜子にとって、
その行為は毒でしかなく、思わずはっとして反射的に顔を背け
不自然なまでに後ずさりした。

「も、もう！大人をからかわないのっ！！
何よ。一生懸命追いかけて損しちゃった」

照れ隠しに手グシで髪を
整えてみせる亜子。

本当は自分の気持ちを整えているのを
悟られないようにと祈りながら。

「ははっ、ごめん。先生、何も悪いことしてないのに。ホント、ごめん」

ちらり、と横目で恵太を盗み見すると。

今度は先ほどの大人びた笑顔とは違い
きれいな顔を、惜しげもなく、くしゃくしゃにして笑っていた。

片手を「ごめん」と、顔の前で立てながら。

その顔をまともに見られるはずもなく。
咳払いをしながら不自然なまでに夜空を仰ぎ見た。

冷めるどころか、ますますちりちりと熱い頬に、
亜子自身も、すっかりうるたえていた。

耳元に心臓が移動したんじゃないかと思うくらい、
自分の鼓動が煩くて敵わない。

相手は生徒なのに！

年下の18歳の男の子相手に完全に見惚れてしまった。
完全にペースを持っていかれていた。

し、しっかりしなさい！！

なんて自分に檄を飛ばしてみるも、効果なし。

当の本人は、亜子の気持ちなんて知る由もなく。
夜空を見上げる亜子を不思議に思ったのか

長い両手を空に突き上げるようにグリーンと背伸びをしながら夜空を仰ぎ。

「何が見える？」

なんて、言い出す始末だった。

「な、何も見えないな、と、思ってたっ」

・・・ああ、もう、何を言ってるのか分からない。

もうこのままここからダツシユで逃げるか、
いつその事消えてしまいたい！！

顔のやり場を失った亜子は俯くしかなく、
自分の体が小さくなって行けばいいのに、なんて考えていた。

亜子の答えに伸ばしていた両手をパタン、と下ろし
きよとんとしていた恵太が、
ふっと優しい口調で言った。

「とりあえず、どこか座る？それとも、戻る？」

「え？」

恵太がなにやらポケットをこそこそしながら続ける。

「先生走り疲れてるみたいだし。」

俺は、もう戻らないけど、先生友達と一緒になんだろ？
戻るなら店まで送る」

取り出した携帯の画面を確認し、いじりながら

「暁からメールだ」

と、つぶやいた。

その言葉に亜子は、弾かれたように
恵太の腕に近寄った。

「あ！忘れてたっ！！」

恵太の手にある携帯を指差して

「あのね、岡田君に『恵太と会えたら
電話くれ』って言われてたんだっただ」

16・反則技 く 亜子編 2く

「あのね、岡田君に『恵太と会えたら電話くれ』って言われてたんだった」

その亜子の言葉に、今度は恵太が射抜かれる番だった。

今、恵太って……。

恵太のすぐ隣で、見上げるように恵太を窺っている亜子。暁のセリフとして言われたと分かっているのになぜか、どんっと、一瞬胸が高く跳ねた。

「……恵太君？」

あ……、まただ……。

自分の名前なのに、初めて聞く名前のような響き。激しく騒ぐ心臓と裏腹に、呼吸はその役目を一切忘れていた。

恵太だって全く恋愛経験がないわけではない。

彼女が出来れば当たり前のように名前を呼ばれたし、彼女でなくとも、名前で呼ぶモデル仲間なんて、それこそゴマンといる。

別にそれを特別意識したこともなければ、驚くこともなかった。

それはただの無機質な、ただの「名前」でしかなかったから。

でも。

今、亜子に呼ばれたとき。

まるで自分の名前をはじめて知ったような錯覚に陥っていた。

無機なものが、急に生命を与えられ有機となったような。

あ．．．。

俺、恵太って言う名前だった．．．。

自分の名前が彩付きいろづき、今初めて生まれたような、不思議な痺れ。

固まったまま、目を丸くしている恵太を見て、
亜子は「？」といった感じで首をかしげていた。

「おーい、恵太君？聞いてる???」

ぐいっと、さらに恵太に近づき、一生懸命手を伸ばして
恵太の顔の前で手を振って見せた。

色白の、小さな顔を縁取るようにふわり、

と巻かれた艶のある髪。

亜子の動きにあわせて、小さく跳ねるように揺れる。

「あ、ああ、悪い。じゃ、これ・・・」

吐いているか吸っているか、分からないような呼吸をしながらなぜか震えている指で、暁の番号を表示させた。発信ボタンを押したあと、亜子の手のひらに乗せる。

「ありがとう」

亜子がふわっと笑いながら、受け取る。

亜子から漂ってくる、ほのかな薫りが恵太の鼻腔をくすぐった。

その、甘い薫りを感じながら小さな横顔を見つめ。

反則だろ・・・。

赤くなる顔を隠すように手で口元を覆い、

誰にも聞こえないほど小さな声でそう呟いた。

16・反則技 く 亜子編 2 (後書き)

あぁっ、なんか、想定以上に恵太も亜子も初々しい・・・。

でも、書いているうちに自然と動き出した感じなので、そのまま、えい!!

と書きちゃいました。

好きな人から苗字じゃなくて名前、呼ばれるの、なんだか嬉しかったよなぁ・・・。

17・想定外・想像以上

結局、恵太と亜子は取り残される形となった。

数分前、亜子が暁に電話をしてみると、もうそろそろ、あちらもお開きにしようか、ということになって解散したらしい。

となると、亜子も恵太も戻るという選択肢が消えることになる。

亜子が、携帯を渡しながら

「恵太君、ご飯まだなんだって？」と、聞いてきた。

まだというか……。ちょこちょこつまんだりはしたので、食べていないともいえなし……。

携帯を受け取りながら

なんて答えようか思いあぐねていると

「岡田君が言ってたの。恵太君遅れて来たから、あんまり食べてないって」

先手を打って亜子が質問の種を明かした。

暁だったか……。

でもなんでそんなことを？

そう思っていたとき、先ほど返ってきた、

手の中の携帯がブルツブルツと2度、短く震えた。
それはメールの着信を知らせる合図だった。

画面を見やると、その暁からだった。

f r m : 暁

s u b : 頑張れ!

お疲れ(^ ^*)ノ

俺らはこれから、ヒロさんたちと

二次会行くわ。

惠太は亜子ちゃんヨロシク。

チャンスだ惠太!! 頑張れ!!!

.....

・・・何をだ?

惠太は意味の分からないメールに、困惑した表情を見せる。

何で、あの男たちと二次会なんだ?

さっきは先生に解散したと言っていたのに。

そんな訝しげな表情の惠太を見て、亜子は心配そうに聞いた。

「恵太君、大丈夫？お友達？」
「や、暁。大した用じゃない」

慌てて携帯をズボンのポケットに押し込む。
なぜかとつさに嘘をついてしまった。

二次会に行くなんていったら、また飲酒騒動がぶり返す。

そう思ったのと、もし二次会を知って、亜子が戻ると言い出したら・
・。

なぜか、亜子があの男のいるところへいくのは面白くなかった。
先ほどは自分が「戻るなら、送る」と言ったのに。

そんな恵太の考えなど知るはずもない亜子は

「本当は、いけないんだろうけど・・・」

と言いながら、少し俯いたあと。
意を決したように、恵太を見上げた。

「ご飯、食べてかえろっか」

わたしも食べ損なって、お腹すいちゃったの、と続けて笑った。

街灯の下、照れくさそうに笑う亜子が、
とても自然体に思えて、訳もなく満たされた気持ちになる。

もう少し、先生と一緒にいられる。

「・・・先生の、おごり？」

自分でも浮き足立った気持ちを抑えられずに、
頬が緩んでいくのが分かった。

一方の亜子も、可笑しそうに吹き出したあと、
「もちろん。先生に任せなさい！」
と、大げさに胸を叩いて見せた。

その様子が可愛らしくて、思わず見惚れそうになる。

緩みの止まらない頬を見られないように、
恵太はクルリと後ろを向いて。

「じゃ、俺、寿司ね。回らないヤツ」

いたずらっぽくそう言つと、亜子を置いて歩き出した。

「あ、うん……つて、えええええ!!??」

一瞬にして笑顔が消えて、大きな瞳がさらに大きく見開かれた。

慌てふためきながら、追いかけてくる亜子の様子を背中で感じながら
恵太は肩を震わせ、笑い声を必死に抑えていた。

やべえ……想像以上に楽しい……。

18・思わぬ人物

金曜日の夜ともなれば、9時を回ったと言えども
まだまだ、夜は今から！！とでも言いたげに賑わっていた。

あの後、笑いを堪えるのに必死な恵太の背中めがけて、
慌てて駆け寄った亜子。

やっと追いついた狼狽している亜子の顔を見たときには
もう我慢できないと言った風に恵太は吹き出していた。

からかわれたと分かって、亜子はその可愛らしい頬を少し膨らませて
真っ赤になったものだったが、あまりに楽しそうな恵太の、
その笑い顔に起こる気力も失せ、今はお店選びに夢中だった。

「先生、オススメの店とかないの？」

恵太にいいところを見せて、オトナな雰囲気を出したい亜子は、
自分の世界に入り、必死に情報誌の過去記事を思い出していた。

が。なぜか今まで感じたことのないような視線を感じて辺りを見回
すと。

どういうわけか、全員と目が合うような気がする。

賑やかな大通りを歩いていると、道行く女性、そして男性までもが
すれ違い様、

2人を振り返る視線に亜子は気がついた。

その原因は、今亜子の隣にいる恵太。

並んで歩きながら、チラリ、と恵太を盗み見する。

すらりと手足の長い、長身の躯体。
無駄なものが何もついていないように

服を着こなすために装備された、筋肉という言葉を持たない武器。
直接見たわけではないが、服から隆起する、嫌味のないボディ
ラインが

ただ絞っているだけではない事を物語っていた。

モデルという、常に新しい感性やセンスに曝されているながらも
流されすぎない、流行を追い求めすぎない、
飾らないシンプルな恵太らしさが漂う。

自然体なのに、絶妙なバランス感覚で着こなされているファッション。
ン。

意志の強そうな切れ長の瞳なのに、笑うと流れるような柔らかい目
元の曲線。

なのに常識を覆すほどその瞳が顔を占める面積は大きく、
見る人にキツさを与えないのは、その目元の角のなさと。
穏やかにあがった口角のせいもあるだろう。

小さな顔に、一分の狂いもないように
理路整然と配置されているパーツ。

それぞれが主張しすぎていないのに、誰もが目を引くとしたら。

やはりそれは恵太に惹きつけるだけのなにか、があるとしか言えな
かった。

そんな、偶然なすれ違いでも振り返らずにはいられない、そのルックスとオーラで、立ち居振る舞いまでも注目される。魅了していることなど知る由もない本人は見られていることにすら、無頓着のようだった。

と同時に、隣に並ぶ亜子は、気後れしていた。

お世辞にもスタイルがいいとは言えない、幼児体型の自分。身長も、どう考えて、最近話題の『Sサイズ』だった。

「大丈夫、身長はね、小学生のうちに伸びるタイプと、中学生になってグンと伸びるタイプといるから!!」
と、両親、親類を始め、友人などみんなに励まされた小学校時代。

しかし中学生になっても、高校生になっても地味にしか変化しない亜子を見て。
最後には「女の子は小さいだけで可愛いからいいのよ!!」
と、よく分からない理論とともにちびっ子の烙印を押されてしまった。

成人してからも、夜の飲食店街で職務質問をかけられ、身分証を提示したこと数知れず……。
もはやサークル内では、その回数は伝説化していた。

これじゃいけない!と、様々な雑誌を買い込んで。
頑張つて雑誌を参考に見ても、ギャル系にもおネエ系にもならない。

服に着られてしまう自分が嫌で仕方なかった。

化粧栄えしない童顔な自分も、

目元にある、『わたし、泣きます!!』と言っているような泣きボクロも。

思わず自分の、うんと背伸びしたヒールのある足元を見ながら歩いていると。

頭の上から、恵太のふき出した声が聞こえた。

「先生、大丈夫？一人で百面相」

顔を上げると。

街頭に照らされ、逆光を受けているのに恵太のパンツだけが浮き上がっているようで。

悩みのなさそうな、恵太の笑い顔が降ってくるような錯覚に陥る。

「だ、大丈夫ですっ！先生、オトナだから!!」

なぜか悔しいような気がして意地悪を言ってみると顔を背けてみたもの……。

……先が続かない。

恵太はよほど呆れたのか、驚いたのか。

恵太の気配がない事を察知して、亜子は振り返ってみた。

すると恵太は、立ち止まって角から裏道へと続く方向を見ていた。

「恵太君？」

訝しげに聞くと、恵太は亜子のほうをチラリと見て、視線を戻しながら

おいでおいでをするように手招きをした。

引き寄せられるように、恵太のほうへ戻って同じ方向へ視線を移してみる。

「あれ……。こんなところにお店なんてあったのね」

「ピザ&パスタ……サン・ボーン……。サン・ボーンってあの、サン・ボーン？」

ヒトリゴトのようにつぶやく恵太。

亜子も、その名前には聞き覚えがあった。

「サン・ボーンって言ったら……デビッド？」

ポツリと言ったつもりが恵太にはしつかり、はっきり聞こえていた。亜子を惹きつけて止まない、凜とした、流れるような瞳を少し見開き、

声色も若干興奮しているようだった。

「え、先生、知ってる？デビッド・サンボーン」

「えっと……、アルト・サックスの？」

二人は互いを指差し合い。

「泣きのサン・ボーン!!!」

二人の声が重なった瞬間。

亜子はつい先ほどまで感じていた、コンプレックスも忘れていた。

幼く見えるから嫌い！と言っていた

どんぐりを横にしたような、その黒目がちな瞳を、

惜しげなく緩めた、子どものような笑い顔で、恵太に向かっていった。

19・最初の晩餐 1

偶然互いに出てきた、アルト・サクスの巨匠。デビッド・サンボーン。

自分の好きなサクス奏者の名前を冠するレストランを発見し、恵太はまるで最初から知っていたかのように、そこへ心を決めた。

一方の亜子は『初めての店』という、ありがちな壁に最初こそ躊躇したが、恵太のたまには冒険してもいいんじゃない？という言葉に
おずおずとついて行った。

木の薫りがほのかに漂う空間。

ジャズの流れる落ち着いたレストランだった。

ブラウンと白を基調とした、ナチュラルな店内。

食事時が落ち着き、数組の客と、常連らしい客が、木製の小さな力ウンターで

ワイン片手に小皿の料理に舌鼓を打っているような状態だった。

人のよさそうな豊かにひげを蓄えた中年の店主。

居酒屋のように特別声を張り上げるわけでもなく、微笑みながら、いらっしやい、と声をかけると。

黒いロングエプロンの紐を、前できゅつと結んだ
女性の店員が、笑顔で一番奥の

角にあるテーブルへと二人を案内した。

どうやら好きなピザかパスタを1品選び、
そこにソフトドリンクバーとサラダバイキングがついてくるがつい
てくるというのが
基本スタイルらしい。

静かすぎず騒がしすぎず。

そのなんともいえない空気感と心地よい音楽。
料理に期待を弾ませるおいしそうな匂いに、

亜子も安堵したような、ホツとした笑顔を見せた。

「いい雰囲気のお店ね」

「そう？良かった」

恵太は店員から受け取ったメニューを亜子側に向け直しながら
柔らかく笑った。

「なににする？」

「わぁ……。どれもおいしそうね。悩むなあ」

メニューを覗き込む亜子。

亜子の華奢な腕に寄り添うように付いている

今にも切れそうな、繊細なブレスレットが、しゃらりと
音にならない音を立ててメニューの上へと横たわった。

傷一つない、細い指。

透けるような白くて、柔らかそうな肌。

何も付けていないが、手入れはされているそのままの爪。
亜子らしいと思った。

手の動き、揺れる髪。

楽しそうに動いている、恐らくグロスだけの唇。

無意識のうちに目で追ってしまっている自分に
恵太も、なんとなく気がついていた。

そわそわと落ち着きのない、なんとも居心地の悪いよう
なのにどこか楽しいような。

今までとは違う高揚感に、ただただ身を預けていた。

結局、ピザとパスタで真剣に悩む優柔不断の亜子を気遣って
お互いピザとパスタを1品ずつそれぞれ頼んで半分こしよう。
ということを決着がついた。

その提案に亜子は嬉しそうに。
本当に嬉しそうに「恵太君、頭いい!!」と、顔をくしゃくしゃに
して笑った。

食事を楽しみながら、二人でいろんな話をした。

亜子は高校の頃、尊敬していた先生に借りたジャズのCDがきっか
けで、

すっかり傾倒してつしまったと言った。

「唯一の功績は高校の合唱コンクールで伴奏したこと!!」と笑い
つつ、

小さいころからピアノを習っていたらしい。

今日の飲み会も、そのサークルの先輩・後輩でのものだった。

一方の恵太も、親の影響で自分でも長いことアルト・サクスを習
っていた。

「男子たるもの、楽器の一つも嗜んでいないでどうする!!」とい

う、なんとも身勝手な
持論を持つ、母である樹^{いじま}。

様々な音楽や楽器に触れさせ、アルト・サクソに興味を持った恵太を

嬉々として、教室にぶち込んだという経緯は伏せておいたが。

「ほっかあ、ほれで、サンボーン、ひってるんだね」

口に運んだパスタが熱かったらしく、少し顔を上げ
口をパクパクしながら、はふはふと話す。

「ぶっ、先生、酸欠の金魚みたい」

思わず吹き出した恵太。

「ひどっ、らっで、あぶくて……。れも、おいひいから……」

顔を真っ赤にして怒ってみせるものの

口に運んだ量が適切ではなかったらしく、まだ飲み込めずに
反論も半分といったところだった。

20・最初の晩餐 2

どれくらい会話と食事を楽しんでいただろうか。

二人の元へ、店主と思われる先ほどの男性が近寄ってきた。

「ご満足いただけていますか？」

人のよさそうな笑みを浮かべて、亜子と恵太を交互に見た。

やっと飲み込んだパスタの感激を伝えたい亜子は、すぐさま店主を向き直り、いっぱい笑顔で

興奮したように、身振り手振りを加えながら一生懸命店主と話し込んでいた。

元々話し上手とは言えない恵太と比べ

亜子は、社交的なのか人懐っこいというのか。

初めて会った人とも驚くほど気さくに会話を楽しみ、また広げているように見えた。

くるくると変わる愛らしい表情。

よく笑う口元。

自分とは違う、感情がすべて顔に表れる

素直な、嘘のつけないような亜子に

恵太はただただ、見惚れていた。

会話の拍子に亜子の手が、水の入ったグラスに当たりそうになっていることが気になって

会話を遮らないように注意を払いながらさりげなく、自分のほうへ引き寄せた。

その様子を黙って見ていた店主は、少し微笑んで

「優しそうなお連れ様ですね」

と、亜子に向き直った。

亜子は一瞬驚いたように恵太を見て、同時にみるみる顔が赤くなっていった。

「え、あ、はい。えへへ・・・？」

なんとも間抜けな、あいまいな返事で恥ずかしそうに手をパタパタさせて自らの顔を仰ぎ、今恵太が引き寄せたグラスをガバツと掴み

一気に飲み干した。

その慌てぶりに、恵太は思わず吹き出した。

「…ククツ…」

「ちょ、ちよつと！恵太君！！笑わないのっ！！怒るよっ」

ますます赤くなりながら、亜子はその頬を膨らませた。そんな亜子と恵太を見ていた店主は

「仲がよろしいお二人に出会えた記念に、わたしから」

そういつてテーブルの上に小さなケーキが3つ乗ったプレートをつ、置いた。

「わぁ！」

亜子は怒っていたのも忘れて、その繊細な細工を施された、小さな宝石のようなケーキに目を輝かせていた。

「嬉しい！いただいてもよろしいんですか？」

「もちろん。奥の彼女の手作りなんですよ」

そういつて、カウンターの内で忙しそうに動いている先ほどの女性を向いた。

「素敵・・・ね、恵太君・・・」

先ほどの輝きとは違い、なんと言うか
ものを見つけたような

温かな、何か大切な

その職人技に心奪われ、惚けているように呟いた。

「左から洋ナシとカスタードクリーム、プチ・タルト、3種のベリーソースのレアチーズケーキ、メイプルシロップとダージリンのシフォンケーキにピーチクリームと、バニラビーンズクリーム添えです。さ、冷たいうちに召し上がれ」

そう言う店主は軽く会釈をして、戻っていった。

「恵太君っ！どうしよう！！おいしー！！！」

すでに口に運んでいた亜子は、

じたばたと体を揺らしながら感激していた。

その様子は、学校でしゃんと背筋を伸ばして
一生懸命教えている亜子からは想像も出来ないもので。
恵太は自分だけしか知らない亜子の姿に、優越感を得、そして完全
に酔っていた。

陳腐な言葉だが、

そんな亜子を見て

本当に幸せで

愛しいと思った。

20・最初の晩餐 2（後書き）

すっかり久々の更新となってしまいました^^；

その割りに相変わらずウダウダな一人ですが、もっとすぐ?!動き出
しますので

温かく見守っていただければ幸いです。

21・最初の晩餐 3

頬を紅潮させながら感激している亜子を見て
食べていないのに、すでに甘い気分で満たされていた恵太は。

「良かった。俺のもいいよ」

「本当！？恵太君、食べないの？」

そう言いつつ、その手のフォークはすでに恵太のお皿に向かおうと
戦闘体制の亜子に
また、恵太は微笑がこぼれる。

「…俺、甘いもの、少し苦手だから」

本当はつついてみたい気がするレアチーズケーキを見た後、
亜子に視線を戻してそう答えた。

こんなに喜んでくれるのなら、
自分が食べるより、きつと、うんと、幸せだ。

そんな恵太に、亜子はまるで少女のように目を細め、
その小さな顔いっぱい笑った。

「恵太君、優しい！！太っ腹！！男前！！！！」

「…先生、酔ってるだろ…」

思いつく限りの賞賛を浴びせてきた亜子に
疑いの目を向ける。

先ほどの居酒屋でどれだけ飲んだか知らないが、
ここに来てから、数杯のビールとワインを飲んでいた。

「うーん、どうだろ。どうなのかな…。分からないってことは酔っ
てるかも？」

フォークをパクリと口に咥え、真顔で恵太に答える。

「…」

そう言っただけなんの悪びれた様子もなく、すぐになっこり笑った後。
その細いからだのどこに収まるんだ！？というような勢いで
恵太の分まで、見事に完食した。

「はああ、食べた。幸せ」

満面の笑みの亜子を確認してから
恵太も微笑み返し

「ちよつとトイレ」

「あ、うん」

そう言いながら、亜子に気付かれないように伝票を持って
トイレに行った。

その後、柱のおかげでちょうど死角となり

亜子からは見えない位置にあるレジで会計を済ませた。

店主に先ほどのケーキの礼を言い、軽く会話をしながら
おつりを受け取る。

「可愛い彼女さんですね。放っておけないでしょう？」

などとかかわれるから、ぎょっとした。

「や、そんなんじゃないので」

曖昧に笑うと、今度は店主のほづがぎょっとし、動きを止めた。

「そうなんですか？ いや、私はてっきり…。それは失礼しました」
「いえ…」

そういいながら財布におつりを戻していると

「じゃあ、ライバルが多くて大変ですね。あんなに可愛い方だと」

「…はい？」

「頑張ってください。応援しています！お付き合いが始まったら、またいらしてください。」

たっぷりサービスしますので！」

…ん？

恵太は一瞬状況が読めなかった。

応援されている。
付き合いが始まったら、と言っている。

…ああ、そうか。
そういうことか…。

店主とのやり取りで妙に納得した恵太は、
先ほどからの胸の高揚感の意味がやっと分かり、
清々しい気分だった。

恵太は店主の顔をじっと見据えた。

「…あの…」

「はい、なんでしょうか」

「俺、好きです」

…。

…。

「…お、お相手が違うのでは…」

見当違いの告白に、店主の反応がうんと遅れたのは
言っまでもなかった。

21・最初の晩餐 3（後書き）

遅いつ！遅すぎます、恵太！！当初、私が思っていた以上に恵太の動きは鈍く、亜子も幼く…。

こ、これが味だと信じて、もう少し、このまま様子を見てみたいと思います。

22・帰り道 1

店を出て。

亜子はしばらくご立腹のようだった。

その小さな肩にぐっと力をいれ、両手を前にバッグを持ち頬を赤く染め少し膨らませていた。

口先は不満に満ちて、口について出そうな文句を押し殺しているのだろう。

数分前

恵太の鬼気迫る勢いの告白を思いもよらず受けてしまった店主はやっとの思いで「お…お相手が違うのでは…」と搾り出した。

しかし、当の本人は、見当違いもいいところなのに「見事してやったり!!」とでも言いたそうな、

一仕事終えた職人のように清々しい顔をしているものだから、

店主 40代後半のナイス・ミドルと本人は思っている鈴木
という男 は、

恵太に今まで感じたことのない一抹の不安を覚えた。

この、男の敵のような完璧なルックスと身のこなしの男…。
実はとんでもなくアホ…ではなくて、天然なのではないのか…。

元来からの面倒見のよさから、恵太の恋愛成就率が果てしなく低い気がして

「何でも相談に乗りますから」

そう言つて連絡先を渡したのだった。

ちょうどそのとき恵太と鈴木の話し声に気がついた亜子が

レジに近寄り、連絡先を交換している恵太が、会計まで済ませていたことを知り

ご立腹と相成つたわけだった。

「先生」

恵太は数歩前を歩く亜子の背中に声をかけるが

「…話しかけないでっ」

振り向きもせず、ずんずんと歩を進める。

仕方なく、恵太は少し大股で数歩進むと

あっという間に亜子の隣に並ぶ。

「怒ってるの？」

「ち、近寄らないでよっ。半径2m以内への立ち入り禁止!!!」

バッグをぶんぶん恵太に向けてふり、到底2mには及ばない半円

を描いて
けん制した。

そのバッグを避けながらまるで小学生のような亜子の様子に
恵太は目を細めた。

「悪かった。今日は楽しかったからそのお礼として出ただけだから」

「わ、私だって、オトナの意地があるのよっ意地!!」

おごってカッコいいオトナな女性の魅力むんむんしたかったのにつ

「むんむん、て…」

あまりの言葉に思わず噴出すと、また亜子の気に障ったようで

「っ!!!!もおいつ!!!!」

恵太君なんて知らないから!!!!」

「あ、待って!!!!」

恵太を置いていくべく、歩くスピードを上げようとしたとき。

恵太の手が、亜子の細い腕を捕らえた。

23・帰り道 2

亜子が驚いて振り返ると、
思った以上に近くにある恵太の顔に、一瞬呼吸すら忘れた。

自分より、うんと身長も大きいのに、むしろ自分より小さいんじゃないかって思える顔。
真っ直ぐに自分を見据える大きな、それでいて、意志の強そうな切れ長の瞳。

物言いたげな、口角の上がつた唇からは優しい言葉しか聞こえてこない気がする。

街頭を背に受け、恵太の顔は逆光になっていたが、それでもその、幻想的に浮き上がったような、恵太の表情に言葉を失くしていた。

ほんの数秒の沈黙に耐えた後、
やっと出てきた言葉は。

「は…離して…」

何かに惚けたようにつぶやくと

「いいけど…ぶつかると…」

「え?…」

思いもよらない言葉に顔を進行方向へ戻すと、
寸出でぶつかる状態で、中年の背広を着た男性の集団があった。

「あ、ご、ごめんなさい……」

急に恥ずかしくなつて、俯きながら謝ると、

いやいや、と軽く片手を挙げ、その集団は何事もなかったかのように
二人を迂回し、去っていった。

「大丈夫？ 飲みすぎた？」

笑いを堪えている恵太の優しさに、
不覚にもじわり、と目元が潤んできた。

「……ッ……」

「……先生？……気分悪い？」

亜子の様子に、笑いは消え、体をうんと屈め、亜子の顔を覗き込む
恵太。

その瞳に涙が揺れていることを確認すると、まず体調を心配したの
だった。

こんなにも身勝手な亜子に、愛想を尽かすでもなく
逆に心配までされてしまい、情けないやら恥ずかしいやら……。

ただただ首を激しく振ることしか出来なかった。

「あのさ……。俺も男なんだよね」

亜子が、体調が悪いわけではないと分かった恵太は一瞬緊張していたその表情を、柔らかく崩した。

思いもよらない言葉に、亜子は顔を上げ、自分に合わせてくれている、その顔を見た。

「先生がオトナだろうと、同級生だろうと、コドモだろうと。俺、一応男なんだ」

恵太の言いたいことが分からなくて、涙を溜めたまま、見つめ返す。

「好きな人と一緒にメシ喰いに行ったら、奢りたいって思うし」

亜子の大きな瞳から溢れていた水滴は、ぴたりと止まった。

何事もないように、今、何かさらりと、聞こえた。

もう、何年も聞いていない、体の心まで満たしてくれる、心奪われる人からの、一言。

「その辺カッコつけさせてよ。笑ってありがとうって言うてくれたら、それでいい」

亜子をひきつけてやまない、恵太の、目元を少し下げた
凧のような笑顔に浮かされたように、操られたように、口元を動か
した…。

「あ、ありがとう…」

その、魂の抜けたような、全身が痺れた感覚のまま。

思いもよらない言葉に、不意打ちを食らったコドモそのものの亜子を見て、

恵太は満足そうに、少し照れたように、破願すると

「どういたしまして」

そう言った。

そして自然に。

本当に、ごく自然に。

亜子の小さな、華奢な手は…。

恵太の大きな手のひらで、すっぽりと包み込まれた。

「先生。帰ろう？送っていく」

まるで人間の大きさ、心の大きさを表しているかのごとく、亜子の手をすべてを包み込んで恵太の手の中に納まった。

自分の手が、恵太君の手の中にある……。

それを客観的に見つめれば見つめるほど恥ずかしく、思わず目をそらした。

そして俯いたまま。

逃げ出したいけれど、そんな勇気もない気持ちを抑えて、小さく頷いた。

まだ、受け止める余地がありそうな、大きくて温かな、手。

亜子の様子を見て、恵太は少しだけ握り締める手に力を込めた。

その手の強引ではない強さと温かさに、顔から火が出そうになる。

だけど、心地よいその、自分とは違う感触にすっかり引かれながらなぜか戻れなくなりそんな恐怖と、戸惑いと。

それに勝る期待感や高揚感に全身が冒されていくのを感じた。

熱に浮かされたように、覚束ない足を必死に動かしながら

亜子は恵太の背中を追う。

そんな、今までにない逞しい異性の背中をただただ、見つめながら

亜子は、頭の中から聞こえる大きな大きな警報音を聞いていた。

それは、緊急警報なのか、幸福の鐘の音なのか…。

-
-
考えたくない。
-
-
-
-

追い払うように頭を振りながら、今は、今だけは。

その温かな優しい帰り道に、身を委ねようと思った。

23・帰り道 2 (後書き)

想定外!!!

恵太、想いを告げちゃいました(。；。；)
思った以上の展開です。

本当は、もう少しグダグダの予定だったので…。
これはこれで「あると思いますっ」
と言っていただけなら幸いです。

先日ユニークアクセスが1000を越えていました。

こんな拙い言葉遊びにお付き合いいただきましてありがとうございます。
ます。

また感想や一言いただけますと、馬ニンジンのわたし。
俄然やる気になりますのでお暇なときは、残していただけると嬉しい
です。

今後ともよろしく願っています。

24・不健全男子高生

「…それだけ？」

「…それだけ」

月曜日の朝。

恵太は教室に着くなり拉致よろしく、暁と悠斗に非常階段の一番上、屋上への扉の前に連れて行かれた。

本当なら屋上のほうが雰囲気があるのだろうけれど、残念ながら昨今の安全性の面から、授業での必要のない限りは施錠されていた。

暁と悠斗の目的はただ一つ。

あの日のことだ。

どんな面白い話が聞けるのかと
我慢しきれない様子の二人（特に暁）は、恵太を根掘り葉掘り、質問攻めにした。

…のだったが。

「メシ喰って、送ってって…それだけ？」

途方に暮れたように、啞然として暁は聞き返す。

惠太は小さく一つ、溜息をついて

「…それだけ」

もう何度目か分からない答えを返した。

「惠太お前正気?! 女と二人っきりになって家まで行って、チューもギューもモミモミもナシ?!」

惠太の答えが嘘や冗談ではないと分かって暁は激昂してその両手で空を揉んで見せた。

「…モミモミって…。暁じゃねーんだから。でも、家まで上がって何も無いって、修行僧みたいだな」

半ば苦笑しながら、悠斗も扉にもたれかかりながらポケットに両手を突っ込んだ。

「いや、家上がってない」

「はあああ?!」

惠太のまたもやな答えに、暁は空を揉む手が止まり、悠斗も思わず背が離れた。

「…上がる必要、なかつ…」

「お前は何者だっ！ジェントルマンか？！仏か？！健全な男子高校生じゃねーのか？！」

欲ってもんがないのか！この草食系がつ！！！」

惠太は暁の気迫に思いつく言い訳を試みようとしたがその言葉さえも途中で遮られた。

「だああああー！！！！！！二人つきりにするんじゃないかなつたー。」

俺が手取り足取りだなあ…」

暁は頭を抱えて、その場にしゃがみこむ。

そんな暁の様子の意味が分からない惠太は困った顔をして、一言ごめん、と謝ってみた。

「まあまあ、暁の気持ちも分かるけどさ。惠太らしいじゃん？」

暁の肩をポンポンと軽く2回叩いて

悠斗が笑いを堪えながらフォローに回った。

「らしいって…。らしいにもほどがあるだろーよ」

本人いわく、健全な男子高校生の暁は

シヨックを隠しきれないようにヨロヨロと立ち上がった。

「あああ…俺は何である日、ヒロさんと酒なんか飲んだんだ…。あの時間を返してくれ…」

どうにも納得がいかないらしい。

暁は魂を抜かれたようにブツブツとつぶやきながら、
手すりに寄りかかるようにしながら階段を降りていった。

そんな暁のあとに恵太と悠斗も続く。

暁と少し距離が出来たあたりで

不意に悠斗が恵太の肩に手を置いた。

「ま、あれだ。」

あいつも、あいつなりにお前のこと応援してるみたいだから
「…おう」

恵太自身も分かってはいるのだが
どうも自分はズレているらしい。

亜子が男といるのを見てイライラしてしまうのも、

一緒にいて楽しいのも、触れて幸せな気持ちになるのも
自分が亜子を好きだからだ。

そう気付いただけで、今は満足していた。

亜子が自分をどう思っているかは、気にならなかったし

暁の言うような、この先どうなりたいとかこうなりたいとか、
そういう欲が思いつかないくらい自分の気持ちがあつて爽快だつ
た。

暁に言ったら「幼稚園児か！」と殴られそうな、

恋っていいな、なんてこつ恥ずかしいことを

真剣に感じていたのだった。

それに。

あの日、暁や悠斗に言わせれば朝飯前なんだろうが
一つだけ進展したことがあった。

人には教えたくない、秘密に

恵太は人知れず幸せをかみしめていた。

「…ま、俺らに言えないようないいことあったみたいだし？
いいんじゃないの？お前はそのままだ」

悠斗が恵太を追い越し際に、そう言ってニッと笑った。
不意打ちに、思わず心臓がドツと騒いだ。

「何で？」

「恵太、すげー機嫌よさそうな顔してる」

振り返ってそう言つと、

軽快なリズムを刻んで、一気に階段を降りて行った。

…。

一人取り残された恵太は、意味もなく
自分の頬を手のひらでさすってみた。

「こづいこのって、顔に、出るのか…？」

…気をつけよう。

そう思いながら、恵太も足早に教室へと足を動かした。

新緑が一段と濃くなる5月の連休が終わる頃。

初々しかった新入生も制服が体になじみ
気の会う仲間も増えて
学校生活にも慣れたように見受けられた。

それは亜子たち新米教師も同じで、生徒たちの顔と名前が一致し
授業も一応進むようになってきた。

授業で使う教材の準備や、プリントの作成、
先輩教師にチェックしてもらう指導計画書の書き方なども
やっと要領を得てきた。

朝礼や職員会議でのやり取りで、先生同士の性格もなんとなく
掴めはじめたし。

日々勉強で、なかなか自由な時間はなかったが
亜子も、そんなめまぐるしくも充実した日々を過ごしていた。

亜子は一日の担当授業を終えて、職員室へと戻ってきた。

自分に与えられた席に着き、うーんと一つ、背伸びをする。
少し慣れてきたとはいえ、授業はまだまだ緊張する。

自分ではそうでもないと思っていたが、終わったあとすごく肩が凝
つていて

余計な力が入っていたんだなあ実感する。

社会人1ヶ月。

そんなに何もかも、うまくいくほど甘くはない。

実際先輩の先生の授業見学に行くと、天と地ほどの差の指導力に
愕然とし、自信がなくなる。

特に難関校の英文科などを目指すコースは
必死にメモを取っても追いつかないくらいで自分も生徒として
授業を受けなくなる。

「誰だって最初は素人ですから。今からいくらでも伸びていきます
よ、

難沢先生は」

落ち込んでいる亜子の顔を見て、先輩の指導教師は
優しく声をかけてくれるものだった。

（いけない、いけない！！）

落ち込んでうまくいくわけじゃないんだし、
今できることやろう！）

そう思って亜子は、立ち上がった。

今日使った資料を英語科指導室の資料棚へ戻すためだ。

ついでに明日使う分も今取り出して置いて、職員会議までの間
目を通しておこうと考えた。

席を発つ前に、自分の引き出しからそつと携帯を取り出し、ポケットへサツと入れた。

別に携帯禁止ではないし、休憩時間は職員室や指導室、更衣室での使用は認められていたので

堂々と使えばいいのだが

亜子いまだ、職員室で使えないでいた。

空いた時間を惜しんでも、勉強をしなくちゃ追いつけないわたしがのんびり携帯を使ってもいいのかな…。

そうと思うと、元来の真面目な性格もあつて

とても取り出せなかつたのである。

それでも最近では、携帯をどうしても覗き込みたい理由がありこつやつてこつそりと忍ばせては、一人になれる場所とチャンスを伺っていた。

資料を持って校舎の4階にある指導室へと向かう。

途中何人かの下校中の生徒とすれ違い、

他愛無い話をしたり、挨拶をしたりして

そんな些細な時間こそ、教師になれた喜びに満ちていて温かい気持ちになった。

指導室の前で、扉をノックする。

…。

(良かった。誰もいないみたい)

返事のない事にホッとして、中へ入る。

広さ10畳ほどの空間に、真ん中には長机とパイプ椅子が並び、その両側の壁に建てつけられた棚にはそれぞれランクや志望校、資格試験用などに分類された資料や文献がびっしりと詰まっている。

亜子は、机の上に資料を置き、部屋の一番奥まで進むとこの部屋唯一の小さな窓を開けた。

人気がない部屋の窓は、めったにあけられることがなく、鍵も固い。

ぎしぎしと、嫌な音を立てながら開いた窓から、春から初夏へと向かうときにだけ感じる、清々しい空気が心地よい風とともにあつという間に部屋をを満たした。

その風を感じながら、亜子は急いで携帯を取り出す。

(やっぱり！)

手にした携帯の、小さなライトが点滅していた。

その色は、亜子に新着メールを知らせる色。

先ほどポケットへ忍ばせるとき、光っているような気がしていたのでこの点滅が嬉しくて頬が緩む。

はやる気持ちのまま、ボタンを押しメールを開く。

文面は短く、一瞬で読み終える。

それでもそんなことは関係ないのだろう。

亜子は頬の筋肉が完全に緩んだ、しまりのない笑みを隠せないでいた。

メールを読んで、一人でニタニタしているなんてきつとイタイ人だ。

自分でそう思いつつも、意志とは無関係に顔は緩む。

何度も何度も読み返したあと

返事を打つ前に、ふっと空を見上げた。

白い雲がポツリポツリと浮いているだけの穏やかな夕焼け空が広がっていた。

「ふーっ、いい気持ち」

窓の棧に手をかけ、軽く目を閉じ、胸いっぱい空気を吸い込む。まるで自分が浄化されたような気がするから

心地よい風の中での亜子は深呼吸が好きだった。

風が髪をいたずらに舞わせ、乱していくのもこのときばかりは気にならないから不思議だ。

その時、手にした携帯が突然、震えだした。

「わわっ!?!」

あまりに突然で、携帯を一瞬手から離しそうになる。

窓から落としてしまう寸前でどうにか握り直し

慌てながら相手が誰か確かめる間もなく、電話に出た。

「ももも、もしもしっ!?!」

『ぷっ、すごい慌てぶり』

「え?」

その声と言葉に、心臓がより一層騒ぎ出す。

『なんか、いいことあった?すごい、ニヤニヤしてた』

相手が可笑しそうに笑いを堪えながらそう続けた。

「な、何で!?!」

亜子は恥ずかしさと驚きで、夕焼けに負けなくらい顔を真っ赤にしながら慌ててあたりを見渡した。

そして不意に、校舎の下を覗き込むと

。

「あっ」

先ほどのメールの送り主でもある恵太が
右耳に携帯を当て、眩しそうに上を見上げながら、笑っていた。

傾き始めた太陽からの柔らかな光が、直接目に入らないように右手は携帯を持ち耳に当てたまま、左手をかざして影を作った。

そうやって視界を確保し、見上げた先の亜子はそのまま落っこちてしまふんじゃないかと思うくらい、窓から身を乗り出して、驚いた表情で恵太を見下ろしていた。

恵太はさりげなく周囲を見渡す。

呆気にとられていた亜子も、はっとしたように周囲を見渡し、一瞬恵太と目が合うと、乗り出していた体を起こし、窓に背を向けた。

それを確認すると、恵太も何事もなかったように歩き出した。

「いめん」

「あ、ううん」

意味もなく謝るのは、後ろめたいことをしているような気まずさからだった。

何もやましいことはなかったが、教師と生徒が連絡を取り合っているというのは

やはり傍からみれば、何かを匂わせるには充分な要素で。

少しの間、気まずい空気を纏った沈黙が訪れた。

が。

恵太が校門を出たところで

亜子の息をつくような小さな笑い声が耳に届いた。

それを境に、その空気は一掃された。

「ふふつ……。びっくりした〜。さっきメール気がついたんだよ。それ読んで、なんて返そうかなあって思ってたら携帯が鳴るんだもん」

電話越しから聞こえてくる、亜子の愛らしい笑い声。

亜子を送っていった日から数回目の電話。

その度に、亜子の鈴の鳴るような笑い声に

恵太はたまらなく、幸せな気持ちになっていた。

「ごめん。校内だったのに。あまりにも面白かったから」

恵太もつられて、笑いが漏れる。

「ひどっ、面白いつて……。ええっ、そんなにひどい顔してたのかな?!」

電話の向こうで、顔を真っ赤にして百面相をしている亜子が目に浮かぶ。

それを想像しながら含み笑いしている自分は、相当イタイ。

恵太はあたりをチラリ、と見ると、何人もの人とすれ違っ。

都市部にある学校のため、夕方のこの時間でもまだまだ人通りも車も多い。

いくら電話をしながらとはいえ、ニヤニヤしながら歩いていたら、気味悪いだろつな。そう思いつつも、しまりのない顔を元に戻せず、隠すように足元を見ながら歩く。

「とっ、ところでっ、今から？」

笑い続ける恵太に、亜子はこの話はおしまい！とでも言いたそうにさつき恵太が送っていたメールの内容をダシに上ずった声で尋ねた。

「あ、うん。これから事務所」

「そっかあ。大変だねえ」

言葉とは裏腹に、どこかのんびりした口調の亜子に、安らぎすら覚えていた。

「いや・・・自分でやってることだから・・・」

「えらいねー。ちゃんと自分の道切り開いてるんだもんね。すごい」

「・・・や、そんなにすぐくは、ない・・・」

『ちゃんと自分の道切り開いてるんだもんね』

その言葉に、ちくりと胸を刺された。

胸を張った返事が出来ない自分が情けなかった。

自分の道・・・。

モデルを始めたのは、そんな高尚なものなんかじゃないんだ、と本当のことを言ってしまうえば、先生は軽蔑するだろうか。恵太はそんなことを思いながら、口ごもった。

「あれ？もしもーし、聞こえてる？おーい」

反応のなかった恵太に、電波状況が悪いのかと思ったのだろう。亜子が少し、声を上げて問いかけてきた。

「あ、大丈夫。聞こえた」

気まずさから、亜子の話にそのまま乗った。

「じゃ、そろそろ職員室、戻るね」

「うん。俺も、もうバス」

バスの停留所が見えてきたところで、そう口にした。

「また、明日ね」

いつもの、弾むような亜子の口調。

きつとその先では、小さな顔いっぱい笑顔を見せているのだろう。

「ん。また明日。じゃ・・・」

「あ、待って！」

電話を切ろうとしたとき、亜子の声呼び止めた。

「何？」

「最近忙しいみたいだし…あんまり無理しないでね」

恵太はその言葉にまた、胸が締め付けられる。
無理するほど、自分は…。

何かを言いたい衝動をぐつと堪えて
明るい声を作ってみせた。

「ありがとう」

そう言っただけ電話を切ると二つ、小さな溜息を吐いた。

日は随分傾き、バスを待つ長身の恵太の影は、
さらに長く背を伸ばして横たわっていた。

それはまるで、実物以上の『諫山恵太』が
勝手に大きくなっていく様を表しているようで
捉えどころのない不安が、恵太の中にもじわり、と広がっていた。

恵太と亜子が初めて食事を楽しんだあの夜。
亜子を自宅まで送り届けた恵太。

そのまま帰ろうとする恵太を、亜子は心配し
今度は自分が恵太を送ると言い出した。

「そんなことしたら、また先生送ってこなくちゃいけない。
大丈夫、男だし」

亜子を安心させようと、少し大きさに笑顔を作って見せた。

しかし亜子はうーん・・・と唸り、俯く。
少しして小さく、あ！と声を上げると

「じゃ、家に着いたら連絡くれる？」

すごい名案を思いついたかのように笑顔を見せ、携帯を取り出した。
恵太は一瞬、生徒に教えていいのか？と思いつつ、
正直嬉しい申し出。

断る理由もなく、連絡先の交換となった。
何度も何度も「絶対だよ？元はといえば私のせいなんだから・・・。
ちゃんと電話してよ？」と、赤外線で通信している間も、繰り返し返す
亜子。

「はいはい」

恵太はそう笑って、恵太は亜子を部屋へと促した。

小さなアパートの前、小さな蛍光灯の下
亜子が3階にある自分の部屋の鍵を開け、こちらを振り返った。
小さく手を振る亜子に、ちよつとだけ片手を挙げ、応える。
入るのを確認して、今来た夜道を戻り、自宅へと向かった。

それ以来、何気ない日常の中、メールや滅多にないが
電話でも亜子との関係が続けていた。

そんなことを思い出しながら、応接室のソファーに、その長い足を
もてあまし気味に座る。

事務所内の脇にある、間仕切りだけで仕切られた小さなミーティン
グ用の空間ではなく
応接室へと呼び出された時点で、恵太はなんとなく嫌な予感がして
いた。

恵太に遅れること数分。
社長で母である樹と、チーフマネージャーの佐々木が入ってきた。

ソファーに座りなおしながらチラリ、と樹の様子を窺う。
右の眉毛が上がっているのを見て、ああ、やっぱり機嫌悪いな、と
まるで人事のように思った。

「で？決めた？」

恵太とテーブルを挟んで向かい側に2つ並ぶ一人掛けのソファーに
座るや否や

単刀直入に樹が切り出した。

「・・・まだ」

「はああああ」

恵太の答えが終わらぬ前に、大きな溜息とともに背もたれへと体をどんつと預けた。

「あのねえ・・・。もう時間がないのよ。分かるでしょ。

いいチャンスじゃないの。これからもモデル1本でやっていけるわけじゃないんだから。

幅を広げていくにはこれ以上ないチャンスよ」

そう言いながら、テーブルの上へ置かれた資料を指でトントン、と叩いて見せた。

『これからも』

その言葉に何も言えなくなってしまう。
流されてる。

最近恵太が感じていた、どうしようもない不安。

大手のイメージモデルが決まってから、大幅に露出が増えた。

それに伴って仕事のオフアームも右肩上がりだが、

今までのやり方では通用しない内容も、同時に増えていた。

先行するイメージ。一人歩きする評価。

今頃になって足がすくんだ。

「あのさ、恵太君。とりあえずサックスの個人レッスンは受けてみ

ようよ。

それからのことは松浦監督に実際会って決めたらどうかかな。君に会いたいって、正式に申し出があったんだよ」

張り詰めた空気を和らげるように、優しい口調で佐々木は諭した。温厚で人望も厚く、それでいて仕事は敏腕。

そんな佐々木に信頼を寄せている樹は、ふうーっと息を吐くと前のめりになっていた体を、また背もたれへと戻した。

「そうね。恵太、最近吹いてないじゃない。鈍ってる腕を鍛え直してもらいなさい。」

気分転換にもなるわ。よし、じゃレッズンは決定ね。

佐々木さん、松浦監督にアポとっておいて」

「はい」

佐々木さんは恵太に軽く頭を下げると

「頑張ろう、恵太君。みんな期待してるよ」

そう微笑んで、席を立ち、早速アポを取りに向かった。

恵太は、小さく「はい」と言い頭を下げた。

樹がテーブルの上の資料と台本を恵太に向け直し、スツと押した。

「派手さはないけれど、いい話よ。目だけは通しなさい。」

それから、来週からのスケジュール渡ししておくわ。

自分での移動が厳しくなったら言いなさい。誰か専属でマネージャーに付けるから」

黙ったまま、それを受け取る。

台本を脇へやり、スケジュールに目を通す。

「ふっ……。きたねえ」

苦笑いを浮かべ、目だけを樹に向ける。

「なにが？」

「サックスのレッスンも、映画の撮影も、全部組み込まれてるじゃん」

先ほどの樹のように、テーブルの上へ放り投げたスケジュールを指でとんと叩いて見せた。

「当たり前でしょ。仕事選ぶなんて100年早い。

選べるくらいの実力と人間性を身に付けてから言いなさい。この世界、求められてナンボよ？代わりなんて吐いて捨てるほどいるわ。

だからこそ、指名してくださることに感謝しなくちゃ」

「分かってる……」

胸がムカムカする。

分かってる。分かってる。分かってる!!!
何度も自分の中で繰り返す。

これ以上話をしても樹の考えが変わることも
恵太の迷いが消えることはなさそうだ。
そう判断して、立ち上がる。

「もう今日は帰っていいの？」

台本とスケジュールを乱暴にバッグにしまう。

「ええ。それ、渡したかっただけよ。お疲れ様」

「お疲れ様でした」

母といえども社長。

頭を下げて部屋を出ようとドアノブに手をかけたとき。

「……ねえ。恵太？」

社長としてではなく、母としての声色で
樹が呼び止めた。

「……何？」

「あなた……、まだ郁かおるが引つかかっている？」

カオル……。

その名を聞いて、恵太は瞬間的に全身から汗が噴出すのを感じた。
樹はそんな様子を見逃さないとでもいうように、じつと恵太の目を
見据えた。

「……な、んで、郁が関係あるの？」

「……見てたら分かるわよ、それくらい。あなた、郁と比べらる
のが嫌だったんでしょ？」

それで郁に勝てるもの探して芸能界芸能に来たんじゃない？」

「ちが・・・」

凶星だった。

自分の中を見透かされた恐怖で、寒ささえ覚えた。違う。

否定したい感情と裏腹に、全身から血の気が引き、音を立てて急速に凍って行く気がした。

「ねえ、恵太。あなたはもう充分・・・」

「悪い。帰る。今日遅くなるわ」

やっと動いた震える手で扉を開け、樹の目を見ないよう俯いたまま言葉を遮った。

「待って、恵太」

呼び止める樹の声を無視して、部屋の扉を強く締めた。

自分の心に蓋をするように、

見たくない現実と聞きたくない答えを無理やり押し込めた。

恵太が今できる、たった一つの小さな抵抗だった。

28・秘密 4（後書き）

なんとか更新成功です。

最近、書けない時間があったのでその反動でしょうか。やっと筆が進み始めました。

秘密シリーズ?!として最後の4話目です。

恵太と亜子の秘密に加え、恵太の中の秘密も出てきたためいつもより文字数となってしまいました。

この話と同時に、モヤモヤ恵太登場^^;

ようやく中盤といったところですが（長い・・・）

恵太のお仕事や亜子との関係、影がちらつき始めたカオルなど見守っていただければ嬉しいです。

お暇があれば、一言いただけますとますます嬉しいです。

29・霧の中

樹のゴリ押しに翻弄されて、週3回のみっちりペースでサックスの個人レッスンを受け初めてもう2ヶ月以上が経つ。

風はすっかり湿気を帯びた初夏の匂いを纏っていた。

見上げた先の木々も両手いっぱい太陽を浴びてもうすぐ訪れる夏本番を待ちきれないとも言つようにそわそわと体を揺らしていた。

いつの間にもやら演技指導の時間もしつかりと入り、放課後はほぼ毎日、土日も一日埋まってしまふ状態だった。

全く自分が見えていない状況なのに
時間に押し流されながらも、しつかりみっちりレッスンを受けている自分が不甲斐なくも
また、目に見える変化に戸惑いながら嬉しく感じつつもあった。

特にサックスは、別格だった。

元々好きで嗜んでいたもの。
数年のブランクがあるとはいえ、すぐに感覚を取り戻し筋トレなどを付加することで以前よりも、音に深みと伸び、そして必要なところでの渋み加わったことが
手前味噌ながら感じる事が出来た。

その反面、演技のほうは……。

今まで生きてきた世界とは違う。
それを肌で感じていた。

恵太のやり方が通用しない表現の世界に、啞然とした。
初めての挫折、そう言ってもいいほど戸惑っていた。

恵太に映像、演技の経験がないわけではなかった。
ブランドPR用の映像は每期撮っていたし
今人気絶頂のグループのPVに出演もしていた。

しかし、今回はワケが違った。
映画。

しかも松浦作品。

新進気鋭の異端児監督。

それが今回恵太を指名した松浦監督・・・
松浦 泰次^{たいじ}への誰もが口にする評価だった。

キャリアも年齢も全く気にせず、自分の求めている役者を選ぶ。
その証拠にどの役も全てオーディションで選んでいた。

それが、だ。

今回、泰次が初めて自分から指名したのが恵太だった。
本格的な演技の世界では、全く無名。
その恵太をこともあろうに主役。

開けっぴろげな性格の泰次のせいか、

包み隠さず恵太の名を出したものだから。

非公式ながら「どうやら次は諫山恵太。しかも松浦監督直々のオフ
アーらしい！」

と言う話はこの芸能界^{せかい}で、今一番旬なものだった。

それを知ってか知らずか、演技指導者の熱も
明らかにヒートアップしていた。

そんな毎日に、逆らうことも出来ず

無言のプレッシャーに押し流されながら

恵太は、それでも必死にもがいていた。

俺は、^{かおる}郁とは違う。

俺は、郁じゃない。

俺は……。

悪夢のような、その呪縛から逃れる術を。

自分の本当の居場所を、必死に探っていた。

29・霧の中（後書き）

セリフらしいセリフが一つも、ない・・・（笑）。

悶々恵太なのでどうしてもこうなってしまうた。

ここから少しずつ、その間も亜子との関係も進展していくはずですので

今後も見守っていただければ嬉しいです。

いつもありがとうございます。

30・悩める少年

うまくいかない恵太をイライラさせるもう一つの理由が
亜子と思うように連絡が取れないもどかしさだった。

急激な仕事の増加は亜子との距離を、確実に遠ざけていた。

週に数回ある英語の授業で顔をあわせるものの、
特別2人の会話を楽しめるものではない、当たり前だが淡々とした
ものだったし

学校で亜子呼び止めて話をする、暁のような勇気も度胸もない。

メールも互いの忙しさのあまり、朝のメールに夜返信をするという
ような

時差が出てしまうことも度々だった。

声を聞きたくても、恵太には電話をする理由が見つからない。

何一つ確かなものがない関係。

それでもこの、穏やかな時間が続けば満足なはずだった。

それが、亜子からのメールが1日以上空くことはなかったのに、
もう3日連絡がない事に自分でも信じられないくらい、苛立ち、不
安を感じていた。

土日を挟んで2日、そして今日、月曜日は

イメージモデルを務めるブランドの冬物のスチール撮りがあったため

学校を休んだ恵太。

今朝、亜子を案ずるメールを入れたが返事はなかった。手にした携帯が告げる『新着メール 0件』という文字を眺めながら何ともいえない、じめつとした感情が渦巻く。

何か気に触るようなことをして、嫌われたんじゃないのか。ただ忙しいだけなのか、何か大変なことが起きているのか。それとも、彼氏がいるのか……。

最後の思考にたどり着いたときに、ちくりと痛む喉元。

想いは伝えた。

誰にもナイシヨで、この小さな携帯電話で繋がっている。それだけで満足だったはずなのに。どんどん欲張りになっていく自分に気がつく。

人を好きになったこともあるし、付き合ったこともある。でもどこか相手任せで、自分から想いを伝えたこともない。

好きになって付き合ったはいいけれど、相手が、芸能界へのステップのために

自分に近づいていたことを知るなど、苦い経験もした。そうじゃないにしても、

「あなたはいい人だけど、どこか物足りない」「優しすぎて私にはつらかった」

など、恵太にとっては理不尽極まりない理由で相手が去っていく。そんなことが続いたせいで、付き合う、という関係がとても苦手だ

った。

本気になって、傷つきたくなかった。

それなのに、今。

亜子を独占したい。

亜子と確かなつながりが欲しい。

亜子に触れたい。

恐ろしい勢いで膨れ上がっていく感情に
自分でも戸惑うことしか出来なかった。

「あー！もう！！」

役のために、伸びたままになっている頭を乱暴に掻く。

映画を引き受けるなど、返事もしていないのに役作りで髪を伸ばす。
おかしな話だった。

結局どうしたいんだ、俺は。

仕事も、先生も。

携帯を乱暴にしまおうとした時、

着信音が鳴り響いた。

先生？！

咄嗟にディスプレイを確認する。

そこには「 暁 」と出ていて、自分でも嫌になるくらい
イライラしてしまった。

「・・・はい」

「あ、恵太く？俺く。今大丈夫？？」

のんびりと間延びした暁の声。
まるで悩みのなさそうなその声に、溜息交じりで返す。

「今終わった。何？」

『うつわ。恵太、機嫌悪つ。亜子ちゃんと喧嘩でもしたあ？』

今一番聞きたくない名前に、カチン、ときた。

「用事ないなら、切る。じゃあな」

『ちょ、ちよつと待ってっ！！ジヨードンジヨードン！！！切るなよ』

「……じゃあ、何」

『やー、一応恵太の耳に入れておいたほうがいいかと思って』

「……だから、何だよ」

『亜子ちゃん、金曜日の夜から熱が下がらないらしくてさ。今日も学校休んだんだよね。』

亜子ちゃん一人暮らしたろ？ちゃんと病院行ったのかねえ。メシ、喰えてないかもねえ？』

今一番聞きたくなかったはずの名前の、今一番聞きたいメールのない理由が判明した。

まだ何か話している暁の電話を失礼なぐらいの勢いで切り、恵太は外へ飛び出していた。

30・悩める少年（後書き）

またもや暁に助けてもらいました。困ったときの暁くん。

ナイス、暁。飄々としていて男前。

結構お気に入りな人物です。暁、気苦労が耐えないだろうなあ・・・。

こんな風に、事も無げに苦労できちゃう、大きな人間に憧れます。

亜子、倒れました。どこまでダメダメなんだ（苦笑）。

亜子、これから頑張ります（はずです）。

「扁桃周囲膿瘍ね。扁桃腺だけじゃなくてその周りにも炎症が広がった状態。」

甘く見てると気管が狭くなって呼吸困難起こすわよ。こつなる前にちゃんと病院来なさい。

薬出しておくから飲みきったらもう一度受診して。

今日は点滴して帰りなさい。熱が下がらなければ入院も考えます」

亜子を運びこんだ救急病院で、当直の女性医師は、そう言った。

恵太が亜子の家へ駆けつけてみると、パジャマ姿で顔は真っ赤で呼吸の荒い亜子が出てきた。

明らかに様子がおかしい。

そう判断し、無理矢理連れてきたのは正解だったようだ。

点滴を受ける間、恵太は1時間ほど待ち、そしてまた亜子の家へと連れて帰った。

背の小さい亜子を半ば抱えるように肩を支え、部屋へ運ぶ。

そのまま亜子をベッドに寝かせ、自分もその脇に腰を下ろした。点滴のおかげだろうか、少し呼吸が楽になったように見えた。

「大丈夫？何か飲めそう？」

「ん。ありがとう。今は、いらない。・・・恵太君、もう大丈夫だから・・・帰って？」

まだ高い熱が続いているせいで、目が少し、潤んでいた。関節など節々も痛むためか、ときどき苦しそうに体を擦っていた。それでも微笑もうとする痛々しい姿に胸が苦しくなる。

「明日・・・学校でしょ？こんなに遅くなっちゃって・・・。本当にありがとう」

亜子が、視線を泳がせた先のデジタル時計は、深夜1時をとうに回っていることを知らせていた。

「俺はいいから。お医者さんがこのままじゃ脱水起こすって言うってた。」

何か飲めそうなもの、ない？俺、買ってくるから」

ベッドのそばに跪き、亜子を覗き込む。

その小さな白い額には、汗が光っている。

自分が苦しいわけではないのに、自分も苦しくなる。

代われるものなら、代わりたい・・・。

よく耳にする言葉の感情を、今初めて知った気がした。

大事なものって、自分の体の一部みたいなものなんだ・・・。

「ありがとう・・・。今は、欲しくないの」

「じゃ、適当にいくつか買ってきておくから。ちょっと待っていて」
「でも・・・」

それでも遠慮し、何か言いたそうな亜子を遮るように立ち上がり、恵太は玄関へ向かう。

「先生、鍵借りるから」
「あ……」

亜子が答えるよりも先に、恵太は部屋を出て行った。
亜子の部屋の鍵を施錠した後、軽快なリズムで階段を駆け下りる。

『このド下手!!』と罵られ、容赦なく扱しこかれ続けているレッスンで身も心もクタクタなはずなのに不思議とどちらも軽かった。
スキップなんて踏みながら、最寄のコンビニへと向かう。

先生が大変なときだ。俺がすっかりしなくちゃ。

やけに気合が入っている自分に冷静であるように喝を入れようとするけれど。

溢れてくる感情に、全くもって勝てそうにない。
絞まりなくデレーっとした自分の顔を整えられないまま、夜道を進む。

やっと会えた亜子。

嫌われたわけじゃなかったんだ。

彼氏がいたんじゃないかなかったんだ！いるなら今、そいつが看病しているはずだ。

病院でも医者に『あなた、彼氏？しっかり見てあげて』なんて言われたし!!!

さっきまで感じていた喉のつまりから開放され、
代わりに与えられた自分にプラスの要因。

ここ最近の憂鬱が一掃されていくのを感じながら、俺、やっぱり先生が好きなんだ。と、今までにない幸福感に包まれた。

自分でも馬鹿げていると思う。単純すぎて、笑える。

それでも、我慢できない。

何でもできるスーパーマンになった気がしてくる。

今、亜子に必要とされている気がして、自分の存在価値全てが亜子のためにあるかのような、充実感。

頭ではそれはただの自己満足でしかないと分かってはいたけれど、心とは勝手なもので、自分の都合のいいように解釈して浮き足立っていた。

亜子の役に立てているかもしれない。

掛け値なしに、それが嬉しくてたまらなかった。

不謹慎にも、それが亜子の急病という緊急事態でも、だ。

恋は魔物だ。

恵太は若干ずれた解釈をしながら、深夜のコンビニでひとり、笑いを堪えきれないまま、手当たり次第に商品をかごへ、バスバスと放り込む。

そんな客を店員たちが不信感いっぱい目ので見つめながらいつでも非常ベルを押せる準備をしていたのは、言うまでもない。

まさか、それが、先ほど彼らが並べた雑誌の表紙を飾る

クールな表情の恵太とは思ってもせずに・・・。

32・存在価値 2

「ただいま……。先生？」

楽しいひとり遊びを終え、帰路（といっても、人様の家だが）に着き、
鍵を開け部屋の様子を窺う。

しん、と静まり返った部屋からは物音一つしない。

そのまま音を立てぬよう歩を進めると。

規則正しく……。とは言い難い、少し乱れた息遣いそのまま眠る亜子の姿があった。

恵太は先ほどのように、亜子のそばに跪くと。

汗で濡れたその額に、細い、絹糸のような髪が、小さな束となって張り付く。

そつ……。と触れ、その髪を掬い上げ、横へと流す。

「……。ん……」

亜子の小さな呟きに起こってしまったのかと、慌てて手を引っ込めようとしたが。

思いもよらず、その手は捕まった。

その捕獲主が、うつすらと目を開ける。

「けえた、くん・・・？」

亜子の、黒目がちな、潤んだ瞳に捕らえられ、恵太は獲物のように動けなくなる。

一瞬のうちに、全身の血が、頭へ逆流を始めるのを感じる。

「・・・な、なに・・・？」

恵太の表情を捉えた亜子は、安心したように微笑む。

そして、自分が捕らえた恵太の手を、強く握り締め

自分の口元に携たずさえたまま・・・。

「けえた・・・だあいすき・・・」

そう呟き、一点に恵太の瞳を見つめ、

満足そうに笑った後、口元に握り締めたその手の甲に

優しく口付け・・・。

そしてそのまま眠りに落ちた

そのまま、恵太が魂を抜かれたように動けなくなった

のは

言うまでもない。

33・手と手

激しい喉の渴きと、汗でべっとり張り付くパジャマの不快感で、亜子は目を覚ました。

まだ頭痛があり、体が芯から熱を持っているようだが、昨晚までに比べたら、随分楽になったように感じた。

何か飲んで着替えようと、上体を起こしたところで違和感を覚える。

「……………あっ！」

自分と、左手を凝視し

たっぷり時間をかけて状況を理解した。

そして思わず声を上げ、慌てて右手で口を押さえた。

な、ななななな……………!!!

声にならない声を必死に堪え、亜子は自分のしていることに驚愕した。

亜子の左手は恵太の手をしっかりと握ったままだった。

自由を失った恵太は、ベッドの脇に座り、

亜子の手に身を寄せる猫のように顔を任せ、
ベッドにもたれかかり眠っていた。

初めて出会った頃より伸びた髪の毛。
手に取るとサラリ、と逃げていき、
パーマやカラーでいじめたことのない素直な髪は
恵太そのものようだった。

傷どころかトラブル一つない、憎らしいくらい綺麗な肌。
触れてみても、指先に凹凸は返ってこなかった。
閉じられた瞳を縁取る睫毛は、今まで気がつかなかったが
ひよっとしたら自分よりも長いんじゃないかと思った。

うつすらと開いている形のいい唇。

口角はきゅっと上がり、言葉数は多くないけれど、
いつも穏やかな恵太の笑顔を連想させる。

そこから規則正しい寝息が漏れ、
亜子が少々いじった位では、まるで起きる気配はなかった。

恵太の唇と寝息を意識した途端、変な考えが亜子を襲う。

恵太君は、どんなキスをするんだろう……。

自分の突飛な考えにハツとし、慌ててかぶりを振る。
そんな自分が恥ずかしくなり一人赤面する。

(これじゃ、私変態だわ!!)

そう思いながらも、恵太の寝顔から目が離せない。

自分のために、今ここにいてくれる恵太。
生徒としてだけじゃない感情を抱いていることを
もう隠せそうにない事を亜子は悟った。

ぼんやりと過去へと思いをめぐらせる。

あの人から逃げるように他県の大学を選んだ。

距離さえ離れば、顔が見えない場所へさえ行けば、
二度と会えなくさえなれば、忘れられると思っていた。

何度もアドレス帳から名前を消そうとした。
でも、そこに表示される

『 消去しますか？ 』

という、事務的な文字に

答えを出すことはなかった。

いつか連絡があるかもしれない。

そう思い、たった一つの繋がりにすがり付いていた。

忘れられないまま想いは膨らむばかりで
進学しても、他の人と付き合ってみても
頭からあの人離れることはなかった。

いつかどこかで、映画やドラマのような運命的な偶然で
また会えることを、本気で祈っていた。

一人になると、あの人のことばかり思っていた。

それなのに。

赴任初日のあの日から、

亜子の頭の中を占めていく面積に少しずつ下克上が起きていた。

真つ直ぐで、有無を言わせない恵太の圧倒的な存在感。

男の人に一瞬で目を奪われたことなど、これまでなかった。

今思えば、そのときから惹かれていたのかもしれない。

あんなに人の名前と顔が一致しない自分が、

あの出来事と、名札だけで恵太を覚えてしまったのだから。

思いがけなく一緒に過ごした夜。

その時から繰り返し思い出されるのは、

優しく微笑みかける恵太だった。

スマートな身のこなしで会計まで終えてしまうオトナの一面。

拗ねるだけしか出来なかった自分を、敢無く降参させる声。

力強く引っ張ってくれる腕の強さ。

「好きな人と一緒にメシ喰いに行ったら、奢りたいって思うし」

そう言ってくれた、5歳も年下の生徒。

返事も出来ずにいる亜子に、何も強要せず、

ただただ寄り添っていてくれている。

あの人に愛されることを求めている亜子は

いつの間にか恵太の笑顔を、何よりも欲していた。

「恵太君……」

声にならない小さな声で、
愛しい人の名前を呟いてみる。

熱にうなされ、朦朧とする意識の中で
考えていたことは、恵太のこと。

これまでの3日間、数回鳴った電話やチャイムは
全て出なかった……というか出られなかった亜子。

だけど、恵太が訪ねてきたその時だけは
「……恵太君かも……」
反射的に体が動いていた。

玄関を開けたとき、
一番会いたい人の姿が目の前にあり、
自分から手を伸ばしていた。

汗だくになりながら駆けつけてくれた恵太の胸に飛び込んだと同時に
意識を手放した。

その後のことは飛び石のようにしか覚えていない亜子だったが
自分の肩を、壊れ物を扱うように優しく
でも力強く抱きしめてくれている恵太を、常に感じていた。

(ここ最近・・・ううん。

もう、随分、あの人のことを思い出さなかったなあ。)

亜子は恵太の寝顔を見つめながら、
自分の心の変化を感じていた。

いつの間にか亜子は

『 恵太くん 』

そう携帯に表示されるのを、心待ちにしていた。
着信音や、メール着信だけじゃなく
イルミネーションも個別設定するほどまでに。

亜子は恵太の髪を再び撫でる。

相手は生徒で、しかも芸能人だとか
そんなことが考えられないほどに、
亜子の中で恵太の存在が膨れ上がっていた。

全力で自分に向かってきてくれる真っ直ぐな恵太。
そんな恵太への想いは、
気付かないふりして目を逸らしていただけで、
もう随分前から育っていた感情。

起こさぬようにそつと恵太に握られていた左手を抜き取り
そのままキレイな頬に手を当ててみる。

「恵太君・・・大好き・・・」

今度ははっきり、そしてしっかりと意志のある声で
そう伝えた。

だけど・・・。

それは恵太が起きてしまったら、決して口にはいけない想い。
教師という立場がある以上、
たとえ自分も同じ気持ちだとしても
応えることは許されない。

万が一のことが起きて、
恵太の未来を潰すわけにはいかなかった。

心に秘めて恵太を見守ることが自分にできること。
だけどせめて今だけ・・・。
今だけは・・・と、そつと思いを告げてみた。

それが亜子が出した、自分を好きになってくれた恵太への
精一杯の答えだった。

恵太を起こさないようにベッドから出て
ローソファーに座りながら
目の前のテーブルの上においていた携帯を手取る。

アドレス帳から、あの人の名前を呼び出す。

初めて人を愛することを教えてくれた相手だった。
その失恋を認められず、幻想から抜け出せずにいた。

どうか、あなたの人生が幸せでありますように……。

今だから、やっとと言える。

亜子は、自分でも気が付かないうちに、
自分で縛っていた過去の恋から抜け出していた。

ベッドのほうへ目を向けると
ぐっすりと眠る恵太がいる。

その寝顔を確認し、温かな気持ちで満たされる。

「……。いままで、ありがとう」

もう直接伝えることはできないけれど、
それでも、と心からの感謝を呟く。

そして携帯のアドレス帳から、その名を消した。

『
＜郁^{かおる}さん＞ 消去しました
』

そう表示するディスプレイを確認して
そっと携帯を閉じた。

もう、戻らない。

カーテンを開けると、昇り始めた太陽が
放射線状に希望を振りまきながらビルの間を狭そうに手を伸ばして
いた。

33・手と手（後書き）

す、すみませんっ。

一晩寝かせて、やっぱり納得がいかず大幅に書き直しました。

あのままじゃあ、亜子、ただのイタイ子だったので・・・。

ここから大人ならではの葛藤をしてもらえればな、と彼女の成長に期待しています。

ごたごたですみませんでした・・・。

34・神様、今日だけ 1

ピンポーン

「あ、はい」

チャイムの音に返事をしながら玄関へ向かう。

先ほど、少し寄るとメールが来ていたため

相手が誰だか、分かっていた。

途中、姿見で全身をチェックし、ささつと髪を押さえ「よし」と咳く。

玄関を開けると、やはりそこには恵太がいた。

「こんばんわ。先生、調子は？」

朝と違い、今は制服姿になっている恵太を見上げるもの
まともに顔が見られない。

「あ、う、うん。もう平気。熱も下がり始めたし」

しどろもどろになりながら顔を背ける亜子を、

恵太は心配そうに覗き込む。

「・・・まだ、顔赤い」

「そ、それはっ！！」

まさかあなたが好きだと気が付いた途端、

恥ずかしくて顔が見られません、とは言えない。

「き、今日は、あ、暑いから」

夜になり、いい風が吹いている今、
明らかに可笑しい言い訳だったが
恵太はふっと少し笑うと。

「・・・だったら良かった。はい、これ」

そう言って手にしていた小さな紙袋を亜子に差し出した。
扉を押さえていた手を離し、代わりに背中を扉のストッパーにしよ
うとしたが、

恵太がさりげなくそれを押さえ、亜子の負担にならないようにした。
長い腕が亜子の頭上を通る、そのしぐさだけでドキッとすする。

「な、なあに、これ」

動揺を隠しながら受け取り、中身を覗き込むと小さな容器が二つ入
っていた。

まだほのかに温かい。

「それ、鈴木さんが先生に持って行ってって」

「鈴木さんて・・・サン・ボーンのマスター？」

先日恵太と食事をした店のマスターを思い浮かべながら
恵太を見る。

恵太はにっこり笑って、亜子の手に行っている袋を指差した。

「そう、先生が風邪引いてるって話したら、食べさせてやってって連絡くれた」

「そんな……。それで、恵太君遅くなったの？」

「仕事もあつたし、そのせいだけじゃないよ」

「そう……。なんか申し訳ないなあ」

恵太と鈴木が連絡を取り合ったり、仕事の合間に食べに行っていることは知っていたがまさか一度しか行ったことのない自分にまで、こんな親切をしてもらうなんて……と

少し戸惑い、恐縮してしまった。

「いいんじゃない？お見舞いって言ってたから。」

今度また、一緒に食べに来てくださって「

嬉しそうな恵太の顔に、胸が締め付けられる。

『一緒に……』

それを許されたら、どれほど幸せだろう……。

何も答えない亜子に恵太はふっと笑みを漏らした。

「じゃ、温かいうちに食べて。早く学校来なよ」

俯く亜子の頭を、恵太は空いているほうの手でポンポンと2回、叩いて扉から手を離れた。

背中に扉の重さを感じながら
にっこり笑って軽く片手を上げ、帰って行く恵太を見た途端
。

「い、行かないで！」

咄嗟に口走っていた。

その声に驚いた恵太が足を止め、振り返った。

「・・・先生？」

思いもかけない言葉に、面食らってはいるものの
心配そうに亜子を見つめる恵太。

その恵太を、亜子は今にも泣き出しそうな気持ちで
見つめ返した。

引き止めては、いけない・・・。

そう警告する頭と裏腹に、

心は恵太のそばにもう少しいたいと、声を上げてしまった。

それなのに、僅かな理性でそれ以上のことを何も言えずに、俯いて
しまった。

気まずい沈黙が流れる。

恵太もどう身を振っていいのか分からないのだろう。

啞然として次の言葉を待っていたが

小さく震える亜子の壊れそうな肩を見て、ふーっとな息を吐いた。

そして恵太は照れくさそうに俯いて、

鼻の頭をちよつと掻いた。

「・・・じゃあ・・・一緒に食べる？」

僅かな沈黙を破った恵太の声に反射的に顔を上げる。

恵太が亜子の部屋を指差して

にっこりと笑っていた。

「う、うんっ!!」

神様・・・。どうか、どうか今日だけです。

今日だけ許してください。

心の中で許しを請いながら

その提案に思わず食いついて、

亜子は恵太を部屋に招きいれた。

・・・この日、見守ると決めたはずの恵太との関係が許されない方向へ進んでいくことに

亜子はまだ気が付いていなかった。

35・神様、今日だけ 2

二人が食事を楽しんだサン・ボーンのマスター、鈴木が持たせてくれたのは

野菜がたっぷり入ったコンソメスープと、
ブゴクのお粥だった。

ブゴクとは干し鱈のことで、コラーゲンたっぷりで肌にも良いとわざわざ作ってくれたらしい。

病み上がりでさすがに全て食べることはできなかったがそれでもマスターの気持ちが嬉しかった。

なにより二人で他愛ない会話をしながらの食事は
亜子にとって一番の薬になった。

「あ、そういえば」

食後の食器をキッチンへ運びながら
亜子は座っている恵太へと目を向けた。

「今朝・・・大丈夫だった？おうちの方、心配してあったでしょう？
本当にごめんね」

食後にアイスコーヒーを運び

ミルクと砂糖は？と聞きくと、
恵太はミルクだけ、と答えながら苦笑いした。

「ああ、大丈夫。父さんはまだ寝てたから良かったけど、樹が・・・」

「コーヒーにミルクを入れ、ゆっくりとかき混ぜる恵太の大きな手に見惚れる。

氷がぶつかり合って涼しそうな音を立てながら混ざり合っていく様がキレイだった。

「・・・樹って？」

「あ、悪い。母親。母さんて呼ぶと、怒るんだ」

「へえ... そうなの」

恵太君のお母さんて、きつともものすごい美人なんだろうなあ。
そんなことを思いながら自分用にはお白湯と薬を置き、恵太の向かい側に座った。

「樹が、玄関で仁王立ちしてて参った」

「に、仁王立ち?!」

その言葉に驚いて、薬を飲もうとしていた手を止めた。

そうなのだ。

恵太が早朝、慌てて帰宅してみると、

いつもならテコでも起きない超低血圧の樹が
玄関の扉を開けてすぐ。

完璧なメイクとファッションに身を包み、

それはそれは立派なフォルムの仁王立ちをして恵太を出迎えたのだ。

「おーかーえーりー。けーえーたーくーんー?????」

右の眉が上がり、威厳たつぷりなスマイルの仁王像。

恵太の背筋を一瞬で凍らせるには充分すぎる迫力だった。

「た、ただい・・・」

「ただいまじゃないわよ！このバカ息子！！」

最近真面目にレッスンしてるかと思ってみりゃー、あんた！

え？！高校生の分際で無断外泊とはいい根性してるわね！大体ねえ・
・・・」

玄関から中へ一歩も入れぬまま、マシンガンのようなお説教をお腹
いっぱい喰らった。

樹が仕事の電話で場を離れた隙に恵太は自室へ逃げ込み、

父の朝食を準備する樹の目を盗んで学校へと向かったらしい。

自分のせいで

仁王像にお説教をされている姿を想像すると

いたたまれない気分になった。

「そつだよね。大切なご息子が帰ってこないんだもん。

ご心配は尋常じゃなかったはずよね・・・。ホント、ごめんなさい」

亜子は深々と頭を下げた。

朦朧とした意識の、緊急事態といえども
生徒を自分の部屋へ泊めてしまった事実が胸を衝いた。

そんな亜子に、恵太は少しだけ驚いて
そして

「や、あのまま寝た俺が悪いし。特に問題ない」

そう言って、いつも亜子を惹きつけてやまない、あの笑顔を向けて
くれた。

「でも・・・やっぱり迷惑をかけたのは私だから・・・」

そう言って俯いたため

恵太の視線が、ふとローテーブルの下にある収納スペースに
向けられ、そして手を伸ばしていることに気付かなかった。

そこには数冊の雑誌を置いていたのだったが…。

「…ん…？あ！…だあああっ！！！！」

恵太が動く気配を感じて顔を上げ、その行動を目にした途端
亜子の顔は見る見るうちに赤くなった。
と同時に奇声を上げながら慌てて恵太の隣にすべり込み、隠そうと
した時にはすでに遅く。

雑誌は全て恵太の手中に居場所を変えていた。

恵太は、確かめるように一つ、また一つと眺めていた。

「ちちち、違うのっ、それはっ！！」

亜子は必死に言い訳を探して咄嗟に口を開くが後が続かず、口をパクパクさせるしかなかった。

そんな亜子に、恵太は少しだけ顔を上げて微笑んでみせた。

「先生、また、酸欠の金魚みたい」

「なっ……、だから、それはっ」

そう言っつて恵太の視線は、また雑誌へと戻る。

亜子は全身から大量に汗が噴出すのを感じた。

それは熱のせいではなく、暑いような寒いようなあまりの恥ずかしさからくるもので。

叫んでしまいのに、ぐうの音も出ない。

金縛りの様な硬直が、体を襲っていた。

全ての雑誌を一通り眺めた後。

恵太は、ふっと笑って顔を上げた。

「これ……全部俺ばっか」

「……！！！！！！、ごめんなさい……」

あまりの恥ずかしさで涙が出そうになる。

恵太の顔が直視できず、左下のほうに視線を落とした。

「どうして謝るの？」

「だ、だって……これじゃあ、私……ストーカーみたいじゃない……」

自分で言っていて、これほどばつが悪いことも、そうそうない。最後のほうはほとんど聞こえないような声になっていた。

恵太がモデルをやっているという話を聞いてからだった。

最初はモデルの恵太を見てみたくて雑誌などを探したのがきっかけだったが、いつの間にか、自分の知らない恵太のことを知りたいと思うようになって

コンビニや書店などで、恵太が表紙を飾っているものや、『諫山 恵太』の文字があると思わず買っていた。

それがここ数ヶ月で、小さな束のようになっていたのだ。

「ねえ、先生？」

恵太の言葉に恐る恐る顔を上げる。

そこにはいつもの笑顔ではなく、体を亜子の正面へ向け直つ直ぐに見つめる真剣な眼差しがあった。

その表情がとてもキレイで、

思わず射抜かれたように動けなくなる。

恵太の右手が、そつと亜子の後頭部へ回り

髪を優しく撫でた。

目の前に恵太の顔が迫る。

世の中から全ての音が消えたかと思うくらい自分の心臓の煩い鼓動だけが鳴り響く。

恵太の額が、亜子の額にそつと当てられる。

「……俺のこと、好き？」

35・神様、今日だけ 2（後書き）

つ、ついにグダグダな恵太と亜子、正念場です。

展開が非常に遅いこのお話。

でも、この性格の2人には、これ位時間があったほうが自然な気がして・・・。

（力量のなさを、言い訳。）

果たして亜子は、どうするんでしょうか。

病み上がりなのに大変だわ（笑）。

今後を見守っていただければ嬉しいです。

36・神様、今日だけ 3

「・・・俺のこと、好き？」

初めて直近で聞く、低く甘い声に
ゾクツとする。

恵太の優しい束縛。
身を擦じらせれば簡単に逃げられるはずなのに
全身に力が入らず、動けない。

「俺のこと、好き？」

もう一度、囁かれ、恵太の息遣いが
亜子の唇へと当たる。
麻酔をかけられたのような痺れる感覚で
僅かに残っている理性に必死にしがみつき、
声を絞り出す。

「す、き……じゃ……ない」

言い終わる前に、恵太の唇が
亜子の唇に、そっと触れる。

「……聞こえない……」

答えてはいけない。

応えては、いけない。

頭の片隅で、自分の声がする。

「……わたしは……すきじゃ……」

震える声で、もう一度呟こうとするが
角度を変えて、恵太の唇が再びあてがわれる。

「……聞こえない」

ちゅっと、わざと音を立てて唇を奪われる。

「聞こえるように……ちゃんと、言っ」

「わ、たし・・・せんせい、だし・・・」

決めたのだ。

教師が生徒と恋愛しては、いけない。

自分の想いで、恵太の未来を潰してはいけない。

消えかかる理性を総動員し、

顔を背けようともがくが恵太はそれを許してはくれない。

亜子の顎に手を添えて、恵太の目の前で固定する。

真っ直ぐな、切れ長のその瞳に見つめられると

想いが溢れ出てしまいそうで苦しくなる。

「だ、め・・・だよ・・・。こんな、こと・・・。」

恵太の動きは止まらない。

亜子の言葉の間にも

何度も、何度も、優しく続けられるキス。

「・・・じゃあ、ちゃんとフって?」

恵太が小刻みに震えている亜子の背に両手を回し、そっと抱き寄せる。

額と額、鼻と鼻を合わせる。

それはある意味、
キスよりも間接的な刺激で
亜子の神経を静かに、しかし激しく襲った。

「俺の事、どう思ってるの？」

真っ直ぐで、少し潤んだ瞳は色っぽかった。
伏せ目がちに囁かれ、全身をゾクゾクとした何かが逆走し
頭の芯を麻痺させていく。

「き……らい……」

震える声で呟いてみるが、力のないその言葉に
説得力はなく。
その証拠に恵太は亜子の言葉を受けてもお構いなしに、
小さい子を宥めるような微笑みを向けていた。

……もうとっくにバレている。

恵太君は、この嘘を許してはくれない……。

そう思った。

「きらい？」

「……きらい……いい……じゃ……ない……」

それは、亜子の降参宣言。
もう、抗うことが限界だった。

同じ気持ちで嬉しいはずなのに、
進んではいけない道に、恐怖でひるんでしまう。
ごちゃ混ぜの感情に、苦しくて恵太の顔が歪んで見える。
亜子の瞳いっぱい涙が、今にも零れ落ちそうだった。

亜子の言葉に微笑み、両手でそつと頬を包み込みながら
最後の一言を待つ恵太。

「けいたくんが……好き……」

言い終わると同時にホロホロと、粒となって零れた涙が
恵太の手に伝わる。

「……上出来……」

恵太はもう一度優しくキスを落とすと、
亜子の泣き顔を満足そうに眺めて、ふっと笑った。

「俺も、あこが好きだよ」

そう言って亜子の小さく華奢な体を抱きしめると
今度は深く、長いキスを
いつまでも落としていった。

もう・・・戻れない。

亜子は、初めて恵太の口から、
何度も零れる自分の名前に幸せを感じながら
そっと恵太の背に手を回した。

大きくて、遅しくて、温かな背中。
恵太に包まれると先ほどまで感じていた恐怖が
不思議と和らぐのを感じた。

次第に強さを増す激しい口付けに、思わず吐息が漏れる。

背中に感じる恵太の腕が、壊れ物を扱うかのような優しさから
愛しいものをもっと感じたいと、かき抱く強さへと変わっていく。
それに応えるように亜子も抱きしめ返し
その秘め事に身を委ねていた。

神に祈った約束は『今日だけ』。

ならばずっと『今日』が続きますように……。

甘い刺激に麻痺していく意識の中
永遠の今日を、ひそやかに祈った。

36・神様、今日だけ 3（後書き）

恵太、意外にドS（笑）！？

ちよつとあまりの恵太の動きに、らしくないかなあ・・・とも思いましたが

亜子の前だけなら・・・という一面があってもいいか、と良しにしました。

いかがでしょうか？

亜子も、病み上がりで一生懸命理性を保とうとしたんですが・・・。
恵太に落とされてしまいました（笑）。

朝決意したばかりだったのに（笑）。

でも、好きになってしまった気持ちはそう長くは抑えられないので・・・。

長いこと煮え切らなかった二人が、ようやくゆっくりと動き出ししました。

これからも見守っていただけたら嬉しいです。

37・スーパーマンはいらない 1

さすがに二日連続の外泊はマズかったか。

放課後事務所へ向かいながら、携帯のメールを改めて読み返す。

f r m : 樹

s u b : 緊急招集

学校終わったらすぐ事務所。
大事な来客があるから5時厳守。

話す事は山のようにある。
1秒でも早く来ること。
場合によっては解雇あり。

E N D

恵太は一つ、小さな溜息をつく。
いつもと違う、樹からのメール。

『場合によっては解雇あり』

その一言に胸が苦しくなる。

樹が見ている俺は、呼び出している俺は
息子ではなく商品としての『諫山恵太』だ。

「樹、俺って、何？郁の代わり？」

誰にも聞こえない、今にも消え入りそうな小さな眩きを吐き出し
乱暴に携帯をポケットにしまい込む。

深呼吸を、一つ。

もうすっかり夏の気配で浮き足立つ学園の空を見上げた。
蝉は今日も力の限り忙せわしく声を上げている。

俺は……。

一体、誰なんだ？

怪しく傾き始めた自分の思考を止めるべく
大きくかぶりを振る。

……集中しよう。今は。

諦めたような苦い表情をしたまま、
事務所へと向かった。

事務所に入るなり、血相を変えた佐々木が恵太を捕まえた。

「あ、恵太君、良かった。来てくれて。

「もー社長、機嫌悪くてお手上げなんだよ」

恵太を事務所の廊下へ連れ出すと

心底困った顔で恵太にしか聞こえないように
小声で話す。

「すみません……」

「社長と喧嘩でもした？」

喧嘩……。

「はあ、まあ……」

いくら樹と恵太が親子だと知っている、数少ない人間である佐々木にも

さすがに無断外泊2日目です。

とは言えない。

そのとき、廊下の一番奥にある社長室の扉が開き
樹と目が合った。

「あらあ、これはこれは、けーいたくん？」

顔は笑ってはいるが、眼光鋭く

目は完全にターゲットをロック・オンしている。

「こ、こわっ……」

思わず怯んだ恵太。

「さっ、け、恵太君、お客様がいらっしやるから応接室へ行こうか
！！」

佐々木は恵太の背中をこれでもかという力で
ぐいぐい押し、逃げるように応接室へと急かした。

数分後。

気まずい沈黙が応接室を漂っていた。

「別の仕事がありますから・・・」と言って
佐々木が逃げるように出て行ったため、
ここには恵太と樹だけになった。

「・・・何よ。なんか言いなさいよ」

背もたれに足を組んだまま体を預け、斜めから
恵太を眺めていた樹が口を開いた。

「・・・悪かったと思ってる・・・」

ソファーに浅く座り、膝に乗せている組んだ拳を見ながら
ポソツと答えた。

「恵太・・・。あんた、彼女でもいるの？」

単刀直入な質問に、思わず言いよどむ。

「正直に答えなさい。どうなの？」

恵太によく似た、切れ長の瞳は
恵太以上の力を帯び、しつかりと見据えていた。

「……いないよ……」

やっと手に入れた、本当に大切な人。

言えば、反対される。

言えば、力ずくでも別れさせられるだろう。

樹が本気でそれをやることを、恵太は知っている。

自分は商品だから。

「あのね、あんた分かってる？今が一番大事な時なのよ？」

全ての恋愛が悪いとは言わない。ただ今は、本当にまずいわ。

時期と相手を間違うと、本当に生きていけない世界なの、あんたも知ってるでしょう？」

前のめりになりながら、恵太に掴みかかりそうな気迫で迫ってきたその時。

応接室の扉がノックされた。

恵太は助かったと思った。

これ以上お説教と追求が続けば、隠せることも隠せなくなる。

「どっそ」

樹はまだまだ何か言いたそうな表情をしながらも
すぐに気持ちと表情を切り替えて、入室を促した。

「失礼します……。社長、松浦泰次監督がお見えになりましたのでこちらへお連れいたしました」

松浦泰次……。

その名前に、恵太の表情が険しくなる。

「お忙しいところお越しいただきましてありがとうございます。わたくし……」

入り口へと移動した樹がお決まりの挨拶を交わしている。

監督と会うなんて、聞いてない……。

その光景を、捉えながら恵太の中で黒い感情が渦を巻きはじめていた。

37・スーパーマンはいらない 1 (後書き)

やっと亜子と進展があった恵太ですが、働く高校生にはまだまだ試練がありそうです。次回、泰次の登場で、いろいろ恵太の運命を引っ掻き回しそうです(笑)。

天才肌は、何を考えているのか分からないので恵太、戸惑うだろうなあ……。

こんなせまーい場所までお読みいただきましてありがとうございます！

38・スーパーマンはいらない 2

「どうもっ、初めまして。松浦泰次です。おーおー！ナマ諫山恵太じゃん！」

初対面にも関わらず軽いノリの泰次に戸惑いながらも求められるままに握手を交わす。

「初めまして。諫山恵太です。よろしくお願いします」

「やだねえ、若者。固いよ〜？？堅物は老けるの早いんだぜ？知ってた？」

「はぁ・・・」

泰次は今年32歳になる若手だったが

数々の賞を総なめになっている今最も注目を浴びている監督だった。

少々型破りな一面もあり、才能はさておき、私生活やその破天荒な面で

賛否両論混ざり合い、週刊誌の格好の餌食となっていた。

当の本人は、全く気にも留めていないようだったが。

そんな自由人泰次は、

「座つてもいいですか？」とたずねるや否や、答えを待つまでもなくどかつと座り込み、啞然として動けない恵太と樹、泰次を案内した佐々木を見て

「？諫山恵太、座れば？」

と着席まで促すものだから、恵太たちは完全に言葉を失った。

「早速だけど、諫山恵太」

「・・・恵太で、いいです」

「あ、そう？じゃあ、諫山恵太。単刀直入に言うわ」

・・・この人、人の話聞けないんだ・・・。
さらりと流す泰次の顔を見ながらそう思った。

「映画、乗り気じゃないって本当？」

「・・・すみません・・・」

「ちよつ、恵太?!何言ってるの!すみません、そんなことないんです。

今もサックスのレッスンを・・・」

バカ正直な恵太の答えに慌てて身を乗り出した樹が
必死にフォローへ入ったが、泰次はそれに顔色一つ変えることなく。
右手を軽く挙げ、無言で樹を諭した。

「ふーん。そつか。台本渡しただろ?それは読んだ？」

「・・・まだです」

「・・・っ。恵太っ!!」

その答えに樹は額に手を当て、背もたれへなだれ込んだ。
泰次の顔をまともに見ることもできず、顔を伏せ

指を絡め組んでいる自分の手を見つめながら
恵太自身も、これでこの話も終わったな、と思った。

しかし。

「いいねえ！諫山恵太！！最高じゃん。やっぱり主役決定ね」

「・・・は？」

泰次は満足そうな笑みを浮かべて、

思わず顔を上げた恵太を見た。

あまりに非凡な対応に

泰次以外がまたも言葉を失くす。

「来週初め、顔合わせするから。制作発表はまた後日連絡するわ。
撮影、すぐにでも入りたいから台詞入れとけよ。て、あー、諫山恵太
高校生か。いいねえ、若者。じゃあしょうがないな、夏休み入った
らすぐだな」

「ちょ・・・ちょっと待ってください」

「何？ああ、ひよつとして盆休みの心配？諫山恵太、意外に墓参り
とか大切にするタイプ？」

「だから！待ってください！！俺、返事してないです」

泰次のペースに飲み込まれていた恵太が

思わず声を荒げてその場に立ちあがり、泰次を見据えた。

いつも温和な恵太のその表情に

樹と佐々木にも一瞬のうちに緊張が走る。

それでもやはり、一人冷静な人物が一人。

「なんだ。ちゃんと腹から声出るじゃん」

泰次は満足そうにニヤリ、と笑いながら
恵太を見上げていた。

泰次は硬直している恵太たちを気にも留めず
ポケットから煙草を取り出すと
指で挟んだそれを顔の位置まで上げ、軽く樹に目配せをした。

言葉だけでなく、動きまで失っていた樹は、
ハッと我に返り、テーブルに形ばかり置かれていた灰皿を
泰次へと押し進めた。

「諫山恵太、お前、腹ん中ダークだろ？自信無さそうな顔してんな」

「・・・」

泰次は恵太を探るように一瞥をくれた後、
使い込んでいると見えるジッポライターを開き、
ゆっくりと火をつけた。

次から次へと想定外の言葉を投げつけられたせいか、
触れられたくないところを衝かれたせいか。恵太は言葉を失くした。

38・スーパーマンはいらない 2 (後書き)

自由人、泰次登場です。

ちよつと今まで書いたことのないタイプの人間なので結構楽しいかも(笑)。

恵太の人生を変えることになりそうな泰次、
どうやって恵太を口説き落とすのか・・・。
またお暇があれば覗いてやってくださいね。

39・スーパーマンはいらない 3

泰次は見かけを裏切るタイプだ。

傍若無人に振舞いながら不敵に微笑む泰次を見下ろしながら
恵太は確信した。

泰次は決して骨太だとか、アウトローだとか、
そんな印象を与える顔つきではなかった。

と言っか、むしろその逆。

黙ってさえいれば笑顔なんて、

その辺の二枚目俳優に引け目を取らないくらい

甘い雰囲気を漂わせていたし、

格好だつて、清潔感のある爽やかな着こなしがとても似合っていた。

可愛らしいと評したいほどのくつきりとした二重の黒目がちな瞳、
すっと通った鼻筋に、血色のよいぷっくりとした整った唇。

無造作に見えるよう計算されたパーマも、

色白の泰次に良く映えるオレンジがかかった明るいカラーで、

泰次の顔立ちをより甘く引き立てるアクセサリーとなっていた。

さらりと着こなしているジャケットは

恵太がイメージモデルを務めるブランドのもので

恵太に気を遣つてのセレクトだろうと安易に想像が付いた。

そんな小技の効いたお洒落と相手への気遣いを見せる

落ち着いた大人の雰囲気、男の恵太でも

思わずじつと見惚れてしまっただった。

それが、だ。

その外見で、だ。

誰が口を開けばこれだけの自由奔放っぷりだと想像するだろうか。
くしゃくしゃヘアーも含め

このルックスが全て泰次の計算だとしたら。

『人は見かけによらないぜ』作戦まんまと大成功ということになる。
しかも、かなりの衝撃で。

こいつは末恐ろしいと、恵太は背筋に嫌なものが走り抜けるのを感じていた。

そんな恵太の視線など、当然お構いなしの泰次は。

カシャン、と小気味良い音を立てながら、ジッポライターの火を消すと、

ゆっくりとその不健康な煙を肺まで届け、すーっと筋を作って吐き出した。

「俺さ、スーパーマンは要らないんだよね」

泰次は自分の膝に肘を突きながら

煙の流れる先を見つめるように呟いた。

「諫山恵太の出たああのバンドのPV、俺の友達が撮ってたよ。」

そいつが『泰次、多分このモデル好きだよ』ってお前見せられたとき、

『こいつ、映像経験ないくせにふっとした時に絶妙な表現しやがる。おー生意気!!』
って思ったわけ。

決まてうまいわけじゃない。でも、なんか気になるんだよ。お前の動き。

何でだろうと思って何度も見直してたら、

ちよいちよい、そういう・・・なんていうのかなあ。

はっとさせられるところがあってさ。こいつ素質あるわって」

今度は恵太の顔をじっと見つめて、
立ち上がったままの恵太を座るように、手をヒラヒラと揺らして促した。

逆らう気持ちも沸かないくらい、泰次に踊らされている恵太は、もはや従うことしか選択肢がないように、どすつと乱暴な動きで元いた位置に腰を沈めた。

「俺が今欲しいのは、頭のいい天才肌の役者や、
何でもできるスーパーマンじゃなくて、
すげー歪んだもの抱えてるけど根性と目力のあるやつ」

そう言うと、もう一度煙を肺まで届け
今度は一気に吐き出し、話を続ける。

「もし諫山恵太が芸能人がぶれした、自信満々なヤツでさ、
『俺、結構役者向いてると思うんです』とか
『演じることに興味出てきたんです』とか売り込んできたら、
ボコボコにけなして『おととい来やがれ!!』ってこっちから断っ
てやろうと思ってた。」

「ボ、ボコボコ・・・」

思わず苦笑いの恵太に

泰次はいたずらが成功した子どものように
にかつと笑いながら「そう、もーボッコボコ!!」
と拳を作ってみせた。

矛盾しているようにも感じる泰次の話だが
恵太はなんとなく、泰次が自分に目を付けた理由が
分かり始めていた。

「オフアーしても返事ないから『お、悩んでるな』って嬉しくなっ
てこっちから来てみりゃー、なんか社長さんに説教されてるし、
でかい図体してるくせに自信無さそうな顔してるし、
その割りに目だけ強くてさ。もー俺の理想どおり!!面白すぎるわ。」

この程度は泰次の中でボコボコではないらしい。
どう考えても褒められているとは思えないその評価を黙って聞いて
いた。

「そんなヤツが、カメラの前ではこんだけの仕事ができる。」

数分のPVの中であれだけの表情ができる」

煙草を銜えたまま、資料であろう数枚の恵太の写真を手に取り揺らしてみせた。

「俺は、こういう根性のある仕事をする諫山恵太のonにもoffにも惚れたの。」

だから、今回の主役はお前しかいない。

お前撮れると思うと、楽しみでゾクゾクする」

煙草を灰皿に押し付けると

いつになく真剣な顔つきで、恵太を見つめた。

「自信ないなら、ないままで来い。自信なんて何かをやり遂げた後、振り返ったときについてくるもんなんだ。」

何もやってない諫山恵太が自信あるほうがおかしいんだよ。

そのままの、不安定なお前のままやれよ。俺が責任もっていじり倒してやるから。」

諫山恵太をうまくいじれるのは、後にも先にも俺しかいないよ?」

泰次が右手を差し出した。

「やるよな? 諫山恵太」

恵太は自分の中で騒ぎ出した心臓が煩くて仕方がなかった。

新しい世界へ飛び込む不安からか、自分を呪縛から引き剥がして欲しいという期待からか。

じっと泰次の目を見ると。

そこには先ほどまでのいたずらっ子のような色はすっかりと消え。

映画を愛し、本気で恵太を撮りたいと言ってくれる、

一人の監督の真剣な眼差しへと変わっていた。

断る全ての理由を絶たれた恵太は、

自信のかけらもないままに、

迷いながら自分の右手を泰次へと差し出した。

39・スーパーマンはいらない 3 (後書き)

恵太、口説き落とされました。

人生の変革期って結構同時にいろんなことがやってくる(来た)気がします。

恵太にとっても、今がそれなのだと思って大切に書けたらなあなんて思っています、なかなか・・・(汗)。

いいオトコに成長できるよう、またお暇なときにも覗いていただければ

カレ、きっと頑張ります。

いつもありがとうございます。

40・願ひ言

夜になつても暑さが和らぐことはなく、じつとしていても汗が引かないため、仕方なく窓を閉めた。エアコンのスイッチを入れる。

振り返ると背後では恵太が台本を片手に、床に座り込んでソファへもたれかかり
ブツブツと呟きながら暗記していた。

思わずふつと頬が緩む。

学校では見られない、制服を着崩したラフな恵太。そんな恵太を久しぶりに近くで感じる事ができて
込み上げる嬉しさを我慢できそうになかった。

亜子の視線に気が付いたのか、恵太が顔を上げた。

「なに？」

「ううん。なんでもない。今エアコン入れたからすぐ涼しくなるよ」

恵太の突然の微笑みに思わずドキッとした。
赤くなる顔を隠すようにまた窓へと向き直し
誤魔化すようにカーテンを閉めていると。

「ずるい。先生一人で楽しそう」

いつの間にか背後に来ていた恵太に
後ろからふわりと抱きしめられた。

恵太の纏っているコロンか香水か。亜子の鼻を甘美に魅了して。それだけで心拍数が上がるのに。

亜子の頭に頬を擦り付けるように喋る恵太の声が直接脳を揺らして、亜子を恋人だけが与えられる心地よい痺れに酔わせた。

「そ、そんなつ。ただ・・・」

「ただ？」

「久しぶりにゆっくり顔見れたから、ホツとした」

そう言いながら亜子を包み込むように回されている恵太の腕に自分の手をそつと添えた。

「・・・ごめん、最近忙しくて・・・」

「あ、違っの！そうじゃないんだよ」

亜子は恵太の中で、くるりと向きを変えて向かい合う格好になった。

背の高い恵太を見上げながら、そのキレイな瞳が曇っていないか確かめる。

「ほら、私も校内研修の準備とか、期末試験とかもあったし。

恵太君時間作ってくれてたのに、私の都合が付かなかったただけだもん。

だから今日こうやって会えたのがすごく嬉しかったの！」

そう言って、恵太の背中に手を回し

ぎゅっと抱きしめた。

顔をその胸にすりすり、甘えたようにうずめると、同じ強さで恵太も抱きしめ返してくれた。

「……ありがとう」

「んーん。ふふっ、恵太君のぎゅー、落ち着く」

そう言っつて、ふざけたように恵太を抱きしめる腕に力を込めた。

亜子の子どもじみた言葉に

恵太は軽く笑って亜子の髪を優しく撫でた。

「俺も落ち着く……。早く先生に会いたかった」

「……私もだよ」

恵太の仕事が忙しくなっているのは明らかだった。

泰次からのオファーを正式に受けてから

徐々に恵太の周りが騒がしくなっているようだった。

映画の撮影に備えたレッスンもそうだが、注目を浴び始めたことから増えている新しい仕事や、単発の取材。

加えて前々からイメージモデルを務めているブランドの冬物の撮影も今が佳境だと言っていた。

亜子はそれを恵太に負い目として感じさせるのが嫌だった。

自分と付き合うことで恵太の負担にはなりたくなかったし

むしろ、恵太の未来を思うと一番の応援団でいたいと思っていた。

それでも恵太自身は会う時間が少ないことを気にしているようで、恵太は時間をやりくりしてはこうやって亜子に会いに来ていた。学校からそのまま仕事に向かっていった恵太が家へ帰る前に亜子の部屋へ寄った今日。

ゆっくりとした時が流れていた。

教師と生徒。

大事な仕事を抱えている、恵太。

堂々とデートしたり、食事に行ったり・・・。

そういうことが出来ない二人だったが、

それでも一緒にいられたら場所はどこでも良かった。

そんな穏やかな時間が大きくなると同時に。

同じ大きさを影も背を伸ばしていた。

恵太の未来に自分が邪魔になる時が来たら。

恵太がこの関係で無理をすることがあつたら。

そうなった時は、全ての責任を自分が負って

喜んで恵太の前から去ろうと思っていた。

決している加減な気持ちで付き合っているわけじゃない。

むしろどんどん恵太の存在が大きくなっていて

恵太がいてくれるから、いつも以上に仕事も頑張れる自分がいた。

それでも。

自分が応えてしまったその気持ちのせいで

恵太を困らせるようなことが起こるなら、

そのときはキチンと自分から去ろうと、せめてその覚悟だけは持つていようと

心に決めていた。

「どした？」

抱きついたらままだ動かない亜子に

恵太が笑いながら頭をポンポンと叩く。

「なんでもなーい。恵太君のにおい、充電してるの！

ね、もうちょっとだけこのままでもいい？」

顔を上げずにわざとおどけた明るい声で、答えてみせた。

じゃないと、幸せを感じながら『いつか』の覚悟に泣きそうになっていることを

勘の良い恵太に知られてしまいそうで。

「ぶっ。どうぞ自由に」

恵太の甘く、低い声が亜子の耳元で囁かれ、脳内に響く。

全身がゾクツと騒ぎ立ち、鼓動が一気に激しくなる。

「ねえ、先生？」

「な、なに？」

思わず声の上擦ってしまふ。

そんな亜子を知ってか、そのまま耳元で囁くように話す恵太。かかる息がくすぐったいような、恥ずかしい快感のような。ゾクゾクと逆立つ神経とともに胸が甘い感覚に支配されていく。

「8月になったら、どっか行こう」

「え？」

顔を上げようとしたが、恵太の大きな手が優しく後頭部を撫でていてそっと阻止された。

仕方なく顔をうずめたまま恵太の胸の中で、続きを待つ。

230

「8月に、少しだけ休みが取れそうなんだ。もし先生の仕事がなかったら、どこか行こう。堂々と二人で歩けるところ」

恵太の胸から聞こえる鼓動が心なしか速い気がする。

「どうしたの？無理しなくても大丈夫だよ。夏休み、ハードって言ってたじゃない」

自分のために無理をしているのか……。心配になって少し、緊張が走る。

「……俺が、無理。」

先生と・・・手、繋いで、デートしたい・・・」

耳から伝わる恵太の鼓動が
一段と早くなる様を聞いて。

好きなのは・・・。

一緒にいたいと思っっているのは、自分だけじゃない・・・。

そう思うと、先ほどまで影を潜めていた胸が
温かい、ほんわりとしたものに入れ替わっていく気がした。

「・・・アコと、一緒にいたい・・・」

「うん・・・私も。じゃあ、8月を楽しみにしてるね。

ありがとう、恵太君」

そう答えて恵太の胸の中で、もう一度すりすり甘えてみる。

もう、無邪気なまでに永遠を願えるほど

子供ではいられなくなってしまったけれど。

たくさん覚悟とリスクを背負った恋だけど。

相手にも同じものを背負わせてしまっただけ。

それでも・・・。

それでも今は・・・。

永遠それを願わずにはいらなかった。

ゆっくり顔を上げると。

いつも飄々としている恵太が
顔を耳まで赤くして、照れ笑いをしていた。

恵太みたいな人でも、デートに誘うのに緊張したり
照れたりするんだ・・・。

恥ずかしいと言って、なかなか名前前で呼んでくれない、可愛い彼氏。
呼んでくれた後は、必ず真っ赤になるんだよね。

そう思ったら、自然に亜子も顔がほころぶ。

目が合って二人で笑いあった後、どちらからともなく
唇が重なった。

お互いを確かめるように噛み付いたり、吸い寄せたり。
角度や強さを変えながら何度も何度も味わう。

久しぶりの甘い時間に夢中になりながら、

亜子は何があっても恵太だけは守り通そうと恵太のシャツをぎゅっ
と強く握り締めた。

41・カワイイカワイイ小鳩ちゃん

恵太の夏休みが始まると同時に映画の撮影が始まった。

初めてのことでだらけで全てが手探りの恵太。

モデルの時とは違う空気感や、泰次独自の手段になれるのが精一杯で押し流されるように半月が過ぎた。

「ケータっ！！なんや暗い顔してんなあ。朝は元気な挨拶からやで
〜?!」

後ろから軽快な関西弁とともに恵太の背中に体当たりしてくる人物が一人。

もう毎朝の恒例行事のようになっていて
最初は微笑ましく見ていたスタッフだったが
最近は誰も気にも留めなくなっていた。

「・・・おはようございます」

「はい、おはよーさん！よう出来ました〜。さて、私は誰でしょう？」

「・・・カワイイカワイイ小鳩ちゃん」

うんざりしながら、まるでオウムのように仕込まれたとおりの台詞を棒読みで返す。

やらないと一段と面倒くさいことになることをこの半月で学習したからだ。

「あつたり〜！可愛いやなんて、なんやケータ、うちに惚れてんね

やるー。

もー照れてまうわあ。付きおつてあげても、ええよ？」

ワザとらしく頬に手を添え、いやんいやんと顔をふる、小鳩、

つみづきこはと
海月小鳩

が、この映画での恵太の相手役だった。

今年大学2年生になるハタチだと、聞いてもないが本人が言っていた。

黒光りする見事なストレートヘアは顎のラインで前下がりにデザインされていて

小鳩が動く度にサラサラと音を立てそうなほど繊細に揺れた。

綺麗に切りそろえられた前髪が、小鳩の意志の強そうな、大きな瞳を一段と引き立たせていたし、

スツと通っている鼻筋、ぷっくりとした小さな唇が、小さな顔に整然と配置されていて

いかにも女優という雰囲気のある愛らしい顔立ちをしていた。

黙っていれば、だ。

一度口を開くと、小さな体のどこにそんなパワーを秘めているのかと思うくらい

よく喋り、よくじゃれ付き、よく笑った。

メインの出演者が全員揃った初対面の席でも

恵太が年下と知るや否や

「うつわ、その年でその落ち着き、詐欺やん！自分老けてんなあ！！
イケメン君、若さが足りひんで」

と、泰次よろしくけなされ、びつくりしたものだ。つた。
啞然として言葉を失っている恵太なんてお構いなしに

「てことはうち、小鳩姉さん?! うっわあ、ええ響き!!
しゃーないわ、姉さん呼ばしたる! 姉さんが面倒見たるからなあ」
と、抱きついてきそうな勢いのところを

「おい! 鳩ポツポ! うるさい。恵太固まってるから。
撮影中に高校生に手出したら、お前、鳩サブレにするぞ?」

そのやり取りで一同どつと笑いに包まれ、場が和んだものだった。

その日から、小鳩は本当によく恵太の面倒を見てくれた。
現場特有のルール

例えば恵太の母親役の麻子さんは、気難しくて自分より若
輩者の役者が
自分より現場入りが遅れたら、絡みの時ものすごく睨みつけられる
というような裏情報から
演技中でもカメラの位置で、どう撮られるか意識しろとか、
顔のアップのシーンでも爪の先まで神経は集中しろとかいう、役者
としての心得

など、事細かに教えてくれたのは小鳩だった。

スタッフの顔と名前も、小鳩が会話の中に盛り込んでくれるおかげで
自然と一致するようになってきた。

そんな小鳩をやはり同じ仕事を誇りを持って向き合っている人間と

して尊敬していたし
人生初の女友達って、こんな感じなんだと、一緒にいる時間を心地よくも感じていた。

「さて、今日も頑張っていきましたよっかねっ、『慎一郎くん』」

小鳩が役名で恵太を呼び、自分の右の手のひらを顔の横に置いた。

「よろしくお願ひします。『沙良さん』」

恵太も小鳩を役名で呼び、その右手に自分の手を打ちつける。パチンつと軽やかな音を立てて合図する。

これも、毎朝恒例の光景だった。

小鳩の要望で始めた、役に切り替えるための儀式。

小鳩はこの儀式の後は、

一切恵太に纏わり付くことはなく自分の世界に入った。

初めは戸惑っていた恵太も、その小鳩の変化に影響されたのか難しかった気持ちの切り替えがスムーズに行くようになって来た。

奔放な小鳩に振り回されながらも、小鳩の存在は恵太の中で信頼の置ける人物となっていた。

それから比較的順調に撮影は進んでいった。

街は連日猛暑日を記録していて、夏真っ盛りだった。

「ケータ、今日これからご飯行きひん？」

その日の撮影が予定より随分早く終わり、
帰り支度をしていた恵太の楽屋を小鳩がノックもなしに入ってきた。

「あ、悪い。今日は約束がある」

もうノックなんて気にならないくらい、小鳩の無茶振りに慣れていた恵太は

小鳩に向き直すことなく、バッグから携帯を取り出した。

いつの間にか小鳩には敬語も気も遣わず、気楽に会話をするようになっていた。

「えー、何その約束。うちより大事な用なん？」

「悪い。すごい大事」

不満そうな小鳩の声に、携帯を動かす手を一旦止め
軽く手を顔の前にかざして「ごめん」のポーズをとった。

正確には約束はない。

ただ、亜子と電話とメールだけの日々が
もう1ヶ月近く続いていた。

時間の拘束が厳しい中、今日ほどのチャンスが今度いつあるか分からない。

『会いたい。触れたい』

恵太は亜子のこと頭がいつぱいだった。

もう目の前に迫った今度の貴重な休みの計画も、一緒に立てたくて
うずうずする。

亜子に連絡を取って会いに行こうと思っていた。

すぐに自分の荷物に視線を戻して

急いで帰り支度を進める、いつもと違う様子の恵太を見て

「あーもしかして、ケータ彼女のトコとか?！」

茶化すように小鳩が声をかけた。

『彼女』の響がくすぐったいような。嬉しいような。
そんな感情に少しだけ頬が緩む。

「まー、そんなとこ。じゃ、お疲れ様。小鳩」

荷物を背中に斜めにかけると。

入り口に立ったままだった小鳩とすれ違い際に
ポンポンと軽く頭を撫でて出口へと向かう。

「……うそやん……」

恵太の嬉しそうな表情と、彼女の存在を肯定した恵太の言葉に
小鳩がそのまま動けなくなっていたことを

恵太は知らないまま、亜子の元へと急いでいた。

41・カワイイカワイイ小鳩ちゃん（後書き）

小鳩と泰次、濃いキャラで構成されている撮影現場です（笑）。わたし自身は、小鳩のような天真爛漫な女の子、比較的好きです（笑）。

自主性がないので、こういう引っ張ってくれる女の子にくっついて遊んでました。

注>小鳩の関西弁について。

わたし自身が昔住んでいたとある関西地区で自分が使っていたものを使用しています。ただ、わたし自身が親の転勤で関西圏をぐるぐる回る子ども時代でしたので

いわゆる『正確な？！標準的な？！』関西弁ではないかもしれませ

ん。

（何せ、ミックスなので）

誤解や不快を与えるかなあと、標準語にしようか最後まで悩みましたが

小鳩が頭に浮かんだときから関西弁を話していたこと、小鳩の性格が一番生きるのは、やっぱり関西弁が一番と思いついて使っています。

ですので、「うちとことは、違うわあ」とか、「こんなん使わん！」など、地域によって様々でしょうが、どうか大きな心でお読みいただけたら嬉しいです。

それでは、お読みいただきましてありがとうございます。

42・イロトリドリの花

「どっしたの?! そのお花!」

恵太の訪問に玄関を開けた亜子は、恵太が両手いっぱい抱えている新聞紙に無造作に包まれた花と紙類がたくさん入った紙袋を見て、驚きの声を上げた。

「お土産。撮影で余った分貰った」

色とりどりの花たちが、そこはかとなく甘い香りを漂わせていた。そんな花の隙間から、おどけて笑う恵太の笑顔を久々に間近で見ると、温かな気持ちで胸が満たされていく。

自然に交わされる笑顔と、部屋へ上がることさえ待ちきれないキス。届きそうに届かない、もどかしい距離を持って余した1ヶ月を埋めるように

亜子は少し背伸びをして、恵太は少し身をかがめて。想いを伝えるかのように何度も何度も触れて離れ、離れては触れる唇。

夢中になり過ぎて、甘い雰囲気になるかと思いきや時たま重なる瞳を探り合っているうちに存在そのものが嬉しくて。

どちらからともなく、笑みが零れ落ちる。

「とりあえず、コレ置こうか」

「ふふっ、そうだね。あ、わたし持つよ」

花や葉に邪魔されながら交わっていたキスを思い出したら、なんだか可笑しくて。

目を合わせれば、またどちらからともなく笑い出す。

恵太の荷物を受け取るうと手を差し出すが

靴を脱ぎながらの恵太から与えられたのは、額への優しいキス。

「もー！おでこはくすぐったいって言うてるのにっ！！」

頬を膨らませて、おでこを押さえる亜子を尻目に

恵太はいたずらっ子のようにニカッと笑って。

「知ってる。だから、やってみた」

そっぴいながら、亜子が準備した恵太専用スリッパに当たり前のように足を納める。

玄関でおでこを押さえている亜子をそのままに、亜子の部屋へと何の躊躇もなく進んでいく恵太。

あ・・・なんか嬉しいかも・・・。

その様子に、ドクンツと、小さく心臓が揺れる。

公に出来ない代わりに、二人が過ごす貴重な空間である亜子の部屋はいつの間にか恵太専用のもや、恵太の私物で賑やかになっていた。

仕事帰りのスーパーで。休日のたまたま立ち寄った雑貨屋さんで。

日用品を買い溜める激安のドラッグストアや、女友達と出かけたカフェで。

全ての時間に恵太は存在し、思わず手を伸ばしてしまう。
恵太の好きな細めのパスタの麺や、デザイン違いのペアのマグカップ。
歯ブラシや恵太がいつも持ち歩いているお気に入りのガム。
ちよつと珍しいフレーザーの紅茶や、亜子お気に入りのジャスミン
で香り付けされた工藝茶。

全てが恵太の記憶を元に。恵太を軸に動いていた。
まるで初めての恋愛のように、はしゃいでいる自分が恥ずかしいと
思う反面。

自分もしっかりとした芯のある女性になりたいと、
背筋が伸びている自分にも気が付く。

恵太に見合う人間になりたい。
もっともっとキレイになりたい。

いつまでも側で笑っていたいから。

小さなテーブルは、色とりどりの花であつという間に埋め尽くされ
た。

「すごーい！きれいなー！！」

初めて見るボリユームの花々。
自然に顔がほころぶ。

「だろ？コレ、捨てるって言っから」

「え？！そうなの？！こんなにキレイなのに？！
お花がかわいそう！！」

亜子は傷つけぬよう、遠慮がちに触れていた花から視線を上げ驚いて向かい側に座る恵太の顔を見ると、
恵太は穏やかに微笑んでいた。

「先生なら、そう言うかなって思って。これ、飾ろっ？」

「うんっ！ちよっと待ってて！！花瓶取ってくるね」

恵太から聞いた映画のあらすじはこうだった。

小さな街の花屋の息子である恵太演じる慎一郎が友人に押し売られたジャズのライブで小鳩演じる沙良と出会う。全くジャズに興味のない慎一郎だが、無類のジャズ好きで自身もピアノを弾くという沙良に気に入られたいがために、いきなりサクスを習い始める。
しかし、実は沙良は……。

実際に小さな花屋を作ったの撮影のため毎日大量の花が必要になるそうだった。

「でもさ、俺思っただけど」

花を手に取り、下葉を手際よく処理しながら
恵太がポツリと呟く。

「俺・・・撮影前に練習するなら絶対フラワーアレンジメントとか
花の扱い方だったと思う・・・。だって、サックスのシーン、
監督が言っただよようなプロ級の腕、全くいらないんだ。

『もつと下手に吹けよ！諫山恵太！』とか言われるし」

はあ、と溜息をつきながら、時々上半身を反らせて花のバランスを
見ながら

亜子の準備した花瓶に活けていく。

「なのにアレンジとか、花束とか俺に作らせて『お前、勉強不足だ
！華道はどうした！』』とか言うし」

亜子は、くすくす笑いながら恵太の処理した花びらや葉、茎をビニ
ール袋に入れ、

黙ってその話を聞いていた。

最近の恵太は、よく話す。

もともと主語と述語しかないような単語で話す恵太が
こうやっているんな話をしてくれるのが、嬉しかった。

自分にだけ見せる、その顔が。

だから黙って、ときどき相槌を打つだけ。

恵太が話すのを心地よい音楽のように
身を委ねて楽しんでいた。

ふと、床に置いたままの紙袋から

パンフレットらしきものを見つける。

「あれ？恵太君、これなに？」

そう聞きながらそつと紙袋を開けると

・・・

「わあ、すごいっばい・・・」

東西南北。

都心から日帰りでも行ける様なところから、1泊したいようなところまで

いろんな観光スポットの旅行パンフレットだった。

「あー・・・。うん」

恵太が少し顔を赤くして、ぴたつと手の動きが止まった。

亜子から目を逸らしながら、頬を掻いた。

「郊外なら・・・。学校のやつらに会うこともないし・・・。
手・・・繋げるかなって・・・。ごめん・・・なんか、俺・・・
ガキ、だよな・・・」

最後のほうは耳まで赤くしモゴモゴと言葉にならない小さな声になる恵太を見て。

なんて幸せなんだろうと思った。

純粹に自分に向かってきてくれて、惜しみなく感情をぶつけてくれる。

さつきまで軽快に活けていたその手は、今は茎をくるくると

手持ち無沙汰に回転させているだけの恵太。

その姿に亜子は完全にやられた。

シユンシユンと音を立てそうなくらい、熱を帯びていた。
今亜子の唇が触れた耳を押さえて、口をパクパクさせている恵太。

「恵太君も、酸欠の金魚だね」

先ほど、恵太が亜子の弱点にいたずらをしたように
亜子もいたずらをして。

同じ顔をしてニカツと笑う。

・・・
そのあとは形勢が逆転し、亜子が敏感な部分を攻
め立てられ

快感に身を委ねるといふことは、言うまでもなかった。

色とりどりの、花たちだけが知っている

貴重な時間を更に濃くする、二人だけの秘め事だった。

42・イロトリドリの花（後書き）

更新が久しぶりに開いてしまいました。もし楽しみにしてください。更新の方がいらっしゃったらごめんなさい。

殺伐とした心持ちだったため、なかなか幸せのある風景の恵太と亜子を書けなくて時間が掛かってしまいました。

付き合い初めでしかもなかなか思うように会えない二人。

寂しい気持ちを持ちながら、生活の全ての時間相手が染み込んで一人のときも存在している風景を書けたらなあと思って。

会えない時間もお互いを考えて、それぞれ動いていた恵太と亜子を感じていただけたら嬉しいです。

ご覧いただきましてありがとうございます！！

43・泰次と小鳩の密談 1

「ありえへん…。ちよつと泰次、ケータのあの顔見た?!」

「…ハイハイ…。ちなみにオレ、間借りなりに監督ね。呼び捨て禁止」

もう何度目か分からない会話を繰り返しているせいか、泰次はハアハアとわざとらしくため息をつき、残りのビールを飲み干した。

「ちゃんと聞きーやつ！おっさん!!」

泰次の話を全く聞いてない自分を棚に上げ、

気のない態度が癪に触ったらしく、小鳩は居酒屋のテーブルをばしーと叩きつけた。

グラスや小皿が騒がしく音を立てる。

間仕切りのある居酒屋ながら、さすがに騒々しさに周りは一瞬シーンとなった。

泰次は通路にいた店員と目が合うと、苦笑いをしながら「すみません」と頭を下げた。

「小鳩、もう少し静にしろ。ばれるぞ」

駆け出しの恵太とは違い、小鳩はもう随分と露出が多いし特徴のある声と話し方で、若い世代にはあっさり気付かれてしまう。

「もー。そーゆうん、ホンツマ面倒くさい！
バレても『おおきに〜』で、笑つとつたらええねん。
今はケータや、ケータ！！」

またもやテーブルを叩く小鳩を泰次はグラスを持ったまま肘をつき、
眺める。

最近の不調の原因を聞き出そうと思って、撮影終わりに小鳩のマネ
ージャーに許可を取り
飲みに誘ってみれば。

「休み明け、ケータ新しい携帯ストラップ付けててん。
あれ、ペアやで！？『休みいいことあったん？』って聞いたら、
めっちゃ嬉しそうに『まあ…うん』やて！
なあにが『まあ』やねん。まあって何？って話やん。

彼女とラブラブやってんで、絶対！ホンツマ腹立つわあ〜！
…て、泰次、聞いてんの！？」

何のことはない。恵太恵太のオンパレードだった。
当初は3日間ぐらいオフを取ろうと考えていたが、突然の小鳩の不
調が始まりNGの連続で撮影が押した。

結局1日しかオフにならなかった。
それでも彼女と楽しく過ごしたらしい恵太の様子に、小鳩は荒れ果
てていた。

「…聞いてるよ。ペアかどうかわかんねーじゃん。恵太がたま
たま買い換えたんじゃないの？」

そのくだらないと言いたいような小鳩の焼きもちにうんざりしつつ、

どうでもいいけど、と答えてみれば。

「いんや！あれ、ペアやで！！うちの地元にある縁結びの神社でペアでしか売ってない限定ストラップやもん。それに間違いない。ネットでも売ってないねんで？いまどき。」

そこの神社めっちゃご利益あんなん！！一緒にお参りしたらその力ツプルは永遠に結ばれるんやで！
くわー！二人で行きよったんや！。むかつくわあ」

そう言つてぐいっとグラスの中の梅酒ロックを飲み干し、
ダンツと勢いよい音を立ててグラスを置き、テーブルを揺らす。

「・・・なんでお前がそんなもの詳しいの？」

「はあ？地元やで、地元！！うちかて持ってたもん。
前の彼氏とお参りして買いに行つたつちゅーねん。

てゆーか、地元では高校生カップル必需品？みたいな」

「小鳩、今つけてないじゃん」

「当たり前やん。んなもん、別れた時点で捨てたわ！未練たらしい
事してられひんわ」

「・・・じゃあご利益ねーだろ、そこ」

泰次の最後の呟きは聞こえていなかったらしく、
小鳩は「ちよつとトイレ」と言つて席を立った。

泰次は煙草に火をつけると、伸びをしながら椅子の背もたれへ体を

預けた。

小鳩とは、もう4年の付き合いになる。

高校生から女優として小さな役からこつこつとキャリアを積んでいた。

小鳩の目の強さと、良くも悪くも物怖じしない性格が面白くて映画に誘ったのがきっかけだった。

仕事に一生懸命で、仕事が一番で。

どんどん実力を付けていて、今若手では一番の注目株だった。

そんな小鳩が、たかが恋愛で・・・ 泰次にとってはたかが

恋愛で

こんなに崩れるとは思っていなかったので正直戸惑っていた。

腕の時計に目をやると、もう2時間経っていることに気が付いた泰次は、

トイレから戻ってくる前に会計を済ませてしまおうと立ち上がり、店員を呼び止めて伝票を渡した。

「じゃあ、お愛想で」

「ちょっと待って！うち焼酎な！！」

戻ってきた小鳩は、泰次の前に立ち、

店員にびしっと1本指を立て、追加注文をした。

「いや、俺、今会計頼んでるの。分かる？」

サングラスをかけ泰次が小鳩の頭を掴んで揺すった。

そのまま店員に「お願いします」と声をかける。

「いやーやー。回さんといてえ、まだ飲ませてえなあ」

小鳩は酒でほんのり染まった顔で、潤んだ瞳を泰次へ向けながら頭を揺らす泰次の手に自分の手を重ねて止めさせようとしていた。

そんな顔されたら…。

泰次は小鳩には聞こえないくらい、小さな声でポツリと呟く。

「…つたく…。場所、変えるぞ」

泰次は小鳩から手を離し、先に会計へと向かう。

「あ、待って！」

慌てて荷物を取る小鳩の気配を背中に感じながら、泰次はひとり、呼吸を整える。

あの小鳩をここまでさせるとは…。

「恐るべし、諫山恵太」

同時に、頼むから無事撮影が終わりますようにと、柄にもなく神頼みをする泰次だった。

44・泰次と小鳩の密談 2

2軒目は先ほどとガラリと雰囲気の違いカジュアルだった。泰次の友人の店で、個室があるということ人で目を避けたり、聞かれたくない話などをするときによく利用していた。

「…で？お前はどっしりしたいわけ？」

座り心地のいいソファにどっしりと身を預け、煙草を燻らす。

「どっしって…」

いつになく歯切れの悪い小鳩は、泰次の角を挟んで左隣りに座り、ウイスキーの入ったグラスを両手で包んでモゴモゴしていた。

「お前、諫山恵太が好きなんだろう？」

小鳩は、驚いたように大きく目を見開き

「なんでわかったん！？泰次エスパー?!」

と、身を乗り出してくるから泰次は呆れて苦笑いするしかない。

「アホか、お前は。これだけ恵太恵太聞かされりゃー誰でも気付くだろう。…諫山恵太以外は。」

あいつ、鈍そうだからなあ」

そう茶化して、ぷーっと煙を天井へ向けながら吐き出す。

小鳩の方へ煙が流れぬよう、灰皿は右へ、吐き出す方向も考慮していた。

「鈍いとかじゃなくて。ケータ、彼女のことしか頭ないねん。うちなんて見えてへんわ」

そう言つてグラスを口に運ぶ。

ロツクをものともせず、水のようにガブガブと飲む小鳩と、恋心に揺れる小鳩のギャップがありすぎて。

戸惑いつつも泰次は荒療治を敢行することにした。

「じゃあ誘惑でも何でもして奪うしかないな」

「そんなんっ！あんだ鬼?!」

手を止め、泰次を軽く睨みつける小鳩。

しかし言葉ほど、その表情に力はなく、どことなく助けを求めているようにも見えた。

「んじゃ、諦めるんだな。諫山恵太は彼女とうまくいつてるんだし。誰かさんと違つて私情挟まず、ますますいい仕事するようになってるからさ。」

いい恋愛してんだから、諦めてオトモダチやるしかねーだろ」

「そんな簡単に諦められたら苦労しいひんわっ！

彼女いるって分かつてからケータの顔、まともに見られへんのよ?!
こんなん初めてやからうちも困つてんねやんか・・・」

最後は消え入りそうな小さな声になり、俯いてしまふ小鳩をチラリと横目で見て

「あと一押しかな」と思う。

泰次は煙草を灰皿に押し付けて、最後の煙を右下に吐き出し

「彼女いても諦められないんだったら当たって碎けるか、振り向かせて奪うか、

別れるの待つしかないんじゃないの？まあ、お前の性格じゃ『待つ』はないか。

別に彼女がいる人好きになったらいけない決まりはないしな。略奪愛なんてよくある話だろ」

泰次の言葉にハツとしたような顔をして、そしてゆっくり空いたグラスを揺ら始めた。残った氷が小さくカラカラと音を奏でる。

「そっちゃんなあ…。彼女がいても、好きになること…あるよなあ。別に、悪いことちゃうよなあ…」

「まあ、好きになることは悪くないんじゃない？相手の女に嫌がらせしたり

脅したりするのは感心できないけどな。正々堂々闘うのはアリだろ」

新しい煙草に火を付けて燻り立つ煙の先にいる小鳩を見つめる。

さあ、来るか？

「正々堂々……。そっちゃんな……。

……。そっよな、うん。アリやわ!!

ありがとう！泰次。うち自分の気持ちに正直になるわ！

恵太、振り向かしてみせるっ!!

ケータ好きな気持ちは彼女と対等やもんな!! もー遠慮しいひんでー!!」

グラスを打ち付けるようにテーブルへ置いたかと思ったらいきなり立ち上がり、片足をソファの上へ乗せると拳を高く突き上げた。

まるで漫画の1シーンのようなポーズで小鳩が復活した。

泰次はニヤリ、と笑いながら小鳩に付け加える。

「ただし!撮影中は恋愛禁止。手ー出すなよ。」

お前はともかく、修羅場経験なさそうな諫山恵太が使い物にならなくなったら困るからな。

映画の中で擬似恋愛しながら撮影終わるの待てよ?」

「分かってる!そこいらはうまくやるから安心しいーなあー。」

あーなんかやる気出てきた!泰次、ジン・ロックおかわり!」

「はあ?!お前、まだ飲むの?!もう帰ろっぜ。マネージャーさん心配するから」

「何ゆーてんの!うち、やっとお酒がおいしくなって来たところやで。」

今からが本番やん!」

クルリと泰次を向き直り、吹っ切れた笑顔の小鳩を見て、泰次はコレで明日から撮影は順調に進むな、と安堵した。

正直、泰次にとっては恵太の恋愛も、小鳩の恋愛もどうでも良かった。

仕事にプラスならば大いに結構。好きにやってくれという感じで、関心がなかった。

ただ、今は思ったとおりのいい作品を作り上げたかった。

そのためなら、小鳩を盛り立てるのも応援してみせるのもなんてことはなかった。

しかし、そのことが徐々に歯車を狂わせる原因となるのはこの時の泰次自身も気付くはずもなかった。

44・泰次と小鳩の密談 2（後書き）

泰次が小鳩に火をつけてしまいました（笑）。初めは泰次は黙って見守る設定だったんですが、小鳩と絡むことで泰次も変化しそうな気がして・・・。

わたし自身、楽しみな人物です。

さて、なんだか雲行きが怪しくなってきた恵太と亜子です。お参りのご利益、果たして二人にはあるのでしょうか（笑）。

いつもお読みいただきましてありがとうございます。

45・夕立前 30分

夏休みもあと1週間となったある日、恵太は撮影の空き時間に、久しぶりに学校へと来ていた。

雲ひとつない昼下がりののどかな学校。

いつもは賑やかな学校も、主がいなければ静かなもので。

恵太は、独り占めしているような不思議な感覚でいた。

そんな学校に撮影真っ只中の恵太がいる理由はひとつ。

進路指導。

進路担当主任から、呼び出しを食らったのだった。

急に忙しくなったせいで伸び伸びになっちゃってしまい

恵太だけ進路指導を受けていなかった。

国理という難関校を目指すコースにしながら、進路が決まっていな
い恵太。

元々2年生までに高校の授業を終わらせるので、

勉強の心配はなかったが志望校すら決まっていけないのはありえない。

進路担当に、新学期までに志望校を決めるようにきつくお説教され、
逃げるように指導室を出た。

はあっとため息を付き、背伸びをする。

まだ残暑が厳しい8月末の学校は、エアコンの効いた部屋から出る
と、

むんつとした空気が立ち込め、それだけで汗が吹き出る。

恵太は制服のシャツの胸元を掴み、ぱたぱたと空気を送り込みながら歩く。

格段に涼しくなるわけではなかったが、しないよりマシな気がした。

その時ちょうど廊下の角から誰かが曲がってきた。

「あ！恵太く……」

そこまで言っただけで慌てて口を押さえ周りをキョロキョロと見回す。

「危なかった……『諫山君』だった」

その人物……亜子は苦笑いをしながら恵太に駆け寄った。

「なんか、制服の恵……諫山君久しぶりに見た」

ニコニコと、屈託なく笑う。

大きな封筒の束を胸の前で抱えながら恵太を見上げるその姿は、何よりの癒しだったしこの愛らしい女性が、

自分の彼女だという事実の幸せを噛み締めていた。

「？諫山君？どうしたの？」

黙ったままだった恵太を不思議に思ったのか、亜子が少し首を傾けて覗き込む。

「いや…それ、この前買ったヤツ？」

亜子の着ている薄いブルーのワンピースを指差す。

「あ、分かった？！えへへ。嬉しくて着て来ちゃった！どーお？似合う？」

亜子はおどけてくるっと一周回ってみせた。

控えめなフレアーが亜子の動きに合わせて、空気をはらんでふわり、と揺れる。

胸元の繊細な縁飾りが上品で、亜子の雰囲気ととても合っていた。淡いパステルカラーのブルーが色白の肌によくなじみ、楚々として涼しげで。

「うん。すごく似合ってる」

そんな眩しいほどの亜子の姿を見て、思わず恵太も頬が緩む。

そんな恵太につられるように亜子も

「ふふつ。見立ててくれた彼のセンスがいいんだよ」

そんなことを言いながら照れ隠しのように笑う。

一方の恵太も、自分を『彼』と呼んでくれる亜子の不意打ちに、思わず吹き出してしまった。

端から見れば、明らかにバカツプルな会話だったが、今はそれが楽しくて仕方なかった。

ふっと、会話が途切れ、少しだけ静かな時間が訪れた。

引き合う磁石のように見つめ合う恵太と亜子。

恵太が亜子の髪に触れようと、そっと手を伸ばした時
。。

・
・

「あれ…？恵太？」

恵太は背後から突然かけられた声に弾かれたように手を引き、不自然なまでに亜子から離れ、振り返った。

「え……かおる郁……？」

「やっぱり恵太かあ！お前、また背が伸びたなあ！どこまで成長するんだよ！。羨ましいなー！！！」

いるはずのない人物のいきなりの登場に頭も体も全くついて行かない。

固まったまま動けない恵太に、

郁は、ニコニコと笑いながら近づいてくる。

しかし、恵太の隣にいる人影に気がつき

「こんにちわ」と挨拶をしかけたが、

その顔を確認すると見る見る間にその笑顔が消えていき、
今度は驚きで目を見開いたまま立ち止まった。

「……………ひょっとして……………亜子…？」

郁のその声に弾かれたように恵太が亜子を振り返ると、
亜子は真っ青になって唇を震わせていた。

その場の誰もが動けなくなった。

なんだ、これ。

恵太の中で嫌な音が渦を巻いて迫ってくる。

小さな声で、「か…おる…さん…」と亜子が呟いた声が聞こえた気がしたが、

同時に亜子の手から落ちた封筒が大きな音を立てて廊下に散らばったせいで、我に返った。

屈もうとした恵太の横をすっと郁が通り抜け、一足先に封筒に手をかけた。

「あゝあゝ、相変わらずだなあ。お前は」

その声にやっと自分の手から荷物が離れていることに気が付いた亜子は
弾かれたように屈んで、慌てて拾い始めた。

少し、手が震えているように見える。

「す、すみませんっ…」

「いや、構わないよ。そそっかしいのは昔からだし」

「そ、そんなこと・・・」

郁は「お、大学案内のパンフレットか。今からが本番だよなあ」とか「いやあ、なつかしいなあ。こんなところで会うなんてなあ」

とか言いながら、弾けんばかりの笑顔で亜子を見て懐かしそうにしながら

ひとつひとつ落ちたものを拾い上げていた。

一方の亜子も、さつきまで青かった顔は、今度は耳まで真っ赤に染まり、

郁と目が合うと逸らして・・・を繰り返しながら慌てた様子で拾ったものを抱え直していた。

少し狼狽しているように見えたが荷物を落とした恥ずかしさからだけではない感じがして、

恵太は妙な胸騒ぎがした。

「恵太？どうした？」

郁が突っ立ったまま動けないでいる恵太を心配そうに見ながら立ち上がった。

その声にはっとして我に返ると、

郁の横でヨロヨロと立ち上がった亜子は、なぜか俯いたままこちらを見ようとしなかった。

「……なんでもない」

「そうか？いやあ、亜子……雛沢がうちの学校で働いてたなんてなあー！」

「えっ?!うちの学校って……」

弾かれたように顔を上げた亜子が、大きく目を見開いて郁を見た。

「ん?ここ、俺の親が理事長なんだけど……。ひょっとして知らなかった?」

驚きのあまり声にならない様子の亜子は口を開けたまま、首を大きく上下に振って頷いた。

「じゃあ……」

そついいながら、郁は恵太の肩に手を置いて亜子のほうを向いた。

「こいつ……。恵太、俺の可愛い弟なんだけど……。それも知らないとか?」

あ、お前今『似てない』とか思っただろ……。……」

楽しそうに話し続ける郁の声は、もはや二人の耳には届かなくなっていた。

恵太はさすがのように亜子を見つめる。

黙って恵太を見つめ返すその瞳が……。

いつも恵太を優しく見守ってくれる、その大きくて澄んだ瞳が今、初めて見る色に染まり、悲しげに潤んで……そして逸らされた時、確信した。

それは、知るも地獄、知らぬも地獄……。

郁と亜子の間には自分の知らない、なにか大きな過去がある。

夏の空は気まぐれで、黒い雲が立ち込めていた。

夕立は、もう近い。

どこか遠くで雷鳴が轟いた気がした……。

45・夕立前 30分（後書き）

ついに郁が登場しました。

一度不安になりだしたり疑い始めたら、自分自身に縛られて苦しくなつた気がします。

『知るも地獄。知らぬも地獄』かたや『知らぬが仏』 いろんなことを思いました。

でも結局、どの方法を選ぶにしても向き合つしかないんですよね。。。

恵太が、そして亜子がこれからどう向き合っていくのか。小鳩と郁と泰次、どう動き出すのか。

これからも見守っていただけたら嬉しいです。

それではお読みいただきましてありがとうございますとございました。

46・郁+亜子〃過去 惠太+・・・？

それからのことはよく覚えていない。

夕立に降られ、自転車で移動していた惠太が撮影場所へ着いた時にはずぶ濡れになっていた。

「ケータ！どしたん！？びしょびしょやんか！！
ちよっと誰かタオル持って来て！！」

小鳩が慌てて駆け寄り、スタッフから受け取ったタオルで惠太を拭く。

「あ……。大丈夫。自分で拭けるから。ありがとう」

微笑んでタオルを小鳩から受け取るうとしたが、その力無い惠太の微笑みに小鳩は一瞬息を飲む。見たことのないその表情から、とっさになにかあったことを悟った。

小鳩は気付かないふりをしながら、

「なあにゆうてんの！はい、そこ！その椅子座り。
姉ちゃんが拭いたるから！」

そう言って、わざと明るい声で恵太の胸をぐいぐい押しすと、すぐ後ろにあつた椅子へと座らせた。

「はいはい……」

恵太は少し笑いながらも振りほどく力もなく、されるがままになつていた。

「急に降つたんやなあ。まー見事に濡れて。ケータひよつとして雨男？」

恵太の頭をガシガシと乱暴に拭きながらのその声に周りにいたスタッフからも笑いが起こる。

しかし……。

真下へ垂れ下がった前髪から覗く、恵太のその瞳は全く笑つておらず、小鳩の言葉自体が届いていないようだった。

それに気が付いてしまった小鳩は、それ以上声をかけることも出来ずいつまでもいつまでも、ただただ力いっぱい恵太の頭を拭き続けた。

1時間前

・・・。

イギリスに留学しているはずの郁が目の前に現れた。

郁は現在30歳。今年18歳になる恵太とはちょうど一回り離れているが

正真正銘の兄弟だ。

身長は180cmを悠に越える恵太には及ばず、そう大きいほどではなかったが

小さな亜子と並ぶ姿は、ちょうどいいバランスでむしろ自分よりもしっかりきているように感じた。

恵太が父親似の意志の強そうな凛とした切れ長の二重が特徴ならば郁は母親似の華やかさのある深い二重が人目を惹いた。

小さいころから頭脳明晰、運動神経抜群。

楽器もヴァイオリン、ピアノなどいわゆる良家の嗜みと呼ばれる類のものは

あつという間に吸収して樹を喜ばせた。

無口な恵太とは対照的に、人見知りをせず、

誰とでもすぐに仲良くなってしまう、ユーモアのある社交的な性格。自分の才能や環境をひけらかす事もなかったため、

郁の周りには男女問わずいつもたくさんの友人がいた。

そんな郁だから、当然モテていた。

幼い恵太の知る限りでも、たくさんの女性が郁を訪ねて来ていたしそして誰に対しても優しくかった。

何をやらせてもそつなくこなす郁。

この世に郁に出来ないことなんて何も無いんじゃないかと思つくり、
完璧な郁。

その郁が……。

その郁が、現れた。

しかも、亜子を知っている。
いや、ただ『知っている』だけではなく
明らかに過去を『共有』している……。

後からワザとらしく「雛沢」と呼んでいたが、確かに亜子を見た瞬間「亜子」と呼んだ。

あんなに驚いて……そして嬉しそうで……大事なものを見るような目の郁を

恵太は見たことがなかった。

「誰にでも優しい」郁の姿ではなく、「ただ一つの宝物」を前に
純粹にはしゃぐ子どものような郁の姿。

そして。

何より、恵太の胸を締め付けた亜子の、あの表情。

罪の意識をいっばいに背負った、嘘を見破られたときの子どものような表情。

かすかに動く唇から言葉を読み取ることさえ、出来なかった。顔を赤く染め、恵太にも見せたことのないような恥らった様子で郁を見つめていた。

二人の間に流れる、秘密めいた空気を郁は・・・亜子は・・・隠せた気でのいるのだろうか。

「あの時の・・・」

「え？」

不意に恵太の口から言葉が漏れた。

黙ってガシガシと恵太の頭をこすっていた小鳩はその手を止め、恵太の言葉を必死に探した。

「俺が『好きだった人と同じ苗字』だって・・・。そりゃそうだよな。俺、弟だもん」

話がつかめずに困惑する小鳩は、かける言葉も見つからずただただ立ち尽くしてしまった。

その時、恵太がスツと顔をあげ

「ごめん、今の独り言。忘れて」

そう言つて、いつものように笑つて見せた。

乱れた無造作な髪の毛の隙間から覗く、苦しさを押さえた優しい瞳。その表情が息をするのを忘れるくらい色気を含んでおり、思わずドキッとした小鳩は目を逸らした。

277

「な、何ゆうてるのか、聞こえへんかった！

それより現場ケータイ待ちやで！早くメイク室行き！！」

迂闊にも赤くなつてしまった顔を見られないように

今度は恵太の腕を掴んで無理矢理立たせると、メイク室へと背中をガンガン押した。

スタッフに何度もすみません、と大きく頭を下げながら出て行く恵太の

後姿を見ながら小鳩は、大きく深呼吸をした。

「あかん。本気になってしまいそうやわ・・・」

小さく自分にだけ聞こえるように呟くと、顔を大きく左右に振り、そして自分の両頬をバシバシーッと勢いよく何度も叩いた。

そのあまりの音に、忙しく動いていたスタッフの面々が一瞬にして凍りつき、小鳩に視線が集中する。

「な、何してるんだ、小鳩」

小鳩専属の男性マネージャーが慌てて走り寄る。

「気合じゃー！ー！！だああああー！ー！！」

しかし、小鳩の肩に手を置こうとしたのと同時に勢いよく突き上げた小鳩の拳がそのマネージャーの顎へクリーンヒットし、その場にひっくり返ってしまった。

「だ、大丈夫ですか?!」

「よおおおー！ーし！ー！！小鳩、お仕事しまーす！ー！！」

そばにいたスタッフたちが騒然とする中、
一発K・Oを喰らわせたマネージャーなど見向きもせず、
小鳩はもう一度拳を高らかに振り上げると、ズンズンという音が聞
こえてきそうな足取りで
準備のためフィッティングルームへと向かった。

事の顛末を見ていた泰次だけが
ひとり監督専用の椅子で、「これは面白いことになりそうだ」と
お腹を抱えて笑転がっていた。

一方シャワーを浴び、メイクとセットを施されている恵太の元には
一通のメールが届いていた。

f r m : 亜子
s b j : 今晚

.....
さつきはごめんなさい。
今晚、何時でもいいので
お仕事終わったら会えない？

きちんと話がしたいの。

連絡、待ってるね。

- - - - -

先生は、何を謝っているのだろう。
謝るようなことをしたのだから・・・。

意地悪な思考が頭を駆け巡って集中力を削いでいく。

散々迷った挙句、そのメールに返事をするのではないまま
恵太は撮影へと臨んだ。

今は・・・。

今は、何も考えたくない。

会うことも、話すことも
そしてメールを返す勇氣全て、今の恵太にはなかった。

ただ、目を逸らすだけ。
ただ、仕事に逃げるだけ。

そう願う恵太は無心になって演技を続けた。

46・郁+亜子〓過去 惠太+・・・？（後書き）

気がつけば、すごく時間を置いての更新になってしまいました。もし・・・もしお待ちいただけている方がいらっしやいましたらごめん下さい。

好き過ぎて向かい合うのがものすごく怖かったこと。
思い出まで受け止める器を持ってないこと。

多分、恋愛中だろうが結婚中だろうが
一度は問われる姿勢かな、なんて思います。

まだ高校生で猜疑心だらけの恋しか経験したことのない惠太には多分、

史上最大の非常事態。

いつも背伸びして、亜子に好かれない、釣り合いたいと必死な惠太には

尚更郁は脅威で、足がすくむはずです。

惠太が等身大のまま、真の安らぎを得るのは・・・？

今後とも見守っていただけたら嬉しいです。

今日（12/6）、もう一話更新できれば・・・と思っています。

遅くとも12/7の次話更新を予定していますので
またお読みいただけましたら幸いです。

47・冷蔵庫の中の幸せ

その日の撮影が終わったのは午後11時を回ってからだった。

時間を置いて冷静になった頭で考えると、恵太は自分の子どもじみた態度が

気まぜく思えてきた。

亜子からのメールに返事をしていない事が気にかかる。

妙な緊張感を落ち着かせようと、深呼吸をして亜子へ電話をかけてみたところ

ワンコールも鳴り終わらないうちに繋がった。

「たまたま、携帯を手にしていただけよ」と亜子は言ったがきつとずつと、自分からの連絡を待っていたんだろう。

携帯から聞こえる亜子の声。その背後では何も音がしない。

あの部屋のあの小さなテーブルの前で一人、テレビもつけずに携帯を握り締め

律儀に正座してずっと恵太からの連絡を待っていたのだろう。

そんな亜子を想像すると、胸が締め付けられる思いがした。

拗ねて返事をしなかった自分に、恵太は激しく後悔した。

「今から行くから」

そう言い終わるや否や恵太は亜子の元へと向かっていた。

先生は・・・悪くない。

さっきまでの不安な気持ちや、疑う気持ち、逃げ出したい気持ち・・・
それらが消えることはないが、それでも。

・・・だからこそ、ちゃんと亜子の話を聞こう。
亜子を知ろう。

腹に抱え込んでもしこりが残る。
今のぐちゃぐちゃな気持ち全部、亜子に伝えよう。

たまたま、過去で郁と繋がっていただけ。
恵太は自分に言い聞かせる。

過去でどんなことがあっても、俺は今の先生を好きになっただか
ら・・・。

先生も、同じ気持ちでいてくれるのなら・・・。

『今の二人のために何が出来るか。』

恵太は愛車・・・といっても一度撮影で使い、気に入って人生初の衝動買いをした自転車、

クロスバイク：LAND ROVER AL-CRB7001 -

-
のペダルを思いっきりこぎながら気持ちを整理していた。

途中のコンビニで亜子の好きなチョコレート菓子と

甘いコーヒー、それから自分用のお茶を買って亜子の部屋へと向かった。

玄関が開くと同時に、恵太は亜子を抱きしめた。

「け、恵太君・・・？」

恵太の腕にすっぽりと収まった亜子は、

その胸に顔を埋める恰好のまま戸惑いながら小さな声で名前を呼んだ。

「ごめん・・・。先生は・・・悪くない。ただのヤキモチ」

恵太は搾り出すような、苦しそうな声でそう呟くと亜子を抱きしめる腕に力を込めた。

「ううん……。私こそごめんね……。
本当に……。諫山先生がお兄さんだなんて知らなかったの……」

遠慮がちに背中に回された細い腕。
シャツを握り締める亜子の手も声も、微かに震えている。

亜子の口から出る、『諫山先生』という、兄の肩書きに
チクリと胸が痛む。

「俺……。ちゃんと聞くから。
だから、全部話して……。郁かおるとのこと」

「……」

何も答えない亜子の頭を恵太は小さい子を宥めるように
優しく撫で、穏やかな声で語りかけた。

「……大丈夫だから……。
じゃないと俺、ずっと郁にヤキモチ焼き続けることになる。
……先生の過去に嫉妬しながら付き合いたくないんだ……。
それだけは……。嫌だ」

亜子は恵太のその言葉に腕の中で黙ったまま小さく頷いた。その反応に、亜子の細い肩をそつと握って体を離す。重なる瞳。

亜子の瞳は潤んでいて、今にも大粒の涙が零れ落ちそうになっていた。

「ぶっ。変な顔」

眉間に精一杯しわを寄せ下唇を噛みながら涙を堪えていた亜子はいつもと変わらない、亜子を惹き付けてやまない恵太の屈託のない笑顔……

亜子を笑わせようと無理して作ってくれている優しい気遣いに触れた途端、堰を切ったように嗚咽を漏らして泣き出した。

「じっ……ごめんね……ほ……ほんと、じっ……」

「あーあーあ。先生、泣き虫なのな」

からかいながら、亜子の頬を伝う涙を手のひらでぐいと拭う。恵太は速まる胸の鼓動を悟られないように亜子へ笑顔を向ける。

こんなに……。

先生がこんなに泣くほどのこと過去を
俺はちゃんと、受け止められるのか。

恵太は自分の下手な演技に亜子が気付き、それ故の涙とは思っても
ず。

亜子が自分に言い出せないような郁との過去を憂いてのものかと思
い、亜子から見えない背中が、じつとりと汗ばんでいくのを感じる。

郁とのことは過去じゃないのか・・・？。

もちろんその予想は恵太の中の一瞬ネガティブな部分の底辺で。

最悪のこと覚悟してここへ来たはずだったが

やはり芯のない気持ちはいとも簡単に揺らぐ。

恵太は務めて穏やかに、そして亜子を気遣いながら部屋へと進み

恵太も気に入っている座り心地の良いローソファアへと亜子を座ら
せた。

涙の止まらない亜子に一言一言声をかけ、箱ごとティッシュを渡し
た後、

無意識のまま、まるで我が家のように慣れた手つきで食器棚から二
つ、

おそろいのグラスを取り出し

氷を取り出そうと冷凍庫を開けると・・・。

そこには、恵太のお気に入りのストロベリーのアイスが入っていた。色んなメーカーのものがいくつもいくつも。

初めて二人で出かけたあの休日、露店のアイスクリームショップで即決でストロベリーを頼んだ恵太。イメージと違う！恵太君可愛い！！などと散々亜子にからかわれたことが蘇る。

冷蔵庫を有効に使おうと置かれた仕切りの内側には仕事で外食が増えた恵太のために亜子手作りのパスタソースが密封のジッパー式の袋で小分けされキッチンと立てられていた。

無造作に、いくつか手にとって見ると表面にはそれぞれの味と作った日にちが書かれていて。

その下には小さなマーク　　・　　・　　など・・・　　亜子にしか分からない印があった。

恵太はさつきとは違う、胸の高鳴りを覚えた。

それは、幸せをかみしめる前の一歩手前というのか
幼い頃、サンタクロースを信じて眠ったあの前の晩のような何の根拠もない高揚感と期待感。

そつと冷凍庫を閉じ、今度は冷蔵庫を覗く。

・・・夏の終わりにもサンタはいるようで
そこにはおいしいと噂の限定販売の老舗ケーキ屋のプリン、
カリカリに炒めた縮緬雑魚の乗った、水菜つきの大根サラダ、

栄養ドリンクに白菜の漬物……。
それらが上段を埋め尽くしていた。

小さな一人用の冷蔵庫いっぱいには恵太が溢れていた。

亜子の恵太への『思い』が、こぼれ落ちそうになっていた。

それを見た途端、恵太の胸は……。いや、頭のとっぺんからつま先まで

亜子からの愛で満たされ、そして今悩んでいたこと……。全てどうでもよくなった。

何があっても、今は亜子と郁を受け入れる自信がそこはかとなく湧いて出てきた。

あれほどまでに押しつぶされそうだった猜疑心や不安。

それらがいつの間にか、霧がかかったように輪郭がぼやけて存在感が影を潜め始めていた。

今……。

今現在。

ちゃんと、俺は、先生の中にいる。

ここに存在する。

ちゃんと・・・。

亜子の中に、生きている。

今まで欲しくて欲しくてたまらなかった
『自分だけ』の場所。
『自分だけ』を愛してくれる存在。

小さな小さな冷蔵庫は。

恵太に想いの『芯』を与えてくれた。

いつからか郁と比べられる恐怖に怯え

『逃げる』というカタチで人知れず必死に闘って来た

臆病な恵太に静かに、しかし何より強い光をもって居場所を教え
てくれていた……。

47・冷蔵庫の中の幸せ（後書き）

ほんつつとうに申し訳ありませんでした（土下座）。
初めて更新予告したのにまんまと守れず……。これじゃあ「狼がきたぞーう」の、あの狼少年と同じです。
もし覗いてくださっている方がいらつしやいましたら
本当に申し訳ないです……。ごめんなさい。

さて、本題ですが（といいながら話題を変える・汗）
どんな過去でも受け入れる器、果たして恋愛経験の少ない恵太が
どう動くか心配しましたが……。
それでも経験も年齢も唯一関係ないのが恋愛だと思います。

みんな同じように切ないし苦しいし幸せだし。
それこそ幼稚園児でもお年を召しても変わらない気持ち。

そう思ったらすると動き出したのでそのまま書いてみました。
こういう感じ方もありだな、と思っていただけたら嬉しい限りです。

次回は亜子と郁の過去が中心となります。
お時間あるときにお相手くださいませ。

それではありがとうございました（深謝）。

48・過去と現在 1

恵太は亜子と向かい合って座った。

亜子の愛情を肌で感じたが、何を聞かされるかという恐怖心まで消えたわけではなく

亜子の顔を見ながらちゃんと聞きたい。
ちゃんと感じたい。

そう思いながらその場所を選んだ。

そんな恵太の思いなど知る由もない亜子は

その測られた僅かな距離に胸を締め付けられる思いでいた。
真正面に座る恵太に尋問されているような……。

何か大きな罪を犯したわけではないが

この意地悪な偶然に、もうこのまま許してはもらえないんじゃない
んだらうかという

不安が過ぎり、一層緊張する。

「諫山先生とは……」

口を開きだした亜子だったが、その先が続かない。

恵太は代わりに言葉を紡いだ。

「郁と……付き合ってた？」

その言葉に、亜子は小さく頷いた。

「いつから？」

「・・・高校2年の夏から・・・。塾の先生だったの」

そうであろうと予感はしていたが、やはり亜子の口から聞くとどうしようもないショックが襲う。

郁が教員免許を取得したものの採用試験は受けずに

そのまま大手進学塾の講師をしていたことは知っていた。

まさかそこで亜子と出会っていたとは・・・。

自分の知らない、今の自分と同じ年頃の亜子を

郁が知っていた　　触れていた・・・。

そう思うとじわり、と嫌な感情が恵太を襲う。

逆算してみるとその頃の恵太はまだランドセルを背負っていた。

埋められない『5歳差』というどうしようもない距離に

自分の幼さを見せつけられている気がした。

「そっか・・・。いつまで付き合ってたの？」

そんな感情を悟られまいと務めて平然とした態度で亜子に問うてもその答えにまたもや恵太の心はかき乱される。

「……わからない……」

「え？」

亜子は俯いていた顔を少し上げ、恵太を見つめる。

「自然消滅……てやつかな。」

私……逃げちゃったの。先生から」

全く話の読めない恵太は返す言葉を見つめることが出来ずただただ亜子の潤んだ瞳を見つめるしか出来なかった。

「3年生の冬……。先生が婚約したって噂が流れたの」

テーブルの上で指を絡ませ両手を組んでいる亜子。

その小さな肩が微かに震える。

「そんな話……なかったよ。」

結婚考えている相手がいるなんて父さんも樹も言ってなかった。父さんたちが縁談持ち込むこともないだろうし……」

しかし、そんな話があったとしても当時小学生の恵太が知る由はないだろう。

恵太は「俺の知る限りではね」と付け加えた。

その恵太の答えに亜子は微笑んで見せた。

だが、亜子の微笑みは自虐的で悲しそうで……。

今まで恵太が見たことのない、一番寂しい微笑だった。

「うん。先生もそう言った。ただの噂だからって。

でも……友達3人とね、塾の冬季講座の帰り道息抜きに

映画見に行ったの。

その帰り道、カオルさんが女の人と一緒にいるところ見ちゃって。

もうすごい美人で。友達が興奮してたの覚えてるなあ。

周りの人みんな振り返るくらいお似合いで……。

友達もまさか私がカオルさんと付き合ってるなんて知らないから

後つけてみよう」

って騒いで……。

そしたらカオルさんとその人、すごく楽しそうに笑いあいながら

私の地元じゃ一番高級なホテルに入って行った」

恵太は何も言えずに俯いたまま話す亜子の小さな姿を見つめていた。

確かに郁はすごくモテていた。

年より若く見えるし、何より可愛いと評したくなるようなそのルックスは恵太にはないもので、誰しも目を奪われるほど綺麗に整っていた。

だからといって本人がそれを自覚して鼻にかけるとか遊ぶとかいうタイプではなく、それが更に人気に拍車をかけているようだった。

そんな郁だから同時に二人の女性と付き合うとか浮気をしたりすることは、あの性格からして無理だ。

肉親の欲目とかではなく、恵太にはそれは不可能な気がした。

黙ったままの恵太に亜子は続けた。

。「家に帰ってから何度もカオルさんに電話もメールもしたけど……。

その日から数日間繋がらなかった。カオルさんはもう私なんて、飽きたんだ、遊びだったんだなっと思っただの、話も聞かずに。

もう、なんかいっぱいいっぱいになっちゃって。

メールでさようならって送ったわ。

……一番嫌な終わらせ方だね。

最低だったと思うわ。

冬休み明けて入試が終われば、もう塾に行く必要もないしカオルさんの顔見ずに済んだのがせめてもの救いだっただ。

それまで地元の大学希望してたけど……。カオルさんのことで頭いっぱいだったから

当日、半分も解けなかった。

もちろん不合格よね、そんなもの。

その前に腕試しと思って受けた東京の私立に
たまたま受かってたから、親にすごく無理言っ
て入学させてもらっ
たの」

「郁は・・・その人のこと何も言わなかった？

郁・・・そんなに器用じゃない気がする・・・」

亜子はまた、あの微笑で小さく首を左右に振った。

「何度も携帯に電話もメールもしてくれたよ。

『ごめん。会ってきちゃんと話したい』って言われた。

でも・・・。私が逃げたの。約束破って行かなかった。

カオルさんの口から『別れよう』って言われるのが怖くて。

私ね・・・みんなに遅いって言われるけど、初めて好きになった人
がカオルさんだったの。

その言葉聞くくらいなら、逃げて逃げてこっちからさよならした方が
自分が傷つかなくて済むって思っちゃったんだよね・・・。

もう、呆れちゃうくらい子どもでしょ」

俯いたままの亜子からはその表情を窺うことが出来なかったが

その言葉に力はなく、後悔の念がにじんでいるように思えた。

亜子はいつの間にか諫山先生ではなく『カオルさん』と呼び

その単語を慈しんでいるように恵太の耳に響いた。

恵太は自分の知らない過去で亜子がどれだけ郁を想っていたのか。

郁がどんな瞳で亜子を見つめていたのか……。やり場のない嫉妬心に飲み込まれないように必死だった。

「聞く耳持たないわたしにカオルさんも呆れたんだと思う。

結局そのまま話もせず卒業した後は進学するために地元を出たから……。

カオルさんとはそれっきり。

自分から連絡することも、カオルさんから来ることもなかったわ。

……恵太君……偶然だったとしても……。本当にごめんね……

」

大きく頭を下げる亜子に恵太はゆっくりとかぶりを振った。

48・過去と現在 1（後書き）

ものすごい久しぶりすぎて更新を躊躇したくなりましたが……。亜子のように逃げ回っていてもお話は進まないの、恐る恐るアツプしてみました。もし、次話をお待ちいただいている方がいらつしやいましたら申し訳ありませんでした（深謝）。

人生いろいろあるもので……。人の子の親をやっているれば、その子の人生が絡んできてまた悩みも増えていくもの。未熟ながら右往左往してようやく先へと時が流れ始めました。

亜子と恵太も右往左往しながら自分たちの道へ辿りついてくれたらいいな。

なんて思いながら……。無責任……）。

それではこんな隙間までご覧いただきましたあなたの明日が素晴らしい日々でありますように……。

49・過去と現在 2

恵太の中で蠢く、一つの疑問。

そんなことはないと思ってはいても、これを聞かなければ先には進めない。

最悪の答えも覚悟している中で口にするには勇気がいり、いつの間にか口内がからからに乾いていた。

「ひとつだけ・・・いい？」

「うん・・・なに？」

「・・・先生は・・・。今日郁と再会して・・・どうしたい？
ちゃんと別れてなかったんなら・・・そんなに後悔してるんなら・・・」

まだ郁のこと・・・」

その問いに亜子は一瞬大きく目を見開いて、それから苦しそうに眉間にしわを寄せると

悲しげな色に染まった。

「私が今、一番好きな人は恵太君だよ。恵太君じゃなきゃ・・・ダメ。」

こんな話した後には信じて、なんて言えないけれど・・・」

そう言いながら俯いた亜子の組み合わせているその手にぼたぼたと涙が零れ落ちていた。

「恵太君は……。お兄さんと関係があった女なんて……。もう嫌……。？」

ゆっくりと顔を上げた亜子は零れ落ちていく涙を気にすることもなく、そのままに恵太を見つめた。

「……。ごめん、正直よく分からない……。嫌というか……。うん……。ごめん……。いや、先生が嫌とかじゃなくて……。あーもう!!!」

恵太は、今まで感じたことのない独占欲と嫉妬心に狂い始めていた。恵太の中の一番のコンプレックスである郁を愛していた亜子。

浮かんでは消える自分自身を切り裂く言葉の刃が勝手に暴れ回り、それから逃れたいと爆発寸前だった。当たり所のないドロドロとした感情を必死に抑えようと乱暴に自分の髪の毛をぐしゃぐしゃと引っ掻き回した。役作りのため伸ばしている髪が、自分の指に不快に絡まるが今は引きちぎってしまいたいような衝動の中、両手で思いつき掻き回す。

感情をうまく表現できない恵太の、唯一のそのイライラと葛藤するクセに気がついていた亜子は身を乗り出し、そつと恵太の両手を取る。

小さな亜子の掌じゃとても包みきれない少し骨ばった恵太の大きな手。

突然亜子に触れられ、恵太は驚いた。乱れた前髪の間隙から亜子の瞳を捉える。

その瞳は・・・そして小さいながらも一生懸命何かを伝えようとするその手の温もりは、何よりも恵太を安心させた。

「・・・ごめん・・・俺・・・ヤキモチ。郁が・・・先生に触れたのかって思うと・・・。ごめん、すごいちっさいな・・・」

亜子のその瞳に、恵太は震えながらぼつりぼつりと言葉を発した。

ちゃんと聞くといいながら過去にやきもちを焼いて自分を抑えられない自分は・・・大人でスマートな郁と違う自分は・・・
亜子に嫌われてしまうのだろうか。

その恐怖に怯えながら、救いを求めるように亜子の手を自分の指に絡め直し強く握り締める。

もし数秒でも……。

ほんの一瞬でもこの手を離してしまえば

亜子が郁にさらわれていくような、そんな強迫観念に襲われていた。

「私は……恵太君が好きよ。恵太君が許してくれるなら……。

これからも……恵太君の『カノジヨ』でいたい……。」

そんな恵太に気がついた亜子は絡めた手に力を籠める。

先ほどまで涙を流していた亜子の瞳に、今は水滴はなく
真摯に見つめる澄んだ瞳が恵太を捕らえていた。

「今日、恵太君が撮影に戻った後……カオルさんに『あの日のこと後悔してる』って……。

『ゆっくり話したいから時間作って』って言われたの。」

その言葉に恵太は弾かれたように亜子を見た。

当の亜子は、穏やかに微笑み恵太に向かって首を左右へ振った。

「大丈夫よ。今は、もう逃げなくてもカオルさんに向き合える自信があるんだ。

昔のこと……逃げたことちゃんと謝って来る。

それから……。恵太君が許してくれるのなら……。」

亜子はそう言って、大きく深呼吸をした。

「明日、カオルさんに『私には真剣にお付き合いしている人がいます』って言うてもいい？」

そういつて頬を朱色に染めながらはにかんだ様に笑って見せた。

どうしてこのヒトは、こんなにも自分を揺さぶるのだろう。

どうしてこのヒトは、欲しいと思っっているものを欲しいだけ与えてくれるのだろう。

苦しさと違う、痺れにも似た甘い衝動が上のほうへと集まってくる。

恵太を惹き付けて止まない、亜子のその柔らかい笑顔。

それに触れた途端、心の中で自分自身を狂わせる刃が、少しずつ動きを鈍くしていった。

代わりに湧き上がるのは、亜子を自分の手中に収め自分のものだと刻み付けたい衝動。

「……門限9時ね……」

恵太はそう言うつと亜子の手を離し、亜子のすぐ後ろのソファアへと腰を下ろす。

きよとん、としたまま恵太を見上げる亜子の腕を取った。

亜子を優しく立ち上がらせると、自分の膝の上へと横向きのまま誘いざない

きつく抱き締めた。

「け、恵太君?!」

突然のことと不意に近づいた恵太の顔に亜子は耳まで真っ赤になり声は上擦っていた。

「明日・・・9時までには帰って来て。・・・分かった?」

追い討ちをかけるように恵太はわざと亜子の耳元に低い声で囁いた。亜子はびくつと体を震わせ、下唇を噛みながら小さくコクコクと数回頷く。

その様子に恵太は言い表せない満足感と、もっともっと独占したい気持ちで

少しづつ理性が奪われていく感覚を味わった。

「『カノジヨ』が他の男と二人で会うのは・・・好きじゃない。あこは・・・俺のものでしょうか?」

そういうと、その愛らしい唇に優しく口付けた。

亜子の体の自由を奪い去り、啄ばんだり噛んだり強く吸い寄せたり・・・。

しばらくそうしているうちに、いつの間にか二人の間の空気は甘く熱いものへと代わっていた。

「今日……泊まってもいい？」

潤んだ瞳で恵太を見上げ、そして頷く亜子を見つめながら。頭に浮かんでは消える郁の影を消そうと必死だった恵太はいつの間にか消え去った嫉妬心の代わりに、何物にも変え難い温かな幸福感を夢中で味わっていた。

49・過去と現在 2（後書き）

過去の話、とりあえず最後まで聞きました、恵太。

こういうのって一日で「ハイ、完結！」とはいかないものですよ。少しずつ自分の中で昇華したり、理由付け（時にこじ付け）しながら気にならなくなっていくような気がするので今後、恵太はしばらく揺れそうですが見守っていただけたら嬉しいです。

・・・というか、恵太何気にS?! 亜子といると俺様?!

亜子と二人のとき、キャラが違う・・・（笑）。

ま、まあ、亜子といるときは甘えん坊でわがままなんだということ。こちらも見守っていただけたら嬉しいです。

それではこんなところまでお読みいただきました

あなた様の明日が素晴らしい日々でありますように!

夏休みだからといって、教師も生徒同様休んでいるわけではない。部活動の顧問をしていれば当然その練習に毎日顔を出すし、合宿などを行う大事な時期も夏だった。

そのほか科別の研修会や運営会議、2学期の行事の骨子決めなど会議も多い。

特に新米は仕事を覚える意味も込めて雑用が増える。

加えて模擬授業を先輩に見てもらおうなど緊張を伴う仕事も多く、休みはほとんどないようなものだった。

当然亜子もそんな忙しい新米の一人だった。

亜子が仕事から解放されたのは7時を回ってからだった。

腕時計をちらりと確認すると、急ぎ足で郁^{かおる}が指定してきたレストラ
ンへと向かう。

レストラン直前で信号待ちの間ショーウィンドーで自身を映した。

亜子は首元を一番に確認した。

見えるところはだめだと言ったのに

独占欲を誇示する華を亜子に散りばめるように咲かせた恵太。

ノースリーブのタートルネックをクロゼットの中から引つ張り出し
薄いパープルのそれに合わせて白いフレアースカートを身に纏った。
際どいながらも、それと解る華はなんとか隠せたが少し動けば姿を

現すため気が気ではない。

上から羽織った薄手のカーディガンの胸元を合わせ直しながら、

（もう、恵太君てば・・・。

だからダメって言ったのに・・・。）

そう心の中で文句を唱えながら昨日の夜を必然的に思い出す。

途端、顔が赤く沸騰するのを感じ慌てて頭を振る。

横断歩道に向き直り、熱を逃がそうと手の平で顔を仰いだ。

効果のほどはそれほどないようだったが、恥ずかしさをごまかすために

手を止めることが出来なかった。

周りから見たらかなりの拳動不審さと、百面相だったが

それを向かいのビルの2階、窓際から愛しそうに眺める人物

郁がいた・・・。

頬杖を付き、向かい側の横断歩道で落ち着きのない亜子。

郁はそれを窓越しに穏やかな笑顔で見つめていた。

離れてから4年。

それでもこうやって大勢の中から、遠目でもすぐに彼女を見付ける

ことが出来る。

自分では考えないようにしているつもりだったが、やはり郁の中で亜子の存在は大きかった。

亜子の様子を見てみると、無意識に頬が緩んでいた。

懐かしさと愛おしさで胸いっぱいになる。

一生懸命オシヤレをし、自分と会うことを何より楽しみにしてくれていた亜子。

4年前もそうだった。

郁が待ち合わせに遅れると、先にそこにいる亜子は身だしなみを気にして

ウインドー相手に髪を撫で付けたりくると回って確認したりとそわそわしていた。

そして自分を見つけると、嬉しそうに駆け寄ってくるのだ。

今もあの日と変わらぬ仕草。

その姿を見て懐かしく、変わっていない事に喜びを感じる郁。

自分のための仕草だと信じて疑わないのは仕方がないことだろう。

昔と違うのは、息を呑むほど、女性らしくなった点だろうか。

あの頃の可愛らしさそのままに数段綺麗になった亜子が、小走りに横断歩道を渡る。

そんな亜子から郁は目が離せなかった。

店に入ると先に席につく郁を見付け、
亜子の顔に満開のヒマワリのような笑顔がぱつと咲いた。

郁は軽く片手を上げ、亜子の笑顔に応えた。

4年という時は流れたが、変わらぬ愛くるしい笑顔を向けてくれる
亜子。

(これなら)

高鳴る鼓動を悟られないよう、余裕のある落ち着いた風に振舞う。
先に頼んでいた食前酒を口に運びながら、郁は思った。

(これなら、あの日をやり直せる。

止まったままの時計を、再び動かそう。)

席に駆け寄りながら「ごめんなさい。思ったより会議が長引いてし
まって」と謝る亜子を

郁は抑え切れない愛おしさを、熱いまなざしと笑顔に変えて迎えた。

しかし食事も終盤を迎える頃、郁の願望は脆くも崩れ去った。

意を決して口に出した郁の「俺たち……やり直さない？」と言っ
問いに

亜子は一瞬俯いたあとすぐに顔を上げ真っ直ぐに郁の瞳を見つめ、
言った。

「……ごめんなさい。私、今お付き合いしている人が
いるんです」

そう微笑む亜子のその頬が、薄っすらと染まって見えるのは
この店の柔らかい色調の間接照明灯のせいでないかと認めざるを得な
かった。

「そ、そっかぁ……。亜子、きれいになったもんなぁ！いて当然
か！」

激しく動揺する心を悟られないよう、務めて明るい声で
腕を前に伸ばして伸びをするように背もたれへと体を預けた。
全身の血が逆流して頭へと上っていくのがわかる。

「そっ、そんなことないですっ」と、耳まで真っ赤になりながら
顔の前で手をぶんぶん振る亜子。

純真無垢で、自分だけをあんなに愛してくれた亜子はもういない・
。。
そう思うと、名を付けがたい感情が駆け巡った。

彼氏がいることも、もちろん覚悟していた。

しかし、実際亜子の口からその事実を聞くと・。。
郁は自分でも驚愕するほど、ショックを受けていて
また隠せずにいる自分に苛ただしささえ覚えた。
座っているのに膝がガクガクと震え、気を抜くと崩れ落ちそうだった。

「。。。。じゃ、いくら勧めてもワインを口にしないのは。。彼の
言い付け?」

よろめく体を支えたくて今度は身を乗り出して肘を突き亜子の瞳の
中を探る。

口調はあくまでも茶化すような、明るく優しいトーンで。

「あ、いえ。。。。そうじゃないんですけど。。。。
私、お酒好きだけど弱くて。いつも迷惑かけちゃうから一人では飲
まないようにしてるんです」

亜子は、たははと恥ずかしそうに笑うと自分の頬を包む様にして

軽く叩いた。

それは亜子の癖で、久々に見る嬉しそうな姿から
亜子の話は作り話ではないということに証明していた。

ひよつとしたら自分を待っていてくれるかもしれないという淡
い期待。

彼氏がいても自分のところへ戻って来てくれるかも知れないという
自分勝手な妄想を持ち合わせて
今日ここへ来ていた郁。

しかし今の会話から亜子はその男に全幅の信頼を寄せていることは
確かだ。

郁のその期待と妄想を一瞬でかき消し、失望させた。

「驚いた・・・・・・・・。そっか・・・・。そうだよなあ、もう4年経
ったもんな・・・・・・・・」

郁がぼつり、と吐き出した『4年』と言う言葉に

亜子の肩がびくつと跳ね上がったのを郁は見逃さなかった。

このまま・・・・このまま過去を『過去』として片付けられては困る。

「あ、あの
」

恐らく自分に不利な言葉を発しようとする亜子の言葉を
郁は遮った。

「あの日・・・亜子にプロポーズする準備してたんだ、って言ったら・・・どつする？」

会うまでは「不甲斐なかった自分が悪いのだから
もし、亜子が幸せそうだったら潔く身を引こう・・・」

本気でそう思っていたのに・・・。

今はそんなことを考えていたのが嘘のように嫉妬心に狂い始めていた。

相手の男が憎くて仕方がない。

絶対に亜子を奪い返したい。

身勝手な郁の意志は一瞬の間に方向転換していた。

亜子は意標を衝かれ、文字通り開いた口がふさがらないというように言葉を失くして自分を見つめる。

亜子の、この瞳・・・。

この唇・・・。

俺だけのものだったのに・・・。

郁はそのまま目を逸らさず
じっと亜子を見つめた。

「い……いま……なんて？」

泣きそうな顔で、必死に絞り出す亜子。

そこにいるのが先程までの穏やかな郁はなく。
いつになく真剣な、怒りにも似た強い眼差しで直視されて亜子は戸
惑いを隠せないのだろう。

亜子の形の良い、ぷっくりとした唇が微かに震えていた。

「俺……今日は帰す気ないよ。
いや……………今日だけじゃない。」

俺、亜子のこと諦めるつもりないから」

怪しく、そして強い炎を宿す瞳に捕らえられ
身動きだけでなく思考回路まで奪われた亜子。

郁がその手を攫^ゆつように握り締めていることにすら気がつかずにい
た・・・。

50・郁 始動開始 1（後書き）

ついに郁が動き出しました。ここまで長かった（汗）。

ここだけ読むと、こんなにまで亜子に執着するならなぜ・・・という感じですが・・・。

実は郁には郁の事情がありまして・・・。

次話で、その郁側の4年前を書く予定ですので、そちらをお待ちいただけましたら嬉しいです。

で、出来るだけ早めに更新します（笑）。

それではこんな隙間までお読みくださった、心優しいあなた様の明日が素晴らしい日々でありますように！

51・郁 始動開始 2

「ここじゃなんだから場所変えよっか」

明らかに狼狽している亜子に郁もさすがに正気になった。

その途端、気まずさで喉の奥が詰まるような感覚に陥り、慌てて手を離す。

(しまった……)

怪しくなった空気を変えようと、郁はわざと明るい声で声をかけ席を立った。

しかし時はすでに遅し。

亜子は泣き出しそうなか細い声で、

「あの……私……帰ります……」

と言ったまま黙り込み、動いてはくれなかった。

先程まで咲き誇っていたヒマワリは、完全に俯いてしまった。

自分が太陽ではないことを思い知らされ、

郁の胸の中は苦味を増していった。

亜子を泣かせたいわけではない。

むしろその逆で。

あの笑顔をもう一度自分だけのものにしたいと願っただけで……。

郁はふーっと息を吐くと、無理矢理笑顔を作って見せた。

「あー……ごめんごめん。そんなに怖がらないで。

さっきのはナシ！ね？

ちゃんと帰すから安心して。

僕にあの日のこと、謝らせてほしいんだ。

今更……言い訳になるけどさ。

……だめかな」

これが本心かと聞かれたら半分は嘘かもしれない。

だが、嫉妬に任せて息巻いてしまったことは本当に後悔し始めていた。

最後にあつた日から忘れたくても忘れられない、亜子の悲しみに染まったあの表情……。

それが今、思いもかけず重なって心底自己嫌悪に苛まれていた。

郁の言葉に亜子はゆっくりと顔を上げ、郁の瞳をじっと見た。

立っている郁を見上げるため自然と上目使いになる。

唇をキュッと結び、潤んだ黒目がちな瞳は郁の真意を見抜こうと瞬きさえしない。

汚れのない、澄んだ瞳に吸い込まれそうになりながら郁は続ける。

「ほんとごめん。亜子があまりにも幸せそうだったから、ちょっと意地悪したくなっただ。」

あ、話ついでにさ、亜子の彼氏自慢してよ！

亜子が本当に幸せなら諦めるから」

郁は大げさな身振り手振りでなんとか亜子に機嫌を直してもらおうと必死だ。

その、母親に怒られて一生懸命謝る子どものような郁を見た瞬間、亜子は郁に恋心を抱いていたあの頃をふっと思い出していた。

郁と亜子は付き合っている間、喧嘩と言う喧嘩をしたことがなかった。

それはいつも郁が折れていたからで。

喧嘩になりそうになると、郁は今日のようにいつも必死に亜子の機嫌を戻そうと

右往左往していた。

そんな郁の様子に、拗ねていたはずの亜子もついつい笑顔になっていた。

まるで、何事もなかったように・・・付き合っている頃と同じように振舞う郁のその仕草に、亜子の記憶の中の一部がほんのりとあかりを灯した。

「・・・9時なんです」

「え？」

亜子の小さな呟きを聞き取れず、耳を近づける。

「門限・・・9時なんです・・・。それまでなら・・・」

俯きながら亜子が呟いた。

郁はゆっくりとした動作で店内の時計へと目を凝らす。それはすでに8時を回った後であることを知らせていた。

(9時って・・・高校生じゃないんだから)

思わず浮かぶ苦笑いを飲み込みながら亜子に向き直る。

「じゃあ、手短にしなくちゃね」

郁の答えに亜子は肩の力を抜き、安心したように少しだけ頬を緩め頷いた。

郁はなんとか挽回のチャンスを与えられた気がしてほっと胸を撫で下ろした。

しかし、同時に自分には猶予がない事を思い知らされる。

一人暮らしの亜子が『門限』と口にするのは明らかに彼氏との約束だろう。

（となると。

闘うにしろなんにしろ、まず相手を知る必要があるな・・・。）

見えざる敵・・・亜子の彼氏・・・の正体を

早めに暴かなくては。

亜子をエスコートし退席した後

会計を済ませながら、郁の心は焦燥感に蝕まれていくのだった。

8月の終わり。

夜風が少し乾き始め、季節が動き始めていることを教えていた。

郁は通りに出てタクシーを拾った。

「いつもは車なんだけどね。今日は飲みながら食事したかったから。ごめんね」と言いながらすまなそうに謝った。

そんな様子に、亜子は微笑が零れた。

悪くないときでもすぐに謝るそのクセが、昔と変わっていなくて。懐かしさに緊張も幾分ほぐれた気がした。

タクシーが止まったのは都内でも目立つ高層マンションの前だった。亜子は思わず上を見上げるが、まばゆい光の点がずっと上のほうまで伸びていくだけでその先端は視界に入らなかった。

「ぶっ、亜子口開いてるよ?」

郁の声に弾かれたように我に返り、慌てて口を閉じる。

郁はさりげなく亜子の腰のあたりに手を沿え、マンションのエントランスへと促した。

「せ・・・先生・・・」

ずんずん進む郁に怖気づき、すぐ横の郁を見る。

「ん〜? ここの42階。僕の部屋」

数字が並ぶキーボードを慣れた手つきで打つ郁。

オートロックを解除すると亜子を向き直り、にっこりと笑った。

「え!? 先生、こんなすごいところに住んでるんですか?! セレブだあ!!!」

「えー、そんなことないよ。洗濯物外に干せないしね。さ、どーぞ」

「は……はあ……洗濯物……」

郁のずれた答えになんて返事をしたものかと、郁の顔をチラリ、と盗み見する。

くつきりとした二重の大きすぎない瞳は、とても知的だった。

すっと伸びた鼻、程よい厚みの唇は優しく口角が上がっていて

郁が穏やかな内面を現しているかのようで。

柔らかかそうな栗毛色の髪は所々ゆるくカーブを描いていて

郁の甘い雰囲気を一層引き立てていた。

女の自分でも郁は「キレイだ」と表現したいほど中世的な顔立ちだった。

恵太の隣に並ぶといつも見上げるようになる亜子だが

郁の隣だと少し視線を上げる程度でいいせいか、

顔が近い気がして思わず目を逸らした。

部屋へ行こうと言われたときは躊躇したが

畳み掛けるように

「暴露話、さすがの僕でも人前じゃ出来ないからさ、許してくれる？」

そう言って片手を顔の前にもっていき、小さく頭を下げられたら

断れなかった。

エレベーターに乗り込み、二人きりになる。

普通のそれよりもずっと静かなエレベーターの中は
得も知れない緊張感と沈黙を生み出していた。

「・・・あの時ね・・・」

「は、はいっ!!」

突然声をかけられ自分でもびっくりする位声がひっくり返り
掠れたような声になってしまった。

(はずかしー!!)

思わず俯く亜子。

頬が焼けるようにちりちりと熱い。

きつと今、馬鹿みたいに真っ赤なんだろうなあと思うと
ますます顔を上げられなかった。

そんな亜子の初々しい反応に郁も驚き、一瞬次の言葉を忘れてしま
ったが

すぐにいつもの柔らかな目元に戻ると亜子を愛しそうに見つめた。

「あの日ね、僕・・・指輪作る相談してたんだ・・・。あの駅前の
ホテルで」

「え？」

「うん、亜子に贈るつもりだった・・・エンゲージリング」

郁は頭上に光る、エレベーターの現在位置を見つめたまま、そう言った。

先ほどまでの柔らかな笑みはそこにはなく、どこか寂しげな真剣な横顔。

そんな郁から、亜子は目を離せないまま唇をかみ締め、泣き出しそうな気持ちを必死に堪えていた。

51・郁 始動開始 2（後書き）

メリークリスマス！！です。

なのにお話のほうは怪しい雲行き+夏休み終盤というミスマッチっぷりでごめんなさい（笑）。

郁、結構腰が低いです。

亜子が郁に惚れた理由、郁と付き合っていた頃の二人の空気感みたいなものが

なんとなく、伝わればいいなあ・・・と思いながら書きました。

郁と亜子の時間があと1、2話続きますがもうしばらくお付き合いいただけたら嬉しいです。

今回は27日更新予定です。

こ、今度は大丈夫です、きつと（前科アリ）！！

リアルが少し落ち着いたので奇数日更新できたら嬉しいなあなんて・・・ごによごによ・・・。

それでは今日のこのクリスマスの日が

あなた様にとって素敵な一日となりますように！！

こんな隙間までお付き合いくださいましてありがとうございますとございました。

玄関を通されて廊下を抜けるとドラマや映画で見るとような、まばゆいほどの夜景が大きな窓一面を埋め尽くしているリビングだった。

高層階から見る夜景は、まるで自分が空に浮いているかのように錯覚させた。

黒と茶色を基調にしているスタイリッシュな部屋はどの家具も郁のこだわりがちりばめられているようで、シンプルだけど

どこかにワンポイントがあるようなセンスの良いものばかりだった。

廊下にもいくつか扉があったことを考えると、まだ部屋がありそうでした。以前付き合っていた頃に郁が住んでいた单身者向けの小さなマンションとの格差は歴然だった。

「なんか……。あの頃の面影一つもないですね……」

あまりのゴージャスさに立ち尽くし、しばし呆然と辺りを見回していた亜子が
思わずポツリと呟いた。

「んー？まああの頃は安月給の講師だからねえ。あれが精一杯だよ。社会人になってまで親の脛かじるわけにもいかないでしょ。亜子、立ってないで座ったら？」

黒い脚のガラス製のローテーブルにハーブティらしいものを置きながら
ソファアールへと亜子を促した。

亜子は小さく頷いて腰を下ろしながらも、まだ部屋の中へと目を奪われたままだった。

「先生、今何やってらっしゃるんですか？」

「今？ホスト」

「え”！！」

驚いてカウンターの向こう側のキッチンへと姿を消した郁を見ると
大笑いしながら

「そんなわけないじゃん。亜子は相変わらず騙されやすいねー」

と、心底愉快そうに亜子の向かい側の一人掛けのソファアールへと腰を下ろした。
手にはコーヒールを持って。

「今は同じ塾でもコンサルタントとして仕事してる。いずれは父の仕事を継ぐことになるから講師しながら、経済とか経営とか勉強してただけど、やってみたらそっこのほうが面白くなってきた。」

講師辞めて3年かなあ……。最近軌道に乗り始めたところ」

「もーびっくりしました。けい……。諫山君が諫山先生イギリスへ留学してたって言ってたから……。」

あ、お茶、いただきます」

そう言っただけの出してくれたお茶へと手を伸ばした。

それは亜子が昔から好きなフレーバーティー
コットとジャスミン、ミントがブレンドされた
アプリ
もの
だった。

その懐かしい香りに口元に運んだカップが思わず止まる。

「ふっ、なんか『諫山』のオンパレードだな。いいよ。僕は郁で昔みたい」

「あ……。はい」

香りに引き込まれていただけでなく、『昔みたいに』と言われて更に動揺してしまう気持ちを誤魔化そうとゆっくりと口の中へと流し込む。

一口含むと爽やかな香りが口に広がった後、スーッと鼻腔を抜けた。

「……おいしい……」

「そう？良かった。亜子、それ好きだったよね」

自分はコーヒーを口に運びながら、目で亜子の持つグラスを指すとそのまま芳醇な香りと香ばしさを楽しんでいるようだった。

（もしかして、と思ったけど……先生、やっぱり覚えてくれていたんだ……。）

再会した時は、真っ青になるほどの衝撃だったし戸惑った。

でも、それと同時に懐かしさと嬉しさを感じていることも事実だった。

あの頃と変わらない優しい気遣いに触れたとき、

自分ではどうしようもない感情が沸きあがってくる。

1年ちよつとの恋人同士だった期間。

悪いことばかりではなかった。

その淡く、穏やかな日々が郁と接している中で蘇ってくるのは仕方のない事だろう。

ましてや初めて恋心を抱いた相手だとしたら……。

「あの後、大学院行ったんだよ。2年通いながらコンサルティング

業の会社立ち上げたんだ。

留学はそのスキルアップのため。去年から先週までね」

「すごいですね……。先生は……。ちゃんと前を向いて確実にステップアップしてたなんて。

わたしは……。逃げて立ち止まったままでした」

亜子は決まり悪そうに笑って見せた。

出来れば一番思い出したくない過去。

思い出したくないぐらい、落ち込んだ日々。

あの日を境に志望校すら変えてしまった亜子には、人生初の分岐点だと言えた。

その間も、郁はしっかりと道を見据えていた……。

さすが、というかやっぱり、というか。

改めて郁と自分の差を思い知った。

「そんなことないよ、僕だってコレでも亜子に振られてかなり凹んだんだから」

郁はコーヒー片手にソファアへ体を預け、笑いながら続けた。

「亜子全く話聞いてくれないしさ。少し冷静になってくれる時間を置こうと思ってたら」

いつの間にか県外に進学してるし」

「ごめんなさい……。私……。先生から逃げ回って……。面と向かって振られるのが怖かったです……」

「うーん。許さない」

そう言うて今度は前かがみに亜子へと向き直ると

「まず、先生って呼び方やめね。僕、もう先生じゃないし。これから父の手伝いも増えるからちよくちよく学校に顔出すけど、そういう場以外では敬語も禁止。約束してくれたら許す！」

そうおどけてみせた。

許さないと言われ、一瞬のうちに硬直していた亜子はその笑顔に一気に肩の力が抜けた。

「本当に……。ごめんなさい」

「じゃ、約束成立ね。今度は僕が謝る番だね」

そう言うて立ち上がって別の部屋へと出て行った。

郁の動きを目で追い、姿が見えなくなってから小さく息を吐いた。自分では緊張していないつもりが、肩に力が入っていることに気が付き

ゆっくりと首を回して背伸びをした。

部屋へと戻ってきた郁はそのままキッチンへと進み
冷蔵庫からビールを2本出してきて、冷えた2つのビアグラスと
もにテーブルの上へと置いた。

「はい、亜子も1本付き合って。後はここからタクシーで帰るだけ
だから
1本ぐらいいいでしょ？」

そう言うと、郁は亜子の隣へと座り先に缶のタブを引いて
グラスに注ぎ、乾杯を待った。
亜子もなんとなく断りづらいその雰囲気、それを手に取った。

「はい、かんぱーい」

軽く重ねて音を出すと、郁は喉を鳴らして飲み始めた。
真横で動く、郁の喉元に視線を奪われ鼓動が急速に速まる。
郁の顔を直視できなくなったことを誤魔化すように
亜子も一口ぐいっと飲み込む。
きつめの炭酸が喉を痺れながら体内へと入っていく。

「ぶはあー！やっぱり夏の1杯目はビールに限る！！」

おいしそうに炭酸とアルコールの刺激を楽しみながら

郁は飲み干したグラスをテーブルへと置いた。
2杯目を注ぐと、ジャケットのポケットをなにやらぐそぐそと探っていた。

「せんせ・・・じゃなくて、カオルさん？なにやって・・・るの」

思わず先生と呼び、敬語で話そうとしたが隣でぴたりと動きを止めじろつと鋭い視線を向ける郁に、先ほどの約束を思い出しつつかかりながら言葉を繋いだ。

郁はその様子に満足げににっこりと微笑むと

「よく出来ました。そんな亜子に・・・ハイ、ごほうび！」

そういうと、薄いブルーに白いリボンがかかった小さな箱を亜子の手に乗せて見せた。

「これ・・・なあに？」

手の中の箱は一見するときれいだったが、よく見るとどこか時を感じさせるような・・・ところどころ擦れたり色が褪せていたりした。

「開けて見みて」

郁がその箱を指差しながら催促した。

亜子は小さく頷いてリボンを解いていく。

(まさか・・・)

次第に高まる緊張感で、手が震える。

そつと箱を開けると・・・。

「つ！！！！」

そこには少しクセのある字が連なるメッセージカードと小さな石が光る指輪が入っていて・・・。
その文字を読んだ瞬間、息が止まるかと思ひ・・・。
思わず口元を押さえ、声を失った。

「……それが、あの日の答え。余計な心配させて傷つけてごめんね」

そう言うと、亜子の頭をポンポン、と2回軽く叩いた。

郁の謝罪が間違っていると伝えたくて、亜子はただただ頭を左右に振っていた。

『亜子へ』

高校卒業おめでとう。少し歪いびつだけど僕が作った指輪です。

大学卒業したら結婚しよう 郁』

メッセージカードの中の郁の想いが溢れていて

自分の意思とは別のところで涙が零れ落ちていた。

郁はそんな亜子の頭を引き寄せ、自分の肩へと寄り添わせるとそのまま優しく、亜子の滑らかな髪の毛を撫でながら続けた。

「……あの日、一緒にいたのはジュエリーデザイナー。

大学の頃の先輩に紹介してもらったんだ。あのホテルの中のジュエリーショップで仕事してて

奥にちよつとした工房があるんだ。

いろいろ相談しているうちに、自分で作ってみたらどう？って言われてね。

石を選んでもらって、そこで内緒で作らせてもらったんだ。ま、シルバーだけど普通じゃなくて面白いなって思ったから、それから塾の帰りにしばらく通って仕上げた」

その言葉に、亜子は連絡の付かない日々が全て自分のためのものだったと改めて知り
どうしようもない罪悪感と自分の過ちに涙が止まらなかった。

「婚約者がいるって噂が流れたのも……。急いで帰る理由を同僚に聞かれて

『婚約したい相手がいるんだ』って話したら、どうも人伝に広がっていく間に

『婚約者がいる』にすりかわってみたい」

嗚咽の止まらない亜子に頭の上から優しく降り注ぐ郁の声。

最後にくすつと笑うその息遣いまで伝わってきて、心地よかった。ずっとずっと恋しかったこの温もり。

時は流れお互い変わった部分もあるけれどそれでも芯の部分は何も変わってなくて。

ちよつとした仕草や嗜好物やクセに触れるたび

愛しあっていた日々、思い続けていた4年間で溢れてきて……。あの頃の気持ち鮮明に蘇り、愛しさが胸いっぱい広がって先ほどまで感じていた切なさとは違う、甘い痛みに代わっていた。

郁は体を少し捻り、横向きのままの亜子を強く抱きしめた。

「亜子……」

郁の胸からふわりと薫る、タバコと控えめに纏うコロンの匂い。

（ああ……。カオルさんの匂いだ……。）

あの頃と何も変わらない郁を胸いつぱいに感じ、

亜子は自然と腕を背中へと回し、自分もそっと抱きしめた。

その瞬間、亜子を抱く郁の腕に一層力がこもった。

「カオルさん……」

小さく名前を呼んでみる。

それに答えるように郁が亜子の頭に頬を摺り寄せた。

「亜子……。愛してる……」

耳元で囁かれる、数年越しの愛の言葉。

思考回路がうまく作動しなくなり、体の芯が痺れていくのを
郁の腕の強さに応えながら感じていた。

54・泰次の憂鬱 1

都内某所 - - -。

たくさん撮影機材やセットが並ぶそこは、日付変更線を越えた頃から明かに空気が変わっていた。

息をするのも躊躇してしまうほどのピリピリとしたムードに誰もが逃げだしたい気分と戦っていた。

それは主演の恵太と小嶋はもちろん、監督である泰次も同じで・・・。

ポケットを探りタバコを取り出そうとするも、その中身は空っぽで。「ちっ」と舌打ちすると思いつき握り潰した。

そのまま力任せに床へ叩きつける。

監督用の、赤に黒の縁取りのキャンピングチェアにどかっと思いを預けると

大きく息を吐きながら天を仰いだ。

そこにあるのはもちろん、無機質なつくもの鉄骨とライトだけで・・・。

ゆっくりと目をつぶるものの、お気に入りのチェアの座り心地さえ感じられない疲労感を味わっていた。

セットの中の人物たちは・・・。

各々神妙な面持ちのまま微動だにしない。

「これだからお子様相手は・・・」

聞こえるか聞こえないか微妙な音量で本音を吐露しながら体を起こした。

「あのさ。時間ないんだけど。やる気ないんなら降りろよ」

泰次が惚れ込んだ、恵太の強い瞳が返ってくると思いきや

「・・・すみません」

恵太は泰次の顔すら見ることなく俯いたままだった。

小嶋も下唇を強く噛み締めたまま、恵太をじっと見据えていた。その表情は切なげで、両手は拳を強く握り締めいていた。

「はああああ〜。も〜、お前ら何なんだよ〜。どーすりゃいいわけ？！」

泰次は思わず顔を覆つとそのままうなだれた。

今までも何度かこういうことはあった。

うまく進まず、怪しげな雰囲気になったが恵太が不調なときは

小鳩がムードメーカーとして盛り立ててくれていたし、

小鳩がゴキゲン斜めときは恵太が小鳩の隣に黙って座っていた。

それでなんとかここまで来たのに、二人の抜きの撮影から

全く進まなくなってしまった。

何度となく休憩を挟んだり話をしたりしたが、二人のシーンだけが
どうしても撮れない……。

いや、実際はもう何十テイク目か判らないほど撮っているが

一見何の問題もないような空気感を、泰次が見逃すはずもなく。

タイムキーパーや助監督はそれを泰次の頑固さと思い、

辟易していたが、泰次と当の二人はそれに気付いていて……。

いつもならこんなときは何時間撮ってもいい結果にはならないので

翌日に持ち越すのだが

明日は屋外ロケも予定していたし、多少の猶予はあるにしてもスタ
ジオも無限に借りれるわけではない。

加えて小鳩はテレビ番組の撮影なども加わり映画ばかりにかかれな
くなってきていた。

もう少しすれば年末年始の特番やスペシャルドラマの予定も食い込
んでくる。

年明けにはこの映画クルーでの海外ロケもある。

早い話が、時間がないのだ。

普通は撮影期間が長くなるにつれ、出演者たちの息もあってくるためところどころの難はあっても比較的テンポよく進んでいくものだった。

それがここで……ほぼ毎日過密に接していきなりその呼吸が崩れるとは……。

(恋愛関係ごちゃまぜ三昧……か)

泰次は容易にその結論にたどり着くと二人に居残りを命じてタバコを買いに深夜のコンビニへと出かけた。

「うつわあー!!泰次生意気ー!!なんでディスカバリーなんて乗ってんの?」

ランドローバーやる?!あんだ、なんか悪いことしてんねやる。白状しいつ!」

「……そんなにすごいのか?この車。左ハンドルだから外車なのは分かるけど……」

恵太が驚いたように座席をポンポンと叩きながら小鳩に訪ねると

泰次が答える前に小鳩が恵太に噛み付いた。

「ケータ、知らんの?! あんた男の子やろ?!」

もつとこう、がつつり興味持ちーなあ。そんなんやからにーちゃんに割り込まれるねん。

ローバーやで? イギリスの高級外車! 高級4WDと言えはローバー差し置いてないねんで!

ケータかて、レンジローバーくらいは聞いたことあるやろ?」

「な・・・名前くらいは・・・」

途中むつと来るフレーズがあつたが、

恵太はあまりの小鳩の剣幕にとても知らないと言えず曖昧にかわした。

そんな恵太の返事なんてお構いなしに、がつつりかぶせ気味に小鳩は続ける。

「そのローバーよ! デイスカバリーも人気上位車! シリーズ化されてバージョンアップしててな。

あ、でも、昔のごつごつしたモデルもかっこええんよ。

何? こー男っばいフォルムって言うん? 荒々しい猛者のようだなあ。

『俺に走れない道はないぜ!!』 みたいなの!!

せやから、そーゆうモデルは中古でもありえへんほど高いねん!

新車で買おう思ったらなあ、あんた郊外にマンション買えるで!!

せやのに泰次、いっばいオプション付けてはるし。

一般サラリーマンの年収5、6年分やな、これ。

泰次、裏で何悪い商売してんねん！ま、まさか脱税か！？マルサか？！」

もはや独壇場の小鳩は後部座席から運転中の泰次の頭をくしゃくしゃとかき回した。

「あー、もう！！さわんなっ！ばかか！お前は。俺だって一生懸命仕事して手に入れたの。人聞きの悪い事言っな」

運転しながら片方の手で小鳩の手を払いのける。

異常なまでに詳しい小鳩の説明に言い返すすべもない。

泰次はふーっと大きく溜息をつきながら深夜の都会を疾走する。

（小鳩恐るべし！！値段まで当ててきやがった。何でぱつと見てオプシヨンまで分かるんだ？）

こいつは何者なんだ、と興味はあるが聞いたら多分今の10倍の興奮度と長さで語られると思うと迂闊に口にできそつもなかった。

（何で俺が・・・）

ルームミラーで後部座席をチラリと覗くと
完全に小鳩の餌食になった恵太が一生懸命相槌を打ちながら
派手な身振り手振りの小鳩の話聞いていた。

先ほどまでの血の気のない二人から比べれば、今のこの状態は
泰次にとって胸を撫で下ろす光景だった。

（良かった。二人とも笑ってるじゃん・・・）

泰次の目元は優しげに下がり、少し緩んだ口元から笑みが漏れた。
いつもの二人のやり取りに、微笑ましく思い同時に安堵している自
分に気が付いた。

それは、父親が我が子に抱く感情というか、見守る教師の感情とい
うか・・・。

泰次は慌ててそれを打ち消した。

（そう、そうだよ。これは映画のためだ！！映画のためにやってる
んだ。

俺はガキは嫌いだ！）

ハンドルを握り締める手に力を込めながらハンドルを右に切った。
しかしそれはほんの僅かな夢つつつのような時間で・・・。
突然、車内に電子音が響いたかと思うと

『目的地周辺です。音声案内を終了します』

ナビの告げる機械的な声が車内に響いた。

後部座席の恵太と小嶋も瞬間的に話を止めた。

画面上では目的地として設定されている場所にフラッグが立っており点滅している。

「恵太、この辺か？」

泰次は務めて冷静に、そして軽い口調で恵太に尋ねた。

恵太は身を乗り出し、窓越しにゆっくりと辺りを見渡すとある一つの建物を小さく指差した。

「あ……あそこ」

「りょーかい」

ミラー越しに恵太を確認して泰次はゆっくりと左折し、指差した場所へと横付けた。

「ケータ？どう？」

じっと一点を見つめている恵太の横顔を心配そうに小嶋が覗き込む。

泰次も後ろを振り返り恵太の返事を待つ。

「……電気……点いてない……」

ポツリと恵太が呟いた。

沈黙が車内を襲う。

「……ね、寝てるんとちゃう？な、なあ、泰次！！」

「お、おう」

沈黙に耐えかねた小鳩が泰次を巻き込んでフォローを入れるが恵太はゆっくりと首を左右に振った。

「いや……。寝る時はカーテン閉めるでしょ、普通」

恵太の言葉に小鳩と泰次はベランダに視線をやる。

暗闇で正確には分からないが、確かに薄手で遮光されていないように見えた。

恐らく中に入り、時を一緒に過ごし、カーテンの質や柄まで知っている恵太にしか分からない指摘。

その事実は今度こそ、何も言えなくなってしまう二人。

「9時までには帰るって・・・言ってたんだ・・・」

消えそうな期待の灯りを消された、表情を失くした恵太。

その心の奥底は計り知れなかった。

ただ、時刻は9時をとくに通り過ぎ

夜明けのほうに近い時刻だという事実だけがそこにあった。

カーステレオから静かに流れる、サン・ボーンの泣きのサククスを
聴きながら

しばらく誰も動かなかった。

泰次がゆっくりと窓を開け、タバコに火をつける。

車外に放たれる煙は、音もなく広がり姿を消していった。

夜風は少しずつ、冷たさを増していた。

三者三様の思惑と苦しみを抱えながら

今はただ、主のいない部屋をじっと見つめるよりなかった。

54・泰次の憂鬱 1（後書き）

本日もお読みいただきましてありがとうございます。

更新時間が遅くなってしまうましたが、なんとか奇数日更新できました。

万が一お待ちいただいておりますたらごめんなさい。

こんなもったいぶったような修羅場直前の空気（笑）のまま新年へ向かうのは気が進みませんが……。

恐らく本日が年内最後となります。

うまく行けば大晦日……。いや、大口は叩けませんので（笑）ここで本年のお礼を……。

こんな拙い文章でしたが、ご愛読いただきました全ての方に深謝いたします。

いつの間にかお気に入り登録していただいた読者さまが増え、評価をいただくようになり、本音を打ち明けられる作家様と交流させていただき……。

そんな作家様には到底及びませんが、総PVが20万を越えていました。

私にとっては信じられない、夢のようなことで幸せをたくさん分けていただきました。

本当にありがとうございます。

今回諸事情でキチンと校正できていない部分があるかもしれませんが指摘いただきましたら早急に対応いたしますので遠慮なくお申し付けください。

それでは、本年もありがとうございます。

少し早いですが、あなた様にとって残る僅かな年が悔いのないもので、また来る年が、夢に近づく、もっともっとすばらしい日々でありますように!!

それでは忙しい年の瀬。

こんな隙間までご覧いただきましてありがとうございます。ありがとうございました。
良いお年をお迎えくださいませ!!

2009・12・29 里中とおこ

55・泰次の憂鬱 2

泰次が吐き出す紫煙が、窓の外へと吸い込まれるように白い線を描き、幻想のように姿を消して行く。

その様子を、小鳩は後部座席の窓からぼんやりと眺めていた。

(・・・こんな時に・・・かける言葉なんて、あるわけないやん)

いつものようにおどける術すら見つからず、チラリと隣の恵太を見遣る。

窓の外の、亜子の部屋の辺りを一点に見つめている恵太。

切れ長の目は決して表には出さないが、
静かな炎を宿していて。

役柄のために長めに流している前髪はいつしかすっかり恵太の顔になじみ、

その目元を薄く引かれたカーテンのようにそつと隠していた。

眉間にはいつもは存在しないシワが深く刻まれるその様に

恵太の苦悩が見て取れた。

いつも穏やかに笑みを湛えているような口角の上がった口元は、
今日は心なしかきつく結ばれている。

それでも。

それでも凜としたその険しい横顔に、
こんな時でさえゾクリ・・・と心を跳ねさせてしまう自分は病気だ
と思う。

小鳩の視線に気がついたのか、ふいに恵太が小鳩を振り返る。

「珍しい。マジメな顔の小鳩」

喉元で、クツと笑みを零しながらふわりと微笑む恵太からは
先程までの険しい表情は影すらもなくなっていた。

切なくも、きれいなその表情に小鳩は胸の芯をギュツと掴まれ、
言葉を返すことも忘れていた。

「し・・・失礼なっ！うちはいつもマジメやわ」

動揺を隠すかのようにふいっと横を向き、視線を外した。
慌てふためきながら答えたせいで吐かれた声は少し上擦っていた。

そんな小鳩に、恵太はふわりと表情を緩め。

小鳩の艶やかな黒髪に、恵太の手が伸びポンポンと2度優しく撫で
ていった。

思わず視線を戻すと、恵太は小さく頷いた。
そして運転席の泰次を向き直り。

「ありがとうございました。監督。俺、降ります。
小鳩と帰ってください」

そう伝えた。

口の端に煙草を銜えたままの泰次はミラー越しに恵太と目が合うと、
一瞬言葉に詰まったようだった。

「このままじゃ仕方ないし……。もう少し待って話してきます。
……明日のロケ、時間は守りますから」

泰次は映画のためと自分を鼓舞し、ここまで子守にうんざりしてい
たが

自分が遠くへ置き忘れてきた感情を

恵太のその言動に見せ付けられ、なんだか腰が落ち着かなくなっ
ていた。

昔は自分も、こんな風に誰かを好きになったり、誰かを信じたりし
ていたのだろうか……。

損得勘定なしに、真っ直ぐにぶつかっていったのだろうか……。

到底恋愛映画を撮る監督の考えることではないな、と根底を揺るが

されるような
自虐的な思いが全身を駆け抜けた。

恐らくはそのせいだろう。柄にもなく作り笑いを浮かべ、応えた。

「・・・了解。まあ・・・答えは早まるなよ」

大丈夫です、と精一杯に平常心を取り繕う恵太を横からじっと見ていた小鳩は

口内にジャリと苦みが広がるのを感じた。

恵太の言葉一つ一つから・・・。

揺れる瞳からも、握り締めている拳からも、
落ち着こうと大きく息を吐くその呼吸にも。

亜子を信じたい気持ち痛みほど表れていて。

その静かながらに芯に炎を宿す亜子への恋心を見せ付けられて
小鳩の胸はズキズキと悲鳴を上げていた。

と同時に、恵太に対する自分の想いと

恵太のいじらしいまでもの愛情を知りもしないであろう亜子への嫌
悪感とも敵対心とも取れない、

ドロドロとした感情が小鳩を蝕んでいた。

小鳩もありがとな、と小さく笑ってドアを開け、車外へと一歩足を
踏み出した恵太に

小鳩は背後から半ばタツクルするようなカタチで飛びついた。

瞬間、荷崩れを起こす荷物のように二人はひんやりと冷たくて固い道路へと

ゴロゴロつと転げ落ちた。

「……つてえ……。こ、小鳩!?」

「ああつつたまきた!」

「ええ?……っ……マジいてえ……」

恵太は突然の衝撃でジンジンとした痛みが全身を駆け巡るが自分を完全に敷物にしている目の前の小鳩の顔が怒りに震えておりそれが何故なのか分からず、両方の腕を後ろ手について上半身を起こしながら痛みを耐えていた。

「こっちがおとなしくしてりゃー、ケータほたって朝帰りやる?! ちょっと慢心し過ぎなんちゃうん?!」

「はあ?!」

「もー遠慮なんかしたらん! 全面对決やったるわっ!」

「いっいっほび……ぐぐるご……」

惠太の首をぎゅうぎゅうと絞り上げながら、前後にゆさゆさと揺さぶる小鳩にぎよっとして、泰次は慌てて運転席から飛び降りると小鳩に駆け寄った。

「こ、小鳩、落ち着け。な？とりあえず手を離せ。惠太ー！！死ぬなー！！！」

「うるさいっ！文句があるなら出て来いーや！！ヒナサワアコ！！！」

完全に興奮状態で近所迷惑よろしく叫ぶ小鳩を泰次が後ろから羽交い絞めにして
引き剥がそうとしていたその時

「……あの……。呼びましたか……。？」

鈴が鳴るがごとく小さく、コロンとした愛らしい声が3人の頭上に降ってきた。

何かに弾かれたように全員がそちらへと顔を向けると……。

「先生……。」

「……え、惠太君？ど、どうしたの？！」

肌寒い夜の空気から身を守るように掛けたストールを胸元でしつかりと合わせ

3人を覗き込むように立つ亜子がそこにいた。

地面に体を預け首を絞められている恵太と、その恵太の上で首を絞めている小鳩。

その小鳩を羽交い絞めにしている泰次。

「あの……名前を呼ばれたような気がしたので……。
えと……。違い……。ました？」

ピクリとも動かない3人に、亜子は理由のない気まずさを覚え
問いかける声は小さくなる。

「……あなたがヒナサワアコ……？」

「あ……。はい……。初めまして」

出て来い！と行ったものの本当に出て来てしまった敵に、
しかも丁寧に初対面の挨拶までされてしまうとさすがの小鳩も
文句の一つも出てこなかった。

「……初めまして。海月小鳩です……。」

こっちは・・・ナニ泰次だっけ？」

「松浦だっ！お前、監督の名前くらい覚えるよ！..」

非日常的な、何とも間の抜けた初対面を果たした
亜子と小鳩、そして泰次だった。

小鳩を抱え込んだまま動くタイミングすら計れず、
亜子に意味もなく苦笑いを浮かべながら泰次は思った。

居残りなんかさせなけりゃ良かった。
話なんて聞いてやるんじゃないかった。

「ヒナサワアコの家に行つて確かめよう！白黒させよう」
そう言つて小鳩にこり押しされて車なんか出してやるんじゃないかっ
た。

思わぬ形で他人の恋愛ごとに片足を突っ込んでしまった泰次の憂鬱は
まだまだ続きそうだった。

55・泰次の憂鬱 2（後書き）

しばらくお休みをさせていただいているうちにすっかり新年です。もしお待ちいただけている方がいましたらごめんなさい。

久々の更新ですが、いかがでしたでしょうか。

またお暇なときに感想などいただけますと嬉しいです。

当分は不定期更新ですが、今日からまた書いていきますのでお付き合いいただけたら幸いです。

では、今更感たっぷりですが、本年も私ともどもジャスミンをよろしく願いいたします（深礼）。

里中とおこ

56・キミはキレイだ 1

「あの・・・どうぞ・・・」

「ありがとうございます。すみません、なんか突然俺たちまで・・・
。すぐおいとましますので。な、小鳩？」

ソファーから軽く腰を浮かし亜子の出してくれた麦茶に礼を言いながら、
隣の小鳩を見やると。
口を真一文字に結んで視線を色んなところへ忙しなく動かしている。
掌は固く結んで微かに震えているようだった。

(まあ・・・そりゃそうだろうな・・・)

小鳩同様、視線を動かしながら泰次はそう思った。

夜中に外で立ち話をして近所迷惑になるから、と
亜子は恵太はもちろん、泰次と小鳩を部屋へと促した。

「・・・事故で遅れた揚句、居眠りするなんて、せん・・・あこらしいと言
えば、らしいな」

そう言って亜子をからかいながらキッチンへ向う恵太は、驚くほど
穏やかで。

目の前に亜子がいること、その事実にあぐらしているのが分かった。

小鳩は決して自分には向けられないその笑顔に何を思っているのだろう。

泰次は麦茶を一口含み、強く掌を握り締める小鳩に気が付かないふりを

決め込んでいた。

亜子は確かにあの後郁の部屋を出ていた。

しかし帰宅を急ぐ駅で、電車の人身事故によってダイヤは大幅に乱れていたのだ。

慌てて恵太に連絡をしようと思つて手にした携帯は
こういうときに限つて無残なまでに圏外で。

恵太の職業柄、そして二人の関係柄、
個人情報が増えたらまずいと思ひ恵太の番号だけ、いつも持ち歩く
手帳に記していなかった。

今晚はその配慮が仇となり、連絡が出来なかった。

仕方なくバスを乗り継いで帰ろうと思つて向つたバス停は
同じように帰宅を急ぐ人で長蛇の列になっていた。

バスを待つこと2時間。

やっこのことでも乗り込んだバスのシートは
とても乗り心地がいいとは言えなかったが、
郁との対面に緊張のピークに達し、

そして予想外の出来事の連続でボロボロになっていた亜子には

腰を沈めると同時にようやく酸素を得たような感覚で。

大きく息を吸い込んだ時、ふっと張り詰めた糸が切れた気がした。

いつもと違う町並みをぼんやりと眺め、窓に額を預ける。

泣きたくないのに勝手に流れ落ちてくる涙をこっそりと拭いながら少し煩いくらいに不規則に揺れるバスのリズムを体で感じているうちに

泣き疲れていつの間にもやたら深い眠りに落ちていた。

「気が付いたら・・・全然知らないところだったの」

恥ずかしそうに微笑んで、そっと自分の髪を撫でる亜子を見て

泰次はなんとなく、恵太が亜子に惚れた理由が分かった気がした。

幼いまでに、純粹で穢れを知らない。

澄んだ瞳をしていると思った。

しかし、片思いをしている相手の恋人の家なんて、あがるもんじゃ
ない。

この部屋は、どこも恵太で溢れている。

二つ並んだスリッパ、テレビ脇の雑誌、

ここからチラリ、見えるキッチンには明らかにおそろいの食器やグ

ラスなどが
キッチンと整頓されて並んでいた。

何よりも。恵太がこの部屋にとてもよくなじんでいた。
亜子の部屋へ入るとすぐに棚の上に恵太は自分の腕時計を置いたし
今だって自分の家のように亜子と一緒にお茶を準備する。

それはまるで新婚のカップルのようで、亜子と恵太の仲の良さを
實際目の当たりにした小鳩にとっては地獄絵図のような光景だろう。

泰次はもう一口、冷たい麦茶で喉を潤す。

恵太は、嫌がらせのような

「うちは熱い紅茶がいい！砂糖少な目のミルクたっぷりな！
ついでに生姜の絞り汁も入れてや！

冷たいモンはむくみの原因になるから、撮影前はあかんで」

という、小姑顔負けの小鳩の注文に少し困った顔をしつつ「はいは
い」と律儀にこなして

小鳩の前に運んできた。

「お待ちどう様。砂糖とミルク足りなかったら言って」

カップとソーサーをそつと並べながら小鳩を見る恵太のその目は
驚くほど優しく、恵太の中での亜子の存在の大きさを改めて感じて
いた。

ただ……。

そんな恵太と小鳩、亜子の中の空気感のズレもだが、泰次は先ほどからある一つの点が気になって仕方がなかった。

それは……。

「先生、この前のクッキーってどこ？」

「あれ？紅茶の缶と一緒に置いてなかった？」

立ち上がり、キッチンへ向かう恵太を黙って見送りながら。

(まただ……。)

そう。

ところどころで恵太が『亜子』ではなく『先生』と呼ぶことだった。

ローテーブルの下にあるスペースから見えている高校の英語の教科書らしきものと

『文部科学省 高校英語科指導要綱』と書かれた専門書……。

(まさか……、な……)

頭に過ぎる、ある一つの結論が間違いであることを願いつつ……。
もし……もしそれが事実あたりだった場合……。

その思考に辿りついた途端に、泰次は今しがた潤ったばかりの喉が
ものすごいスピードで乾いていくのを感じた。

(いやいやいや……、それはまずいって、恵太!!!)

頭を抱えたくなる衝動を抑えて、背筋に冷たいものが走り出したとき
突然小鳩が口を開いた。

「単刀直入に言うわ。亜子ちゃん」

「は、はい」

その厳しさを含んだ小鳩の声色に
全員のお茶の準備を終え、小鳩と泰次の向い側に座ったばかりの亜
子のみならず、
恵太と泰次も思わず息をのんだ。

「ケータのこと粗末に扱うんやったら、容赦しいひんで」

「・・・え？」

状況がつかめないらしい亜子が、大きなその瞳を更に見開き、少し首をかしげながら小鳩を見つめ返した。

56・キミはキレイだ 1（後書き）

かなり久しぶりの更新で、とてもとても恐縮です。

もし、まだ覚えていただいていたらうれしいなあと思い、ひっそりと更新してみました。

未だじれつたい恵太と亜子ですが、丁寧に日々を育んでいる二人と、その周りの暖かさを描きたいと思ったなら、こんな遅々とした展開で・・・。

まだまだ精進が足りずうまく表現せず申し訳ありませんがこれも二人の味だと思っただけだから・・・（言い訳全開）。

泰次と小鳩もやおら怪しい動きです。

今後は更新頻度を奇数日更新へ戻せるよう心がけてまいりますのでまたお付き合いただけたら嬉しいです。

それでは今後ともよろしくお願いいたします（深謝）。

里中とおこ

57・キミはキレイだ 2

突如神妙な顔をして亜子を見据える小鳩に
泰次はひやりとしたものが背筋を駆け巡るのを感じて。

「・・・小鳩。やめろ」

泰次は小鳩の膝に手を置き、軽く揺らしながら静かな声で制した。
小鳩はそんな泰次の手を無言で払いのけるとキツと睨みつけた。
そのあまりの形相に怯んだ泰次をよそに亜子へ向き直ったかと思うと
額がテーブルについてしまうほど、勢いよく深々と頭を下げた。

「ケータのこと、大事にしたってください。お願いします!!」

「・・・小鳩？」

予想だにしなかったその行動に泰次は一瞬思考が停止した。
それは恵太も亜子も同じだったようで、動揺を隠せずにした。
恵太はただ小鳩の名を呟くだけで精一杯だった。

顔を上げた小鳩はそんな恵太には一瞥もくれず、
真っ直ぐに亜子を見つめた。

「ケータは、亜子ちゃんのことめっちゃ好きなんです。撮影に身が入らんようになってまっくらい」

「……え……」

真っ直ぐな強い瞳が亜子を捉え、亜子は呼吸するのも忘れ小鳩から視線を外せなくなった。

「だから……。だから、頼むからケータのこと、大事にしたってちゃんと亜子ちゃんの『一番』にしたってください。」

どんな理由があっても……。ケータを不安にさせひんって約束してください」

そう言うと、また深々と頭を下げた。

亜子は返す言葉もなく……。

いや……。正確には何か口にしようと思っているのに何も出て来てくれなかった。

声にならない声が、亜子の口元を揺らす。

その場にいる全員が緊張感の走る沈黙に動けずに僅かな時間が流れた。

そんな沈黙を破るようにガバリと、音がしそうなくらいの勢いで小鳩は顔を上げ、今にも泣き出しそうな亜子の様子にふっと表情を崩した。

「いやあ、何？ほら、うち、芸能界でケータのねーさんやからなんや心配で！

ごめんなあ、過保護な姉で〜。

なんか、ここにいるケータがあまりにも幸せそーやから、可愛い弟嫁に出す気分になってまうわあ。

あれ？弟やから婿か！ケータ、婿養子か？！

大きくなりよつてえ・・・」

そうおどけて、わざとらしいまでのテンションで捲くし立てた。艶やかな自身の黒髪を豪快にくしゃくしゃにしながら笑ってみせた。

その痛々しいまでの笑顔に、泰次は胸を締め付けられ、迂闊にも瞳が潤んでしまいそうになった。

先ほどまで宣戦布告を豪語し、憤慨していたはずの小鳩が・・・。

それを思うと抱きしめてしまいたい衝動を寸で堪えて

小鳩のその努力を無駄にしないよう、大きく息を吸い込んだ。

「いやあ亜子さん、ごめんなさい。いきなりで驚いたでしょう？」

努めて穏やかな表情とトーンで、亜子に微笑みかける。

「こいつ、ほんと恵太溺愛してますんで許してやってください。恵太のことになるとすぐ熱くなるんですよ。」

俺より恵太の才能に惚れこんでて。

ちょっと引きますよ、こいつの世話焼きっぷり！

この前なんか、恵太が台本に書き込もうとしてたら・・・」

「どうわああああ！！！！いいっ！！言わんでもいいっ！！！！
口を閉じーっ！今すぐ！！！！」

そう言いながら小鳩は泰次の躯体になだれ込み、慌てて口を両手で塞ごうとした。

その二人のじゃれ合いに、今まで緊張で動けなかった恵太と亜子が顔を見合わせて吹き出した。

そんな二人の様子に安堵し、もがき合いながら小鳩を見やると同じようにどこか泣きそうな、でも恵太と亜子を愛でるような大人びた横顔が飛び込んできて。

（ああ・・・。こいつ、こんなに綺麗だったんだ・・・。）

初めてそう思った。

同時にこんな表情をさせるまでも

小鳩が深く深く、恵太を想っていることも知ることとなったのだが・

・・・

そのまま、さりげなく小鳩の想いの方向を、恵太の『才能』ヘシフトチエンジし、

撮影現場での様子を面白おかしく話して聞かせた。

亜子の緊張が解かれた頃を見計らって泰次はワザとらしく時計を見る。
やる。

「さて・・・。小鳩、そろそろ帰ろつぜ。

明日お前何時集合か知ってるか？」

「あ、ごめんなさい。わたしっいたらぜんぜん気が付かなくて・・・」

弾かれるように立ち上がろうとする亜子を、泰次は片手で制した。

「いえいえ。長居したのは俺らですから。

亜子さんは明日恵太が遅刻しない程度に、今日のこと話してやってください。

じゃないと、この姐さんがまあたでしゃばりますんで」

そういつて小鳩の頭をぐりぐりと押しながら立ち上がる。

それを合図に小鳩もその泰次の手を掴みながら腰を上げ、服を整える。

「姐さんゆうな！うちはあくまでねーちゃんやの！そこは譲れひんで！！」

「ごめんなあ、亜子ちゃん、ほんまの弟みたいでついついちょっかい出してまうんよなあ」

そう笑う小鳩に、亜子は向き合う形で深々と頭を下げた。

「あの・・・今日は・・・。本当にごめんなさい。」

小鳩さん・・・松浦監督・・・本当にありがとうございました・・・」

そう言つて顔を上げた大きな瞳は、少し揺れているようだ。

「あれ？やだなあ・・・。泣くつもりなんてないのに。」

「ごめんなさい。言いたいこと、たくさんあるんだけど・・・。」

困ったように笑い、そのまま言葉を紡げなくなる亜子と、その背中に優しく手を添える恵太。

二人の様子を微笑ましく捉えた後、ふと小鳩を見ると、同じタイミングで泰次へ視線を動かした小鳩と目が合う。

どちらからともなく頷いて、恵太と亜子に見送られながら部屋を出た。

階段を降りる二人の足音が、静寂の中響き渡る。

一段一段下る度に、幕が下りていく舞台のように
少しづつ・・・本当に少しづつ演じ切った達成感と、
同時にやってくる現実へ引き戻される焦燥感に支配されていく気が
した。

メインキャストではない自分がその波に飲まれそうなんだ。
それが当事者の小鳩は・・・。

そう思うと、泰次は後ろから響くその足音を振り返ることが出来な
かった。

一言も発しないまま、車まで戻り、ふっと視線を感じ亜子の部屋を
見上げると
無邪気に笑う亜子と、穏やかな微笑をたたえる恵太がベランダから
手を振っていた。

「小鳩」

泰次の言葉に俯いた顔を上げた小鳩に、顎で恵太と亜子を指す。途端に弾かれたように破顔し、大げさなまでに両手を大きく揺らし、二人に応える小鳩。

その様子に恵太と亜子が顔を見合わせ、一段と微笑んだ。

(・・・そこからじゃ見えないか)

泰次はその頬に一筋の涙の跡を見つけたが、あえて気付かぬ振りをして小鳩の肩にそっと触れる。

その行為に自然と絡まる視線を確認して、無言のまま車を指差し乗車を促す。

コクリ、と小さく頷いた小鳩が後部ドアに手をかけた。

その瞬間、泰次の中で思いもよらない感情が沸き起こり、小鳩の細い腕を掴んだ。

「・・・なにやってんの？お前はこっちだろ？」

「は？」

「早く乗れ」

半ば引きずるように助手席側へ誘導し、ドアを開けた。戸惑う小鳩に、自分でも信じられないくらいイラつき

「ちっ」

小さく舌打ちすると小鳩の両脇の下に自分の手を差し込み、ひょいっと抱え上げ、車高の高いディスクバリーの助手席の放り込んだ。

自分で想定していたよりずっと小さな力で浮き上がる小鳩の躯体に驚いた。

こんな小さな、細い体で色んなことに立ち向かっていたんだと泰次が気付かされた瞬間だった。

「た、泰次?!」

何が起こったのかわからない小鳩をよそに乱暴に助手席のドアを閉め、運転席へと回る。

そんな泰次と小鳩の様子に気が付いたらしい恵太が、微動だにせずその強い瞳で泰次を射抜いた。

(・・・ったく・・・。これだからガキは・・・)

そう思いながら、拳を作ると親指だけを立てたあと、自分の左胸をトントンと、2回叩いて見せた。

その様子に、恵太もやおら真剣な表情で一つ頷いて同じように自分の胸を叩いた。

(ガキのクセに生意気でやんの・・・)

乾いた笑みを吐き出し車に乗り込み、亜子のアパートを後にした。

「小鳩」

最初の信号待ちの車内で、泰次はポツリと名前を呼んだ。

「お前……。オットコマエだなあ」

「し、失礼な！！こんな可憐な乙女に向って」

今にも泣き出しそうな弱々しい切り返しの小鳩の表情を見ることも出来ない自分は
恐らくとびつきりの臆病者だろう。

「でも……。いままで俺が見てきた誰より……。イイオンナだった」

タバコに火を付けながら、ポツリと呟いた。
聞こえるか聞こえないか。
微妙な音程と音量で。

「！！！！・・・アホちゃう？泰次・・・」

小さな嗚咽に塗まみれながら吐き捨てる小鳩の強がり
愛しくて仕方がなかった。

今しがた点けたばかりのタバコの火を乱暴に消すと
前を向いたまま、小鳩の手を握り締めた。

小鳩の小さな手は、一瞬ピクリと強張ったが
次の瞬間、泰次の手は強く握り締められ、
小鳩自身によってその柔らかな頬へ寄せられていた。

「・・・なにしてんの？」

顔までも心臓になってしまったんじゃないかと思うくらい、
全身が脈を打っているというのに、出てくるのは憎まれ口ばかり。
そんな自分を心底恨みながらも、一度出た言葉をしまえずにいた。

それでも。

「しゃーないやん・・・。あ・・・あんな幸せそうに・・・わら、
笑われたら・・・」

一度あふれ出した感情はそう抑えられるはずもなく。
もはやうまく言葉を紡げないのに、
必死に自分の掌に頬を摺り寄せながら泣きじゃくる小鳩を目の前に
して

自分の中の何かが弾け飛んだ気がした。

気が付くと助手席へと体を乗り出し、右手を小鳩の後頭部をしっか
りと固定していた。

左手で小鳩の頬をそっと撫でる。

「・・・嫌だったら、全力で抵抗しろ・・・」

そう呟いて、小鳩の形のいいぷっくりとした唇へ親指を滑らせる。
そつと往復するように撫でる感覚に、一瞬身を硬くした小鳩だったが
静かに瞳を伏せた。

「俺にしとけ・・・」

耳元でそう囁いた。

小鳩は何も応えない。

それでも今は良かった。

流れ落ちる一筋の涙を、泰次の舌が重力に反して撫で上げ
形の良い、その唇へ自身のものを重ねた。

スツと離し、すぐにまた、吸い寄せられるように重ねる。

次第に深くなっていくその行為に、小鳩の両手は自然と泰次の首へ
と回された。

深夜の小さな道路の信号が青になっても、
二人を乗せた車が発車する気配はなかった。

58・響き始める不協和音

泰次と小鳩を乗せた車が角を折れたのを確認してから
恵太は小鳩の背にそつと手を沿え、室内へと促した。

部屋へ戻り、窓を閉めてカーテンを引いたとき
突然背後から亜子に抱きしめられた。

「・・・先生？」

今まで亜子からこんな風に甘えてこられたことのない恵太は
少し戸惑いながら振り返ろうとするが

亜子はその細い腕にぐつと力を込め、恵太の背にイヤイヤをするよ
うに
額を擦り付けた。

「・・・どした？」

亜子のそんな幼い仕草にふつと笑みをもらしながら、
自分の腹部に巻きついていている亜子の腕に自分の手を添え優しく解く。
するすると力が抜けたのを確認して、恵太は亜子へと向き直ると
亜子は俯いたまま、ポツリと呟いた。

「恵太君・・・心配かけて・・・ごめんね」

そんな亜子をすっばりと包み込んで、そっと頭を撫でた。

「もういいよ。先生が無事に帰って来てくれたら、それでいい」

少し身を屈め、亜子の額にそっと唇を寄せた。

今亜子が自分の腕の中にいる。

恵太はそれだけで、本当に呆れるくらい安堵していた。

ここに帰って来てくれたと言う事。

それは亜子が郁ではなく、自分を選んだという何よりも証拠だと思っただ。

「郁とは・・・ちゃんと話せた？」

「うん・・・」

俯いたまま、小さく答える亜子。

「郁、何だった？」

「・・・幸せならよかつたって、言ってくれた」

そう言つて、再び恵太へとしがみつくように体を預けて来る亜子が愛しくて、可愛くて・・・。

恵太もそのまま亜子をぎゅっと抱きしめて、幸せな溜息を一つ転がした。

「恵太君、苦しいよ・・・」

いつもならその様子に違和感を覚えたかもしれない。

しかし今は、帰宅が遅くなりみんなに迷惑をかけた罪悪感が亜子を支配して
表情を曇らせていると考えるしまつても仕方のない事だ。

この時の恵太は亜子の変化に気が付くことが出来なかった。

亜子が誰にも言えない気持ちを抱え込み、

不安と苦惱で、恵太に救いを求めるようにしがみついていることに・・・。

「幸せならよかった」

確かに郁は亜子にそう微笑みかけた。

ひとしきり郁の胸で泣いた亜子が

紅茶を淹れ直しながら言った郁の言葉を聞いたとき、
ホツとしたように表情を和らげた。

だが、郁もそう簡単に引き下がれるはずもなく。

今、亜子を捉えて離さない、その見えない敵へと話題を変えた。

「ね、亜子の彼氏ってどんなヤツ？」

亜子の座るソファアの隣に、適度な距離をとり腰を下ろす。

その言葉に、亜子の肩がピクリと跳ねたのを郁は見逃さなかった。

「あ……えつと……」

亜子は途端にしどろもどろになりながら

視線を宙へと泳がせた。

「なに？俺に言えない様な相手なの？」

「ち、違います。えっと……なんて言うか……すごく……優しい人です」

「へえ。仕事何してるの？」

「へっ?!」

亜子は持っていたカップを危うく落としそうになり慌てて包み直す。

茶色い液体が一粒、小さく跳ね亜子のスカートへ染みを作った。

しかし亜子はそれには全く気も留めず……正確には気が付いてもいなく……。

カップを握り締めながら俯いた。

その手は少し震えているようで紅茶の表面は不規則に揺れた。

「あれ？聞いちゃまずかった？」

「あ、いえ……あの……」

「ひょっとしてフリーターとか？・・・まさか無職じゃないだろ？」

そう畳み掛けても、あからさまに狼狽して何も答えられない亜子に郁はなんとも表現しがたい不調和音を胸で聞く。

おかしい。

何かがおかしい。

なぜ職業が言えない？

おおっぴらに出来ないことをしているのか？

胸につかえる違和感を抱いたまま、
更に情報を得ようと質問を変える。

「ま、いいや。年はいくつ？」

「いつ！？」

「・・・亜子？」

だんだん青ざめていく亜子の表情。
こうなると郁自身も、言いようのない不安感で戸惑いを隠せなかった。

「ちよ、ちよっと亜子、どうした？俺、そんな変なこと聞いてないよね？」

「うっっっごめんない」

「いやっっ怒ってる訳じゃないんだけどっっ。なんか心配になるよ。俺にっっ言えない様な相手なの？」

その言葉に、亜子がまた肩をピクリと弾ませた。俯いたまま、まるで貝のように口を閉じ身動きみじろ一つしない。

(なんだ、これっっ。絶対おかしいっっ)

「っっ俺の知ってるやつとか？」

「！！！！ち、違います。全然違います」

途端、勢いよく顔を上げると

亜子は異常なまでに顔を左右に振って不自然極まりなく否定した。

(ビンゴっっ？相変わらず嘘が下手だなっっ)

こうなった亜子を問い詰めてもいいことにはならないと過去の記憶を手繰り、郁はそう判断した。と同時に、後に引けない想いを募らせた。

「分かった！じゃあもう聞かない」

郁はソファーにどさつと背を預けながら
明るいトーンで言った。

その言葉がよほど意外だったのか

亜子はきょとん、とした表情で口を半開きにしたまま郁を見つめた。

「そのかわり」

郁はそういうと体を起こし、先ほど亜子に渡した数年越しの愛の証
をとり、

その四角い箱をソファー脇に置かれていた亜子のバッグの中へと強
引に納めた。

「え……？カオルさん？」

郁と自分のバッグを交互に見て

亜子は戸惑っていた。

「私、受け取れません・・・」

そう言って立ち上がるようにする亜子の手を握り、それを制した。

「だめ。俺、今の話じゃ納得できないから」

郁は今掴んだ亜子の両手で包み直し
向かい合いながら諭すように言った。

「亜子が本当に幸せなら諦める。でも今はまだその時じゃない。
亜子、彼氏の話なのにどうしてそんなに辛そうなの？」

亜子の瞳が郁の視線に耐えかねて離れようとする。
それを阻止したくて、亜子の顎を掴むと、自分の方へ固定した。

「本当に幸せなら俺にそいつ会わせて」

逃げ場を失った亜子の大きな瞳が、一段と見開かれ
苦しそうに眉をひそめると、悲しそうに揺れた。

「そいつと二人で、コレ返しに来るまで俺は諦めないから」

そう言い終わるか終わらないかで亜子の唇を荒々しく奪った。

弾かれたように逃げようとする亜子の後頭部を押さえ

それを許さない。

久しぶりに感じる亜子の体温と柔らかさ。

偶然再会したあの日から、ずっと欲しいと思っていたもの。

必死に抵抗する亜子に構うことなく貪る。

「っ!!」

刹那、鋭い痛みを感じて思わず唇を離すと

じわりと血の匂いが広がり、噛みつかれたと気付く。

ふと視線を亜子へ向けると、真っ赤な顔をして涙を浮かべ

肩で息をしながら郁を睨みつけていた。

手の甲で必死に唇を拭っている。

怒りと驚きと哀しみに満ちた目で、郁を射抜いていた。

今まで一度も見たことのないその表情に、郁は一瞬息を詰めた。

亜子は無言のまま立ち上がると、自分のバッグをひったくるように
掴み

走って郁の部屋を飛び出した。

勢いよく閉まる扉の音を聞いて我に返る。

「・・・つてえ・・・」

ポツリと呟き、唇をなぞると指先が朱色に染まる。

その艶かしい赤を眺めたあと、そろそろと立ち上がり、携帯を手にとった。

（手荒なマネ、するつもりはなかったんだけどな・・・）

自分の腕の中で震え泣く亜子を抱きしめたとき
どうしようもない独占欲が沸き上がった。

例え彼氏がいてももっと簡単に戻ってくると思っていただけに
亜子がなびかないのは想定外だった。

だが。

（奪える）

この調子なら奪える。

そう思いながらある人物の名をメモリーから呼び出し
発信ボタンを押した。

（絶対に取り返してみせる）

「・・・あ、もしもし、マサユキ？諫山です。久しぶり。

あのさ、大至急お願いしたいことがあるんだけど。・・・そう。
ん？いや、仕事関係ではないよ？

ちよつとプライベートなことなただけだね。力貸してくれない？
マサユキにかかれば、すごく簡単なことだから・・・」

リビングのカーテンを少し開け、一万粒ほどに光る人工の灯を見つ
めながら

郁は、亜子を取り戻すための行動を始めた・・・。

58・響き始める不協和音（後書き）

いつもありがとうございます。

奇数日更新を豪語していますが、何故諸事情がありままだらない事も多々あり……。

有言不実行極まりない私ですので信用度ゼロですが、ならばいっそのこと、出せるときは出してしまえ!!!
と思い、連日更新してみました。

雲行きが怪しくなってきた昨今。

じれったく、すっきりとした読了感まるでなしの展開に突入しますが
何卒お付き合いいただけたらとても嬉しいです。

それでは今後ともよろしくお願いいたします。

男は、だだっ広い部屋のフローリングにゴロン、と仰向けに寝転がると

自身の顎鬚を一方の手で撫でながら、もう一方で握っているメモを眺める。

「ヒナサワアコ・・・新米の英語教師か・・・」

誰に呟くわけでもなく声に出してみた。

背中から伝わるフローリングのひんやりとした感覚が、寝起きの体に心地よかった。

そのまましばらくの間、ゴロゴロと体を遊ばせたあと、だるそうな仕草で上体を起こした。

家具という家具も必要最低限しかなく、雑然としているその部屋でパソコンだけがまるで何かを呟くように

時々ディスプレイの表情を変えながら無機質な唸り声を上げていた。

足元に無造作に転がる煙草を器用に足でたぐりよせる。

上体を捻って今度は背後に落ちていたライターを手にする。

火を付けたらまたその辺へ投げ捨て、一息吸い込んだ後

口の端で啜えた。

おいしいとは思わない。

けれど無意識に火をつけ、灰にしてしまう自分もはや中毒なんだろうと自覚するのは容易だった。

「カオルがオンナで手こずるとはねえ・・・」

天井へ向かって、紫煙をふーっと吹き出しながら

男 生馬 榎行

は

ぼんやりと昨晚の会話を回想していた。

「ある女性のこと片っ端から調べ上げて欲しいんだ。

特に異性関係。ヒットするやつがいたら、

その男の事も全部洗い出して来てくれる？」

電話口でそう伝えてきた郁と榎行は高校時代の友人だった。

在学当時はそれほどまでに仲が良かったわけではなかったため卒業後はお互いの所在も知らないほどで。

郁は会社を興してすぐの頃、

情報収集や極秘調査などを完璧にこなす有能な人物を探していた。

そんな郁に友人が紹介してくれたのが、偶然にも榎行だった。

榎行はパソコン全般、ネット関連にも精通していたことと

その面倒見のいい性格から人脈も広く、下手な探偵や興信所よりも深く、濃密な情報を驚くほど短時間で収集した。

表向きはwebデザイナーということでフリーで仕事をしていたが、実働の大半はそう言った「裏」が大半を占めていて、知る人ぞ知るといって存在だった。

旧知の仲ということも手伝い、郁と柁行は意気投合しお互い必要なときは惜しみなく助け合うパートナーとなった。時間が合えば二人で飲みに出かけることも多い。

そんな柁行だからこそ、郁の依頼に少しだけ驚いた。

「・・・何？年貢でも納める気になったわけ？どこのご令嬢よ」

煙草を啜え、携帯を器用に肩と耳に挟んでメモの準備をする。しかし返ってきた答えは意外なもので。

「ん？どこのご令嬢でもないよ。ただの英語教師。でも・・・そうだね。年貢は納めてもいいかな。

たださ、どうもその周りうるついでる輩がいるんだよ。それも俺の知り合いっばいんだ。

結婚前に身边はきれいにしたいじゃない？」

柁行は一瞬動きを止めた。

(・・・カオルが、ただの恋愛ゴトで依頼してきたってわけか?)

体格が良く筋肉質、剛健と表現される男くさい柁行と真逆に位置するような

綺麗と形容したくなるほどの男、郁。

その郁が普通の女一人のことで自分を使うとは信じられず、戸惑いを隠せなかった。

女に苦勞した例ためしがなく、ほどほどに遊び、切る時も後腐れなく綺麗に別れる郁。

いつも修羅場になる柁行はその郁のスマートさに舌を巻く日々だった。

郁に落とせない女なんているはずがない、そうとまで思えるほど。

「マサユキ? 聞いてる?」

返事が出来ずにいた柁行の耳に、怪訝そうな郁の声が響きハッと我に返る。

「あ、ああ、悪い。電波悪かったみたいだ。で? 相手の情報は?」

話を聞きながら紙に情報を落としていく。

どうやら本当に会社がらみの縁談ではなく、普通の女のようだった。

しかも郁と昔関係があつたという。

「・・・めずらし。この程度なら俺使わなくてもカオルが自分で駆除できるんじゃないの？」

ましてやモトカノだろ？すぐ落ちると思うけど」

証行は率直な感想を述べた。

自分よりうんと恋愛能力に長けている郁が

わざわざ人の力を頼る必要がないのではないかと。

証行のその言葉に、

郁はハハハツと笑い声を上げた。

「うん。そうなんだよね。多分、俺一人でも充分だと思う。
でもさ・・・」

そこで一呼吸置いた郁。

「でもさ、完全に外堀を固めてからジワジワ攻め上げたほうが大人しくなると思わない？」

困るんだよね。また逃げられたりしたら。

だから今度はそんな気も起こらない様に調教したいんだ。

しっかり鎖に繋いでおかなくちゃ。

そのためにも切り札は、一枚でも多いほうがいいと思わない？」

刹那、柁行は啞えていた煙草をポトリ、とフローリングへと転がしていた。

感情を抑えた、冷たく抑揚のない声。

今まで聞いたことのないそれはまるで別人のようで背筋が凍りつくような衝撃だった。

「……カオル……お前……なんかあったか？」

「やだなあ、マサユキ。もののたとえだよ、たとえ。そんな本気にしないでよ。」

ただ今のオトコに興味があるだけ。
取り戻すために一つでも多くの武器が欲しいだけだよー」

先ほどとは打って変わり、甘いボイスで愉快そうに笑う郁に得体の知れぬ違和感を感じながらも柁行は調子を合わせた。

「お……おう、だよな。」

じゃっ……じゃあ、調査終わったらまた連絡するわ」

「うん。悪いけど大至急頼むね」

郁との会話を終えた後、焦げ臭さを感じ咄嗟に
先ほどまで啜っていたはずの煙草の存在を思い出す。

「あつち!!!」

慌てて拾い上げ揉み消したが、フローリングには小さな焦げの跡。

(引越しのとき・・・高くつくな、コレ)

そんなことを思いながら焦げ跡をぼんやりと眺める。
得も言えぬ疲労感にしばし放心状態でした。

怔行は満員御礼よろしく、吸殻で山盛りになっている灰皿に
無理矢理隙間を作って、短くなった煙草を揜じ込むと身支度を整え
た。

無造作に放り出された携帯を手にして一つの画像を開く。

昨晚のうちに郁から添付されたヒナサワアコとのツーショットの写
真だった。

昨日撮ったものだと言っていた。

「んな、ワルサするような顔には見えねーけどなあ・・・」

もはや一人暮らしの弊害としか言いようのない独り言を口にしながら
亜子を凝視する。

今年23歳と言う割りに幼く見えるその表情。

清楚な雰囲気ではにかなだその様子は、とても男慣れしているとは思えない。

今まで郁が付き合ってきた女性は、都会的で自立した凛々しいタイプ。

ヒナサワアコは、どう見積もってもそう見るには無理があった。

「結局嫁にするなら、おしとやかで家庭的なお嬢様タイプってか」

鼻で興味なさそうに笑うと

タッチパネル式の携帯を指で弾き画像をしまい
乱暴にジューパンの後ろポケットに突っ込んだ。

鍵を探すがなかなか見当たらず、じれったい。

あちらこちらを引つ掻き回しながら、また煙草に火をつける。
その害煙を肺まで送り届け、チラリと見やるテーブルの上。

「こんなところにあっただか」

啞え煙草のまま、乱雑に重ねられた雑誌と雑誌の間からのぞくキーケースを
掴み上げる。

当然のことながらバサバサと騒々しい音を上げながら

フローリングへと落ちていく雑誌を

柁行は特段気に留める様子もなく。

そのうちの何冊かを踏みつけて玄関へと向った。

「さあて。いっちょお顔拝見してきますかね」

施錠しながら呟いて

柁行はエレベーターへと向った。

柁行がこの日を境に、自分が厄介な人間関係に巻き込まれたと気がつくのは
もう少し後の話となる。

59・マサユキ（後書き）

いつもお読みいただきありがとうございます。
珍しく更新頻度高めです（笑）。

郁が動き始めたことによって見えなところから怪しげになってきました。

ちなみにマサユキのような、豪快な男性、嫌いではないです。
一緒に暮らすのは大変そうですが（笑）。

それではまた次話でお会いできましたら嬉しいです。

ありがとうございました。

60・張り巡らされる糸

ほどなくして2学期が始まった。

同時に郁は英恵学園の職員として正式に生徒たちにも紹介された。

どうしても撮影の都合がつかず、始業式を欠席した恵太。

そんな中、郁は完璧な笑顔を湛え、

「初めまして。諫山郁いさやまおるです。

学校全般の広報などを担当するのでみなさんとは直接授業などではお会いしませんが、

生物の教員免許を持っています。

学園生活で何か困ったことがあれば、気軽に職員室へ話に来てください。

以前は予備校に勤務していましたので、進路の相談などにも乗れるかと思っています。

国理にいる弟ほど格好良くはありませんが、僕とも仲良くしてください」

と挨拶し、生徒たちに少しの笑いと強烈な印象を与えた。

広報部長という肩書だが理事長の息子で後継者。

郁が実質的には父親の補佐をしながら勉強を積むということは、職員誰の目にも明らかだった。

その柔らかな物腰と、目を引くルックスで生徒たち…特に女子生徒の話題をさらい、あつという間に人気者となった。

郁の言葉通り、周りは進路相談と称した生徒たちでいつも賑やかだった。

それは当然恵太にも影響を与える訳で…。

「ねえ、諫山君！」

慌ただしい撮影の合間をぬって登校した恵太。始業式から数日後にやっと登校した恵太。

靴箱で上靴へと履き替えていると背後から聞きなれない声がした。

振り返ると、女子生徒数人がこちらに駆け寄ってきた。見覚えのない顔。

恐らく他クラスか、他学科だろう。

「…何？」

「諫山君で、郁先生の弟なんだよね」

『郁先生の弟』

その言葉に、ピクリと体が反応した。

「…だとしたら、何？」

そんな恵太の様子など気にも留めず、お互いの顔を見ながらキヤッキヤと騒ぎながら頬を染める。

「あのさ、郁先生の誕生日教えてくれない？」

「あと、好きなものとか！甘いもの平気？」

「郁先生って、家ではどんな感じ？
てか、今度諫山君のうちに行ってもいい？」

興奮した勢いで矢継ぎ早に恵太に畳み掛ける。

「そんなの…」

恵太が俯き加減に発した言葉がうまく聞き取れなかったのだろう。

「え？なにになに？」

一人の女子生徒が、じゃれつくように恵太の腕に絡みながら聞き返した。

恵太はその手をさっと払い、ツ、と見下ろした。

「そんなの、本人に聞いたらいい。
俺には関係ないだろ？」

感情のない低く響く声に、その生徒は顔が強張る。
周りで騒いでいた生徒も動きを止めた。

恵太は乱暴に靴をしまうと
集団の横を通り抜けた。

「な……何よ！感じ悪ー！！」

郁先生が言った感じと全然違うじゃん。弟超性格悪いしっ!!
身内だからって郁先生優しすぎー!!!」

我に返った一人がわざと聞こえるように大声を上げた。

「モデルかなんか知らないけど、チョーシ乗ってんじゃない?!
ちやほやされて天狗になってんだよ、天狗!!!」

「ホントー!!お兄さんとは大違い!!少しは郁先生見習ったら?!
モデルなら郁先生みたいになっこり笑って見せろって。」

兄弟なのにぜんっぜん似てないね!!!」

その言葉に後ろから切れ味の悪いナイフで無理矢理胸を刺されたよ
うな
えぐられたような気がした。

(・・・耐える・・・)

歩を止めてしまいそうになる自分に呟き、
大きく深呼吸してそのまま教室へと向う。

「なんか答えるよ!!!弟!!!!!!」

見えない古傷が開いて、じわりじわりと滲んでいく血液。
かさぶたになつては剥がれ、剥がれてはかさぶたになり……。
そんな古傷はちよつとした弾みですぐにまた、裂けて出血する。

もはやただの罵声に変わった雑音を
背中に受けながら徐々に感じる痛みから逃れるように
足を速めた。

そんな様子を、少し離れた場所にある職員用靴箱から腕を組みながら
郁は心底愉快そうに眺めていた。

「やるねえ。女子高生・・・上出来」

（馬鹿となんとかは使い方次第ってね・・・）

漏れる笑みを隠せず、にやりと笑う。

それを誤魔化すように口を覆い、深く息を吸ういながら顎まで撫で
下げると

郁に特別に宛がわれた広報室へと向った。

2階の角にあるその部屋の戸を開けると
そこにはもう一人のターゲットがすでにいて。

「あ、おはようございます」

ターゲットは慌ててソファから立ち上がるとペこり、と頭を下げた。

「おはよう。雛沢先生。ごめんね、遅くなっちゃって。あ、どうぞ座って」

片手で雛沢先生・・・亜子を制しながらソファの後ろを通り抜けデスクへ向う。

大きな目を少し伏せると

「失礼します」と小さく断ってまた腰を沈めた。先日あんなことがあったばかりだ。

亜子の全身からピリピリとした緊張感が漂っていた。

あの日以来、まともに会話をしていなかったが仕事という大義名分をかざして亜子呼び出した。上層部からの呼び出しとなれば、一介の教師に過ぎない亜子が断れるはずもなく

おとなしく指定された日時にもその場所へいた。

「朝から悪かったね。どうしても朝のうちに済ませたい仕事なんだよ。」

そのために雛沢先生にお願いがあった」

デスクの上に鞆を置き、上着を脱ぐ。

9月といってもまだまだ日中は暑かった。

「お願い……ですか？」

不思議そうな顔をし、首だけ郁に向ける亜子。

「といつても、もう決定事項なんだけど」

にっこり笑い、郁は亜子の向かい側に座ると

一つの資料をテーブル越しに差し出した。

「来年度の生徒募集のパンフレットの制作委員として僕の補佐をしてもらいたい。」

教師代表で紙面にも登場してもらうつもりだからよろしくね」

亜子は資料を手に取ったまま、大きく目を見開いた。

「私が……ですか？」

そんな教師代表なんて……困ります……。

もつとふさわしい先生方がたくさんいらっしやるのに……。
私みたいな新人が……。
今はまだ授業展開など勉強しなくちゃいけないことがたくさんある
ので……。」

戸惑いの表情で郁を見つめた。

「もちろんベテランの先生にもお願いするけど、
こういうのは若い先生の育成にも力を入れていて
先生と生徒がお互いに成長し合っているっていう要素も
外部進学为学校や保護者からの好感度を上げるからね」

「はぁ……。」

郁の言葉に俯くと、そのまま手元の資料に目を通しだした。

俯くと柔らかく巻いた髪が弾むように亜子の顔のラインで跳ねた。
それを耳にかける仕草は、郁が知っていた亜子よりも随分大人びて
いて。

可愛らしさだけでなく、時に漂う色香に先日強引に感じた亜子の体
温を思い出す。

少しシャープになった顎から首筋にかけてを愛でるように見つめる。

ふと、襟の隙間からチラリと覗く、朱色の模様を見つける。

上から見下ろす形にならなければ見つけることの出来ないモノ。

明らかに、「亜子のオトコ」の刻み込んだ『所有印』だった。

瞬時にそれが分かった郁は、今すぐ力づくで亜子を抑えつきたい衝動に駆られるが

一気に沸点に達した劣情は歪んだ形を成すことで冷静さを取り戻した。

ソファアの背もたれへ体を預け、肩肘を縁にかけたまま頬杖をつく。

（まだだ……。まだまだ。じわりじわりと追い詰めてやるよ、亜子。

二度と逆らえないようにね……。）

口の端だけに笑みを浮かべ、何も知らずに資料を読み耽^{ふけ}る亜子を眺め続けた。

恵太と亜子の知らない所で、郁の作戦は着々と進められていた。

まるで蜘蛛の巣を張り巡らされるように

二人の周りに逃げ場はなくなっていくのだった。

61・夏の終わり

(どうしたもんかな…)

薄暗い部屋のパソコンの前に座り、デスクに肩肘をつきながら煙草を燻らす。

幻夢のように掴み所ないまま姿を消す紫煙を眺めながら、
怔行はここ数日感じている消化不良のような後味の悪さに苛まれていた。

相手はただの一般人だ。
数日尾行しただけであっという間に
郁の知りたがっていた亜子に関する情報は集まった。

ただし。

『オトコ』が大問題だった。

マウスを動かし、数回クリックすると、画面いっぱいには亜子と『オトコ』の画像。

微笑み合っている、幸せそうなカップルの何気ない光景だった。
数枚撮った写真の全てから穏やかな空気が漂っていて……。
何も問題のない男女。

お互いの『立場』や『職業』を除けば。

それらを目にする度に、榎行はなぜか報告書を作るのをためらってしまう。

依頼主が知りたがっていることが良い結果でも悪い結果でも、真実をありのまま伝える。

それが自分の仕事だと分かっていたし、今までもそうしてきた。それが例え自分の家族でも、親友でも。

それが。

うまく制御できない気持ちを持って余っていた。

勘のいい郁のことだ。

そろそろ痺れを切らして様子を探る連絡があるだろうと気が重い作業に取り掛かったのだが……。

ピンポーン ……。

間延びした、甲高いチャイム音が響き渡り、榎行は思わずチツと舌打ちをして、無視を決め込もうとした。

しかし相手も強情なようで、何度も何度もチャイムが鳴らされた後

聞き覚えのある声が玄関先から聞こえた。

「マサユキ、いるでしょ？」

その男性にしては少し高く、甘みのかかった声に
柁行は一瞬で背筋を逆走する汗を感じた。

まるで犯罪を隠すように慌てて立ち上がると
パソコンのディスプレイの電源を切り、その周辺に散らばっていた
プリントアウト済みの写真や資料を一まとめにするとキーボードの
下敷きにして
右往左往とあたりを見直す。

床に散らばっていた卑猥な本におまけとして付いていた
これまた卑猥なDVDをワザとのようにその上から被せた。

その間も絶え間なくチャイムや郁の声が響く。

覚悟を決めて玄関を開けると少し辟易した表情の郁が
短い溜息の後、許可も聞かずに柁行の小さな城へと足を踏み入れた。

「もう、居るのは分かっているんだから早く開けなよ」

「い、いや・・・俺だってその、事情があるわけよ」

シドロモドロする証行を尻目にズンズンと部屋へと足を進めると
一瞬のうちに郁は眉をひそめた。

「……空気悪すぎだよ。いつか鳴るよ？」

部屋に充満する煙草の残り香を数回吸い込んで、天井の火災報知器
を指差した。

「ああ、大丈夫。2回くらい鳴って部屋水浸しになったから切った」

「……犯罪じゃないの？それ」

「どうか。部屋出るときに元に戻したらいいだろ」

そっぴいなながら早鐘を打つ鼓動を悟られぬよう、
窓を開けに郁の横をすり抜けた。

「マサユキ、亜子のどうなった？」

背中に単刀直入な郁の声が刺さる。

半分まで窓を開いた手が、不自然に止まった。

ほんの一瞬の間を置いてそのまま窓を全開にする。

(もうだめか・・・)

覚悟を決めて振り返ったときには・・・。

すでに郁はパソコンの画面をつけて
ドアップになっていた亜子と『オトコ』の写真の前にし、
その動きを止めていた。

「その・・・すまん・・・」

郁は居心地の悪さからなんとなく謝ってしまった怔行に反応するこ
となく、

ふーっと長めに息を吐き出すとパソコンの前に座った。

怔行の小細工をあっさりと見破り
キーボードの下から資料も取り出した。

マウスを操ると他の写真も一つ一つ丁寧に見ていた。

怔行は咎めることも出来ないまま
もう一度窓に向き直し煙草に火をつけた。

いつの間にか雨が降り出していたようで
埃をたっぷりと含んだ重い湿気が纏わり付いてくる。
それを押し返すように煙を吹き出す
今の煙草はいつも以上にまずかった。

数分も経つと、プリンターが唸り声を上げて仕事を始めた。

ゆっくりと振り返ると、そこには

先ほど初めて見せた蒼白な表情の郁の姿はすでになく、
怔行と目が合うと、いつもどおりに微笑んで見せた。

「マサユキも人が悪いんだから。ちゃんと出来てたんじゃない。報告書」

「・・・悪い」

煙草を灰皿に押し付けながらその笑顔から目を背けた。

いつものような微笑。

それは背筋に冷たいものが駆け抜けるような狂気を含んでいた。

同時に、例えようのない哀しみにも染まっかけていて。

それに気が付いたとき

直視することを避けるしか出来なかった。

「別にマサユキが謝ることないよ。まあ・・・言いにくいよね。この手のことは」

全てがプリントアウトされたことを確認すると
先ほどの資料と合わせパラパラと紙を繰る。

そして、一番

・・・。

一番亜子が幸せそうに隣を見上げて微笑む写真をクルリ、と証行へ
向けた。

「まさか、相手が『恵太』とはね・・・」

その後、証行の部屋をこそこそと漁りながら

「掃除ぐらいしなよー」とか、

「なんで封筒としゃもじが同じ場所にあるの？てか、

この家にしゃもじがあること自体奇跡じゃない！」とかくだらない
ことを言っ

て。郁は無理に明るく振舞っていた。

いつもは吸わない煙草を証行から貰つと

ゆっくりとした動作で味わいながら、時折「おいしいな」
と言った。

証行は微笑んで見せたが自分がつましく笑えていないことは自分が一番良く分かっていた。

飲みに出ようかと誘ってもみだが

郁は「まだ仕事を残してるんだ」とやんわりと断ってきた。

帰り際、玄関で

「マサユキ、ありがとう。助かった。このことは……内密にして

そう言っただけで頭を下げてきた郁。

初めてのことに戸惑い、思わず啜っていた煙草を落としそうになった。

「や、やめろよ。そんなこと。俺のほうこそ、時間かけてしまっただけで悪かった」

そう言っただけで顔の前で小さく手を重ね謝罪を示した。

「特に……。マスコミ関係。申し訳ないけど漏らさないで。これは……。かなりマズイから」

「もちろん言わねーよ。そこまで馬鹿じゃないから安心しろ」

苦笑いを浮かべる郁の肩を叩きながら約束した。

じゃ、と片手を上げて玄関を出て行く郁に

「雨が降ってる。タクシーまで使えよ」

と無理矢理、傘を押し付け見送った。

玄関の扉が重そうな音を立てて閉まると同時に
柁行は壁にもたれ掛かったまま
ズルズとルその場に座り込んだ。

「なにやってるんだろうな……。俺は」

小さくなっていく郁の足音と、次第に強まっていく雨音を聞きながら
しばらくの間、柁行は天井の模様を眺めていた。

付けっぱなしのテレビから、

今日が夏休み最後の日曜日で行楽地はどこも賑わったと
アナウンサーが伝える声が聞こえてきた。

そんな夏の終わりを告げようとする日。
ついに郁が全てを知った。

61・夏の終わり（後書き）

いつもお読みいただきましてありがとうございます。
久々の更新でごめんなさい。

諸事情ありましてパソコンへ触れる日と触れない日の差が激しく
このような不定期更新で本当に申し訳ないですが
その代わり出せるときはバンバン！出して行こうと思っていますので
どうぞ見捨てないでやってください。

さて、お話のほうはいよいよ郁が疋行によって全てを知りました。
一応一話前のお話の1週間ほど前という時間軸です。

分かりにくかったらごめんなさい。

じわじわと包围されていく感じがなんとも喉になにか
つかえる感じですが（苦笑）、お付き合いいただけたら嬉しいです。

それでは本日もありがとうございます！

62・見えない予感

都内某スタジオ。

時計はすでに23時を回っていたが撮影は一向に終わる気配がなかった。

次の撮影用の衣装に着替えた後

メイクルームが空くのを待ってメイクを直してもらった。

その僅かな休息と呼べない空き時間

控え室へ戻った恵太は携帯を閉じるとひとつ、短いため息をついた。畳の上に腰を下ろし、足を伸ばして座る。

ここ最近、国内での撮影も終盤に差し掛かりかなりハードなスケジュールが続いていた。

土日はもちろん朝から28時終了、翌日8時集合などザラになっていたし、

スタジオに籠るともはや一体何時かもわからないような生活だった。

平日はフラフラのまま学校へ行っては数時間出席して現場へと戻ったりと

朝一からまともに出席できない日々で。

気がつけばすっかり秋も深く、冬の足音が大きくなる11月になっていた。

ここ数ヶ月は休みさえない状態だった。

「国理にいるなら特別扱いはできないよ。
傍から見たら理事長の息子だし、人一倍頑張らないと甘えに見えるからね。」

それが嫌なら留年覚悟して芸能人するんだな」

一学期が始まって早々郁に呼び出され、そう言い放たれた。

今までももちろん学業優先でスケジューリングを樹がしていたし、映画の撮影で急激に仕事量が増えていたことは確かだったが特別出席日数が足りないわけでも単位が怪しいわけでもなかった。

特段呼び出されてまでされる忠告ではないと思った。

その時の威圧的な郁の態度が妙に引っ掛かったが、

日々に忙殺されそのことだけに心を傾ける訳にも行かなかった。

当然のように、亜子とまともに顔を合わせる時間すら取れずにいた。仕事の合間合間に届いているメールに短い返信を返すので精一杯だった。

亜子のほうも学校案内のパンフレット制作委員の一員になったとかで日々の授業に加え、学外の進路指導の教諭の応接や時にはこちらから出向いてPRしたりと一人でも多くの生徒を獲得しようとして

奔走しているそうぞうで。

少子化の今、少しでも多くの優秀な生徒が欲しいのはどこも同じら

しい。

お互い多忙を極める中で亜子からのメールが格段に減っていることは仕方ないと思っていた。

しかしここ1週間ばかりとメールが途絶え

着信を残しておけば必ず何かしらの応答があつたはずがそれも残らず、恵太は妙な胸騒ぎを覚えていた。

(倒れてなきやいいけど……。まさか、また郁……。?)

今すぐにでもここから抜け出して、亜子の顔を一目みたい。無事を……。色んな意味での無事を確かめたい……。そうは思つもののもとてもそれが叶えられる状態ではなくままならないわが身にジレンマを感じるわけで……。

「……。なんや百面相やなあ……。」

その声に弾かれたように顔を上げると、

目の前にある大きな姿見に小鳩が写っていた。

振り返ると控え室の扉にもたれる様にして腕を組んでいた。

「小鳩……。ノック位しろよ。」

「うわっ。おもろない優等生的な返事！18点やな。」

ニヤリ、と不敵な笑みを浮かべてこちらを見る小鳩につられて
思わず恵太も笑顔になる。

「なんだよ、それ。会話がみ合っていないし」

撮影が始まった当初から比べ

小鳩は華奢な体がより一層細くなった気がする。

こここのところ小鳩主演の連ドラも撮影が佳境で

それに伴う番宣を兼ねてのTVへの露出も増えていたし
年末年始の特番の収録も容赦なく入っているようだ。

まだまだ役者としては無名な恵太以上に休めていないのは
言わずもがな、だった。

「なんやねん、人の顔じーっと見て。

惚れたんなら抱っこしてやってもええよ？」

思わず小鳩を凝視していた恵太に

至極完璧な笑顔を湛えながら小鳩が両手を広げた。

「ハイハイ。その時はお願いします」

恵太はクツと笑みを漏らすと、そのまま携帯を閉じてバッグの中へとしまった。

もはや挨拶同然となった会話に、今までの鉛を抱えたような不安が知らず知らずのうちに水面上に浮くかのごとく軽くなっていることに気がつく。

(小鳩・・・いいヤツだな)

小鳩のことだ。

全部お見通しで恵太が一人にならないように気がけてくれたんだろう。

本当は隙も惜しんで体を休めたいところだろうに。

そう思うと、恵太は小鳩に対して

人間として役者として、尊敬の念を抱かずにはいられなかった。

「で？なんか用だったの？」

体ごと小鳩へと向き直り

畳の上に胡坐をかきながら両手を後ろへとついた。

その様子に小鳩は恵太をツツと軽く睨むように見下ろす。

「無粋やなあ。用があらへんかったら可愛い弟の顔見に来たらあかんわけ？」

まあ・・・ええわ。ケータ、今からちよつと5階行きひん？」

「5階？5階って・・・防音ブースと練習スタジオしかないよ」

恵太は自分がサククスの練習用に指定された防音の部屋がこのビルでは5階であることを思い出しながら答えた。

1階のスタジオのうちのいくつかが音楽機材など豊富な設備が整っていることから

ミュージシャンのPV撮影や、生バンドの収録などに使われることも多い。

そのため音合わせ、調弦などが出来るように

5階は全て防音の個室とスタジオのフロアーになっていた。

「知ってるで。ケータいつもそこでサククス練習してんねやる？うち疲れてるんよ。ちょっとケータのサククス聴かせて」

「・・・余計疲れるんじゃない？控え室で休むほうが・・・」

「う・ち・は・ケータのが聴きたい言うてんねん。持って来てるんやる？サククス」

小鳩はかぶせ気味にわざと声を荒げると、

恵太の控え室にあるサククスの入ったケースを顎でツイつと指し威嚇するように片頬を膨らませた。

しかしその様相はまるで小動物のようで、恵太は思わず吹き出しそうになる。

堪えなければまた「なに笑ろつてんねん!!」と小鳩に体当たりされるので

ぐっと飲み込んで平常を装いながら返事をした。

「そりゃ・・・監督がいつ使つって言い出すか分からないから・・・あるけど」

「ほんならええやん。はよ行くで」

そう言うが早いか遅いかで小鳩は恵太の控え室を先に出た。

こうなつてしまつてはお姫様の仰せのままにするより他ない。

恵太は小さく溜息をつくとやれやれ、と小さく呟いて腰を上げた。

ケースを持って立ち上がろうと中腰になつた時、

姿見に写る自分が目に留まる。

そこにはいつの間にか小鳩の我がままを楽しんでいる
案外頼の緩んだ自分がいて。

(構ってもらつて嬉しいのは、意外に俺なのかもな)

そう思いながら控え室を後にした。

すぐそばのエレベーターの前に小鳩は立っていた。

「でも小鳩、時間は？そんなに休憩ないだろ？」

「あれ？ケータ聴いてひんの？なんか泰次に緊急のお客やとかで1時間ブランクやで」

恵太の顔を見上げながら小鳩は迷惑そうに苦笑いをした。

「へえ……。この忙しいときにな……」

「なあ！ホンマ迷惑。どこのどいつやねん！
緊急か過呼吸か知りひんけど、撮り終わるまで待てっちゅーねん。
これやから無神経なヤツは……」

ぶつぶつと文句を言いながら頭上の電光表示板へ目を向ける小鳩に
つられ

恵太も数字が順次降りてくるのを、ポウッと見つめた。

この日訪れた泰次への『招かれざる客』と
恵太と小鳩の行動。

絶妙に絡み合いながら新たな歯車となって動きを早めていくのだっ
た。

『助監督が背後から近づくとロクなことは起こらない。』

これが曲がりなりに監督業を生業としている泰次の行き着く感想だ。

それは文字通り、後ろからそつと耳打ちされる情報は概していいものではないということもだが

音も立てずに忍び寄るものはいつの時代もお化けか犯罪者か、悪夢と相場は決まっている。

そして今も多聞に漏れず、その類だろう。

「・・・なあ、今思いつきり押ししてるの分かって俺に声かけてる？」

煙草を啜えたままギロリと鋭い目つきで振り返ると

背後の助監督、林田一平は怯みながらも泰次の肩に手を置き、前後に揺さぶりつける。

一平は泰次より6つ年下の28歳。

小さいころから野球少年だったというだけあって体育会系の熱血漢だった。

短髪にTシャツから良く焼けた肌が露出している。

小柄ながらも引き締まった体は今でも暇さえあればランニングをしたり、

バッテリーセンターへ出向いている賜物だった。

情に脆く感情移入しやすいため、撮影しながら感極まって泣き出した一平の嗚咽を

マイクが拾ってしまいNGになってしまったという逸話の持ち主だ。

監督としてはまだまだ未熟で使えないタイプだったがその懸命な姿勢や

憎めないキャラクターで、泰次は柄にもなく一平を育てているところだった。

大学を中退して地道に下積みを重ね、今回が初の助監督作となる。

そんな無駄に熱い、常にオーバーヒート気味な一平であることを差し引いても

今の様子はこの緊迫した撮影状況では明らかに不釣り合いなものだった。

「分かってます、分かってますけど緊急事態なんです!!」

「何がだよ。だったらここで言えよ!!」

思わず声を荒げた一平に、泰次もついカッとして応戦してしまった。一瞬のうちに視線が泰次と一平に集まる。

ただでさえ撮影が押していることや機材トラブル、役者も繁忙期になり

遅刻なども増え、泰次は疲労困憊、イライラもマックスだった。

しかし耳打ちされた言葉を聞いた途端、泰次は怒りを忘れ背筋に冷たいものが一気に流れ落ちていくのを感じた。

「……それ……本当か？」

自分でも信じられないくらい、低くか細い声が出て驚いたが今はそんなこと誰も構いはしなかった。

「ホントです。僕も今確認してきました。それで先方が……」

「来てるのか」

一平は言葉もなくコクコクと何度も首を上下に動かす。改めてその顔を見やると、汗が噴出しているのに顔面は蒼白でとても嘘や脅しに踊らされている欠片さえ見受けられなかった。

「と、とりあえず使っていない控え室にお通ししたんですが……」

「……チツ」

舌打ちを一つ転がすと、吸いかけの煙草を乱暴に灰皿に押し付け今しがたまで自分が座っていたチェアを蹴り倒しながら立ち上がり

出口へと向った。

現場スタッフたちは、泰次の余りの剣幕に物音一つ立てる術すら失い
当事者去ったその後も、ただぼんやりと消えた背中を見つめていた。

眉間に深くシワを作りながら、雑然とした廊下を歩くスピードは無
意識のうちに加速されていく。

「それで、間違いなかったんだな」

後ろから慌ててついて来る一平を振り返ることもせず、そう問うと。

「間違いもないも何も、あんなにはつきり写っていたら・・・」

周りを気にしてか声を落としながら小走りに泰次に近寄る。

（くそっ！！）

心の中で悪態をつきながら先ほどから耳に残って離れない
一平の言葉がご丁寧ToEndレスリピートされていくのが
心底気持ちが悪かった。

『惠太が週刊誌に撮られました。監督と話したいと仲介者とおっしゃる方が・・・』

自動再生を止める術もない泰次は一つの扉の前に立つと

一つ深呼吸をして息を整えた。

隣でオロオロと挙動不審に動く一平の頭をバシーっと叩きギツと睨みつける。

一瞬、頭を抱えた一平だったがすぐに姿勢を正し、コクコクを小刻みに頷いた。

一平が震える手でドアをノックする。

同時に「どうぞー」と、少し間延びした穏やかな声の中から届けられた。

その穏やかさがこの状況では逆に気味が悪かった。

泰次は一平と目が合うと顎を少しだけ動かし合図した。

一平が頷いてドアを開ける。

泰次が無言のまま中へ入ると、そこにいた人物はソファから立ち上がった状態で

にこやかに微笑んで出迎えてくれた。

この場にそぐわない、完璧なまでの笑顔。

その感情のない空無な笑顔に、ゾクリと不快感が駆け巡る。

(こいつ・・・どこかで・・・)

そんな違和感を感じている泰次に構うことなく
その人物は相変わらず笑顔を崩さないまま手を差し出し、握手を求
めてきた。

「初めまして。

いつも

『弟』

がお世話になっています。

いさやまかおる
諫山郁です」

刹那、泰次は目を大きく見開き拳を固めた。
背筋を気のせいなんかではなく冷や汗が流れていくのがはっきり分
かった。

「・・・松浦監督？」

一平に声をかけられ、その視線が自分の拳だと気が付きそこへと視線を移すと知らぬ間に震えている自分の躯体があった。泰次はその片方の拳を緩やかに解く。

人間の体はなんてうまくできているんだろう。この数秒の間に泰次のそこは汗でじわり、不快な空気をはらんでいた。

「……なるほど……そういうことですか」

ふーっと一息を転がしながら小さく呟くと、顔を拳げ一平を指差した。

「……一平、お前現場戻れ。1時間休憩入れろぞ」

「で、でも……」

「いいから戻れ。この人は俺に用があるんだ。」

お前はロケハンと明日の調整して各チームに連絡入れろ。

もたもたすんじゃねーぞ」

動揺を隠そうとするがために、いつもより格段に低く抑揚のない声色になっていたが

今はそんなことに構っている暇はなかった。
指示を受けた一平は浅く頷くと、すぐにその場を離れようとした。

「一平！・・・このこと誰にも言わない。俺個人の急な来客とだけ言え」

扉に手をかけたままの一平は、振り返ると泰次の目をじっと見つめた。

今度は深く頷き、一度だけ郁を見ると頭を下げ部屋を出て行った。

一平が出て行ったそのドアが閉まる音がやけに大きく響いた気がした。

ほんの僅かな沈黙の後、泰次が郁のほうへ向き直すと視線がぶつかった。

相変わらず、感情の欠片もない虚無な笑顔。

しかしその瞳には蒼白い炎が確かに宿っていた。

8畳ほどの控え室には長テーブルとパイプ椅子、何の変哲もないソファアールが無造作に置かれていた。

その箱の中で空調機の音だけが、やけに存在感をもって唸り声を上げていた。

郁と向かい合う形で座った泰次は、郁から差し出された数枚の写真を手を

背もたれへと体を預けた。

パイプ椅子に座り心地を求めやしないが、今日はその座面が一段と自分を拒絶しているような。

居心地の悪さに身をよじること数度。

それがなにも椅子のせいではなく、喉元から逆流してくる怒りだと気付いたとき

思わず笑みが零れていた。

黙って泰次の出方を見守っていた郁だったが、先に口を開いた。

「・・・驚いた。随分冷静なんですね。それとも・・・自棄やけ、ですか？」

視線を郁へと移動させると、まるで本心の分からない完璧な笑顔に虫唾が走った。

「……いえ……。なんだか随分舐められたもんだなあって思っ
て」

泰次は写真を軽く投げて郁へと返した。

まるでスケートを楽しむ子どものように、写真はスーツとテーブル
上を滑り

思い思いの方向へ広がり、止まった。

そこに写るのは、紛れもなく恵太と亜子で。

亜子の部屋の玄関前で笑い合う二人や
揃ってアパートを出る姿、

辺りを気にしながらも指を絡ませ合いながら歩く様子や

路上で軽くキスを交わす二人……。

どれも二人が特別な関係だと物語るには充分すぎるほどの証拠だっ
た。

「あれ？ごめんなさい、ちょっとおっしやっている意味が分からな
いんですが」

場不相応の笑顔を浮かべて、信じられないとでも言いたそうに
郁は両肘をテーブルへ乗せながら泰次を覗き込んだ。

「これ、週刊誌側からの提供じゃないでしょ。恐らく……そうで
すねえ、

【誰か】が意図的に雇った探偵なり興信所なりに依頼して作らせた
報告用の

証拠物なんじゃないですか？」

テーブルに対して横向きに座り、肩肘をついて人差し指で無造作に広がった写真をトントン、と指して見せた。

【誰か】と発言するときは、しっかりと郁を射止めながら……。

「知ってました？ 諫山さん。週刊誌ってのはね、掲載するものはゲラ版の段階か最終校正前後で僕らに回ってくるんです。」

たとえゲラを過ぎて証拠を見せろといわれても、こんなにおいしい決定打を相手側に渡す馬鹿はいません。

例え大手の事務所所属の男性アイドルグループが相手で、莫大な和解金なんかで揉み消しても

こんな乱暴な手の打ち方はしない。

もし本当にこんなマネをする編集者がいるならそいつは編集者やめたほうがいい。

一大スクープをみすみす捨てるんですから会社大損害ですよ。

ゲラの段階で別の記事で了承を取って、最終校正の段階で差し替えとかは

ま、よくある話ですけど。

それにしてもこれだけの大きなネタを例えあっちがデータを持っていたとしても

写真だけ渡すなんて考えられない」

一気に説明して、郁を見習い笑顔を手向けた。
ところが郁は表情一つ崩さずに、飄々（ひょうひょう）としながら、
ハハッと一つ笑った。

（いちいち癪に障るヤツ・・・）

「そもそもこの写真、家庭用のプリンタでプリントアウトしてます
よ。」

プロの仕事じゃない」

「・・・なるほど。どう違うんですか？」

「それは、企業秘密です。少なくとも俺の情報ではね。
教えたら諫山さん、すぐ使いそうだし」

そう言いながら小首を傾げて見せると
郁は楽しそうに続けた。

「さすが松浦監督だなあ。経験者は語るってやつですか？
人脈も思った以上ですね。」

さっき話した、助監督の彼もあなたの事務所の方たちも簡単に騙さ

れたのになあ」

そういつて声を上げて笑う。

可愛らしいいたずらを見つけてもらえた後の子どものように。

「まあ・・・あいつらはこういう経験ありませんから。経験値の差
つてやつです」

こちらにも負けじと余裕を湛えて微笑む。

「いいなあ。何度か有名な女優さんとかと噂になってましたもんね」

「何度か、じゃないです。【何度も】です」

「わー！言うなあ！！女性には事欠かれないように羨ましいなあ」

「そりゃどうも。そちらも端正なお顔立ちですから口で言うほど羨
ましいことないでしょう」

もしも音声を抜きに二人を覗き見ることが出来たのなら
久々に会った旧友が言葉を弾ませているように見えたかもしれない。

しかし実際はどちらも一步も譲らない張り詰めた空気の中で不気味に笑顔だけが取り交わされていた。

「すみませんが単刀直入にお願いします。オトモダチごっこするにはどうやら僕たち合わないようだ」

先に均衡を破ったのは泰次。

体を正面へ動かし、真剣な表情で郁と対面した。

そんな泰次に、相変わらず微笑んだままの郁。

「・・・恵太の彼女は恵太の学校の英語科の教師です。

これが世に出たら大スキャンダルだ。

監督の推察の通り、これは僕が様子のおかしい恵太を不審に思っ
て調査させたものです。

将来有望な弟がこんなことで進路を絶たれるのを眺めるだけなんて
できません。

害のあるものは駆除したいと思うのが家族でしょ？」

郁はテーブル上で遊ぶ写真を丁寧に集め、

それを眺めながら続ける。

「今後、スポンサーとして映画に参加させていただきます。

恵太のスケジュール含め、撮影状況を僕にも知らせていただけます
か？」

やっと笑みの消えた郁の瞳が泰次を捕らえた。
青白い炎が宿っているようで、ソクリと背筋が冷えていくのを感じた。

「・・・もし断れば？」

「・・・あなたは頭のいいひとだ。どうすればいいかなんて僕に聞く必要はない。
断られたって僕はなんだってしますよ」

64・氷点 2（後書き）

またもや本当に忘れた頃の更新でごめんなさい。
しかもキリの悪いところでの書き逃げ。ありえません・・・（汗）。
それなのにアクセスを徐々に覗きましたら、毎日信じられない数の
お方が訪れて下さっていて・・・。
お一人ずつに謝罪とお礼に伺いたい気分です。

詳細は活動報告へ記載させていただいていますが何しろ言い訳です。
忘れず、ご贖いくださいましてありがとうございます御座いました。

遅々としたお話で、お約束も出来ない私ですが
これからお暇が許すときは思い出していただけたら幸いです。

注意

今回週刊誌のネタを書かせていただいておりますが
内情を知らない私が、某週刊誌の編集者の友人からヒアリングさせ
てもらった内容を軸としています。

一般的な会社同様、様々な手法、プロセス、常識が存在しますし
交渉術も然りです。

これが全てではありませんし、モノヅクリの現場のプライドも色濃
く出る現場だと聞きました。

今回はあくまでお話の一部として解釈し、読み進めていただけたら
・・・と思います。

身勝手な書き手のお願いですが、よろしくお願いいたします。

65・氷点 3

郁の瞳は冷たい。

恵太の穏やかかたおやかで……しかし強い眼差しとは真逆にハコモノだけの、無機質なカーブ。

郁のその表情に……その炎に焼かれていく。

冷たく、冷たく。

氷点に達した怒りは、絶対零度へと向うのみ……。

選択肢がない事は泰次にも分かっていた。

恵太の相手がただの一般人ということではなく、

二人が教師と生徒という関係だと分かった以上こんなにリスクの高いことはない。

それなのに郁がこのネタを提示し、スポンサーの一つとして自らの社を差し出した理由は
唯一つ……。

恵太を監視することによる恵太への圧力と、二人の物理的な接点を避ける

既成事実。

これを欲していることは明らかだ。

万が一、本当に撮られたらマスコミは面白おかしく書き立てるだろう。

初々しい清潔感のある恵太と小鳩のイメージとストーリーを買ってくれたスポンサーは

一気に手を引き損害賠償問題へと発展する。

映画は公開できないまま。

泰次とその事務所は莫大な借金を背負い、そんな泰次に映画を撮らせてくれる

物好きがいると考えるのは厳しいことは安易に分かる。

そして、恵太と亜子は完全にその人生そのものを失う。

そんな危険なイメージを持たれてしまったら恐らくこの世界では生きていけない。

逆風が吹き出したら一気に転がり落ちる。

甘い世界ではない事は自分自身が肌を持って知っているし足掻こうとも消されてしまう人間を何人も見てきた。

引き剥がされた者は自ら去った者と違い、

その後も纏わり付いてくる影から逃げるように、隠れるように生活することを強いられることが多い。

下手に名が売れていたら尚のことだ。

一方の亜子も亜子で地獄だろう。

たぶらかしたただの淫乱だの背びれ尾びれが付いて

本人を置いて話だけが一人歩きしていく。

いくら本人同士が真剣で愛し合っていたといっても世間はそうは取らない。

ましてや子どもを教育する立場の人間だ。

そんな教師を雇ったと知ったら、在校生の保護者は黙ってはいない

だろう。

著名なOB・OGが出ていたらそこから容赦なく抗議の嵐で。

誰がそんなリスクを負ってまで、新人の一介の教師を雇うだろうか。

恐らくもう、二度と教壇には立てないだろう。

他の職業でうまく立ち振る舞ったとしても、そういう話はどういうわけか

誰かが仕入れてきて一生逃れることは出来ない。

否が応にも、見えすぎてしまう未来。

もし首を横に振れば、郁は自らこの写真を売り込みに行くかも知れない。

いや・・・嫉妬に狂っている今、二人を壊すためなら迷わず行くと感じた。

尤もらしい理由をつけて。

そして灰となった二人を救う振りをして

ゆっくりとゆっくりと、凍らせていくのだろう。

完全に方向を誤った郁を、もはや自分は制御できない。

だとしたら今、泰次に出来ること・・・。

それは郁の監視を受け入れ、降参した振りをしながら
郁が変な動きをしないように

逆に監視するよりほかないと思った。

そうと腹が決まれば、演じ手に回るしかない事は職業柄瞬時に理解できた。

敗北感を感じている人間として自分を作り上げる。

その視線に冷たく焼かれ、静かに目を閉じる一人の男として。

(小鳩・・・怒るだろうなあ・・・)

全く別のことを考えている泰次に気が付くはずもなく郁はその様子にクスリ、と笑いを一つ転がした。

「やっぱりあなたは賢い人だ。

今度はもっと、いいオトモダチごっこが出来そうですね」

そういつて差し出す郁の掌を無視して泰次は立ち上がった。

(冗談じゃねえ。・・・こうなったら、とこっとなん！やってやろうじゃん)

泰次は今まで我慢していた煙草に火をつけると

その害煙を一気に肺まで届け、神経の隅々まで運んだ。

「そうですね。あなたは恵太と違ってものすごく性格がいい」

腹の底からわいてくる嫌悪感を込めて、紫煙を吐き捨てる。

扉へと向うと勢いよく開け、満面の作り笑顔で郁の退室を促した。

そんな泰次の宣戦布告を知ってか知らずか。

腹立たしいほどゆっくりとした所作で仕度を整え、立ち上がった。

「恵太と似てないって、よく言われるんですよ。僕」

控え室を出る間際に立ち止まり、にっこりと微笑んだ。

「それは良かった。あなたに似なかったおかげで

どうやら才能があんた以上に・・・いや、凡人の何倍も伸びたよう
だ」

口の端で啜えたままの煙草。

隙間から実際の色以上にドス黒い煙を燻らせながら微笑んだ。

その言葉に一瞬目を見開いた郁だったが

すぐに前を向き直り、何事もなかったように無言で泰次の横を通り過ぎた。

「いい映画にしますんで！スポンサー枠で試写会ご用意しておきま
すね」

遠ざかる背中にその声をかけたが
結局郁は一度も振り返りはしなかった。

（負けてたまるか・・・）

再度含んだ紫煙を吐き出しながら
泰次は柄にもなく恵太と亜子、そして小鳩を守ろうと決意を新たに
していた。

この日を境にスタジオに郁が足を運ぶようになり、
泰次を中心に、郁と恵太に関わった人間が
氷点下の世界へと手招きをされていくこととなる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0031i/>

ジャスミン

2010年10月14日13時47分発行